着地型観光商品づくりのための

素材集

Tourism material collection

北海道の『心臓』と呼ばれたまち

小樽

～歴史を大切に紡(つむ)ぎ、携(たずさ)えて未来へ～

保存から活用へ

NPO法人 OBM

Otaru Branding & Marketing

凡例

- 本誌は令和３(2021)年１月現在の内容です。
- 本誌は識者および該当物件運営者の校正を経て編集されています。
- 本誌で使用した写真等の画像は著作権者の了解を得て掲載しています。
- 引用した文献はタイトルを、参考とした資料は資料名のみを文中に記し、巻末にそれらの発行年、発行者、編著者詳細を記載しています。
- 本誌での人名に関しては編集時点での生存者のみ「氏」表記としています。
- 元号・西暦の重複表示は歴史的エピソードのみに付与し、他は元号のみとしています。
- 「建物遺産」の「地図位置」は112Pの地図の番号を指します。
- 本誌の内容はNPO法人OBMのクレジットにより、令和３年４月からNPO法人歴史文化研究所の下記URLにて閲覧することができます。

歴史文化研究所URL　https://www.rekibunken.com

刊行に寄せて

小樽商工会議所
会　頭　山本　秀明

私が小樽商工会議所の会頭に就任したのは平成22年11月ですが、就任に伴って「一次二次産業振興」「観光振興」「港湾振興」「商業振興」の４つの新しいプロジェクトを立ち上げ、小樽商工会議所としての提言を取りまとめ具体的な事業を展開してきました。その中で観光振興については、観光都市を標榜している小樽市において、より一層のメッセージ性と機動性を発揮していく法人格をもった組織を立ち上げ、活動していくべきではないかという考えに至り、NPO法人 OBM (Otaru Branding ＆ Marketing)を平成24年11月27日に北海道からの認可を受け設立しました。

NPO法人 OBMは設立以来、小樽市からの委託事業である「北運河および周辺地域の観光戦略構想」の策定や、私が代表としてとりまとめた「小樽観光戦略構想」の小樽市への提言、「小樽港クルーズ船ウェルカムフェスタ」企画共同開催、シンポジウムの開催の中で、歴史的建造物の保存活用策の提案や、小樽版 DMOの組織化、観光税(宿泊税)導入の発案等々、様々な提言と発信を行ってきました。

今回発刊する冊子は、小樽市内において歴史的建造物の保存活用を図っているところにスポットライトを当て、「北海道の心臓と呼ばれたまち小樽」の歴史を紡いで、小樽観光の振興を目的とした着地型観光商品を企画する上での素材集と位置付けているとのことですが、以前に開催されたシンポジウムの講師を務められた方が、「小樽観光の最大の強みは『イノベーションのDNA』だと考える。その時々に先人たちが、街を良くしようと様々な努力を積み重ねてきた。これが小樽観光の現在に繋がってきている。」と話されたのが強く印象に残っております。

イノベーションとは、モノや仕組み、サービス、組織、ビジネスモデルなどに新たな考え方や技術を取り入れて、新たな価値を生み出し、社会にインパクトのある革新や刷新、変革をもたらすことを意味しております。

私たち小樽市民は、このような評価を真摯に受け止め、歩みを止めることなく、小樽観光の未来に向けた取り組みを継続していくべきと考えます。

小樽市にはいまだ活用されていない石蔵等の素材がまだあり、それらが今後の新しいムーヴメントの発現となることを期待すると同時に、この冊子が、小樽の観光振興に向けて、新たなイノベーションを沸き起こす切っ掛けと起爆剤になることを心から願っております。

令和３(2021)年３月

Contents

～目 次～

■凡例

■刊行に寄せて …… 1

■Prologue ～はじめに～ …… 3

■日本遺産（国が認定した文化観光資源）

日本遺産・北前船構成文化財リストと概要 … 6

日本遺産・炭鉄港構成文化財リストと概要 … 7

■産業遺産（歴史的な産業が残した文化）

小樽市指定歴史的建造物 …… 10

小 樽 運 河 …… 12

手 宮 線 …… 14

銀 行 街 …… 16

石 蔵 …… 18

鰊 文 化 …… 20

■運動遺産（目に見えない運動の継承）

小 樽 人 気 質 …… 24

小樽運河保存運動 …… 26

まちづくり運動その成果 …… 28

■建物遺産（再生された歴史的建造物58軒）… 31

■景観遺産（心に残る各時代の八景） …… 99

■生活遺産（市場の味を伝える市民の舌） … 103

■映像遺産（映画・ドラマのロケ地） …… 107

■Epilogue ～おわりに～ …… 110

■引用文献・参考資料紹介 …… 111

■地図（本稿関連地図）…… 112

■写真協力 …… 114

Prologue ～はじめに～

NPO法人 OBM
理事長　伊藤　正明

北海道の心臓と呼ばれたまち小樽

小林多喜二は亡くなる１年前(昭和７年)に書いた原稿「故里の顔」の中で、小樽を「人口15,6万の街並みが山腹に階段状に這い上がった港街で、広大な北海道の奥地から集まってきた産物が、そこから又内地に出て行く謂わば北海道の『心臓』みたいな都会である。」と表現しております。

当時の小樽は、色内地区に銀行街が形成され、堺町通りから南小樽駅にかけて卸売問屋が密集し繁栄していたことが窺われます。更に、1920(大正９)年の小樽市の人口は札幌市よりも多く、全国の都市で13番目であったことも、小樽市の歴史と繁栄を振り返る上で特筆すべきこととして挙げられます。

歴史を大切に紡(つむ)ぎ、携(たずさ)えて未来へ

本稿は、小樽市の歴史を紡ぎ、小樽観光の振興を目的とした着地型観光商品の素材集として編纂しました。これからの観光は、発地型から着地型に移行しつつある背景があります。着地型観光とは、これまでの事例からいえばオプショナルツアーを想像してください。現地へ行って現地のスタッフがお世話するツアーのことです。着地型観光商品はこの発想を深掘りして、現地の人間だから発掘できて企画できる商品のことです。旅行会社やネットでは紹介できない、小樽をよく知る小樽人の智恵でつくられていくことになります。

本誌の内容を、再生された歴史的建造物等を核としたのには理由があります。観光動機として「自然が豊かで食べ物が美味しく人情味がある」というのであれば、北海道中どこへ行っても共通します。しかし「歴史的建造物がある、しかも再生されている」となれば密集度と数からして道内では小樽がトップです。「小樽観光は歴史的建造物再生が牽引してきた」と言っても過言ではありません。

ちなみにアジアの人々も多数小樽に訪れていますが、日本語の看板を見て理解できなくても「この建物いいね」と建物の魅力から入店するケースも増えているほどです。

保存から活用へ

歴史的建造物が様々な再生による現場から発掘できたのは、昭和50年代、観光都市小樽を模索していた時代に、小樽に数多く残る明治以後の近代化遺産や近代建築が大きなヒントになりました。たとえば明治になる前の建物であれば、建築のほとんどは木造で、静態保存(記念館や博物館での展示)は出来ても、動態保存(実際に使って活用)には限界がありますが、近代以降であれば、現代の建築技術をもってすれば、十分に再生して活用することができ、再生に向けて動き始めたことが挙げられます。

また本誌の特徴は歴史的建造物再生の内容に「歴史的エピソード」を盛り込んだことにあります。とくにそれぞれの建物にゆかりのある歴史的人物のおもしろさや偉大さにも注目しました。

営業されている個店の細かな情報は可変的ですので、それぞれホームページ(URL)を掲載しております。したがって本誌での歴史的エピソードはまさに不変データということになります。

歴史的建造物を再生し活用している建物は本誌に掲載した以外にも多数ありますが、本冊子では編集の都合上、当時北海道の心臓と呼ばれたまちエリアを中心に、範囲を東西では静屋通り～海岸線、南北では色内３～信香といたしました。

小樽市民が小樽の歴史を再度見つめなおし、小樽の良さを感じ取ることは将来に向けてとても重要なことだと考えております。

着地型観光商品は小樽人が自由に組み合わせて商品化するものです。

この冊子が新たな小樽観光の振興に向けて、役立てていただければ幸甚です。

令和３(2021)年３月

日本遺産

国が認定した文化観光資源

日本遺産

「日本遺産」とは

文化庁が地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化・伝統を語るストーリーを認定するもので、文化財群を活用して地域活性化を図ることを目的としています。小樽市は、２つの日本遺産に認定されています。

日本遺産「北前船」

江戸時代から明治期にかけて北海道・東北・北陸と西日本を結んだ航路は経済の大動脈であり、この航路を利用した商船は北前船（きたまえぶね）と呼ばれました。船主自身が寄港地で仕入れた多種多様な商品を別の寄港地で販売する買い積み方式で利益を上げ、「動く総合商社」と形容されます。全国16道府県48市町のシリアル型日本遺産で、小樽市では７件の構成文化財が認定されています。

日本遺産「北前船」構成文化財

①日和山
（小樽市祝津３-240）

船乗りたちが出港前に日和を見た場所。明治16年に北海道で２番目となる灯台が建設され、北前船航海の目印となった。

②旧北浜地区倉庫群（小樽市色内）

北前船主が物資の保管のために建造した大規模な倉庫群。北陸の北前船主の５棟が構成文化財に認定されている。

旧北浜地区倉庫群

③旧魁陽亭
（小樽市住吉町４-７）

北前船主や船乗り、商人たちに親しまれた料亭。「開陽亭」「海陽亭」と改名し約150年営業を続けた。

④住吉神社奉納物
（小樽市住ノ江２-５-１）

船乗りたちが航海安全を祈願した神社。第一鳥居は明治32年に北前船主・大家七平と広海二三郎が寄進。

⑤船絵馬群
（龍徳寺金毘羅殿：小樽市真栄1-3-8、
恵美須神社：小樽市祝津3-161）

北前船主や船乗りたちが航海安全を祈願し、奉納した船絵馬。

⑥北前船関係古写真
（小樽市総合博物館
運河館：
小樽市色内2-1-20）

北前船及び小樽港、市街地などゆかりの場所を記録した200点を超える写真群。

⑦西川家文書
（小樽市総合博物館
運河館：
小樽市色内2-1-20）

江戸時代の場所請負人で、北前船による廻船業も営んでいた西川家の文書。

日本遺産「炭鉄港」

「炭鉄港（たんてつこう）」は、空知の「石炭」を基軸に、室蘭の「鉄鋼」、小樽の「港湾」、これらをつなぐ鉄道によって展開された北海道近代化のストーリーです。開拓から製鉄までわずか30年という短期間で独自の発展を遂げた「北の産業革命」、「炭鉄港」のドラマチックな歴史は、未来社会のあり方と新たな価値観を考えるヒントに満ちています。小樽市では６件の構成文化財が認定されています。

「炭鉄港」構成文化財

①小樽港北防波堤
（小樽市高島）

廣井勇が設計・指導し、明治41年に建設された日本初の外洋防波堤。100年以上経過した現在も機能している。

②北炭ローダー基礎
（小樽市手宮）

石炭を船に積み込むための機械が設置されていた大型ベルトコンベアの基礎部分。昭和14年建設。小樽港に唯一現存する石炭積出しの痕跡。

③色内銀行街
（旧三井物産小樽支店：小樽市色内１－９－１、
旧三菱商事小樽支店：小樽市色内１－１-12）

北日本随一の経済都市といわれた昭和初期、色内銀行街には、炭鉱経営も行う財閥系の商社が進出した。

旧三井物産小樽支店

旧三菱商事小樽支店

④手宮線跡及び付属施設
（小樽市色内）

明治15年に全線開通した官営幌内鉄道は、空知の石炭を小樽港へ運び、本州各地へもたらし日本の近代化を支えた。現在は散策路。

⑤旧手宮鉄道施設
（小樽市手宮１－３－６）

官営幌内鉄道時代から鉄道輸送の中心地であった手宮に残る鉄道施設。国指定重要文化財。

⑥小樽中央市場
（小樽市稲穂３-11-２）

市場で仕入れた鮮魚や野菜をブリキ缶に入れ、風呂敷で背負った行商人、通称「ガンガン部隊」の供給基地。

【参考資料】
日本遺産『本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命「炭鉄港」～』ストーリー（文化庁ＨＰ）、
小樽文化遺産ポータル（ＨＰ）

産業遺産

歴史的な産業が残した文化

小樽市指定 歴史的建造物一覧

和光荘

小樽市指定歴史的建造物について

小樽市では、昭和58(1983)年に「小樽市歴史的建造物及び景観地区保全条例」を制定し、31棟の「歴史的建造物」を指定しました。

さらに平成４(1992)年には、前条例を発展的に解消し、総合的な都市景観の保全を図るために「小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観条例」を制定し、これら貴重な建物の保存を図るべく基礎的な資料を作成するため、市内全域を対象に歴史的建造物の実態調査を行いました。

調査は日本建築学会北海道支部に委託し、同支部に「小樽市歴史的建造物実態調査委員会」が組織されました。

第１次調査では、建築の歴史上貴重であるものや地域の歴史的背景から重要であるものを考慮して選択し、主として外観の状況から構造、屋根、外壁など９つの項目に分けて材質や様式などを調べました。この対象になった建物は2,357棟でした。第２次調査では、このうちから主要な508棟を選出し、聞き取り調査や内部調査などを行い、建物の沿革や特長、設計者などの資料収集を実施しました。

これらの調査を経て景観審議会からの答申を受け、保全すべきものを「小樽市登録歴史的建造物」として登録し、このうちからさらに所有者の方々の同意を得て指定したのが「小樽市指定歴史的建造物」です。現在、「小樽市指定歴史的建造物」は79棟あります。

＜小樽市ホームページ＞

指定番号	建物の名称	建設年次	構造	建設時の用途	住所	指定年月日	現在
第１号	大家倉庫	明治24年	木骨石造1階建	倉庫	色内2－3－11	S60. 7. 23	
第２号	魁陽亭	明治29年以降	木造2階建	料亭	住吉町4－7	S60. 7. 23	
第４号	遠藤又兵衛邸	明治35年	木造1階建	邸宅	富岡1－9－4	S60. 7. 23	立正佼成会小樽教会
第５号	百十三銀行小樽支店	明治41年	木骨石造2階建	銀行	堺町1－25	S60. 7. 23	小樽浪漫館
第６号	北海道銀行本店	明治45年	石造2階建	銀行	色内1－8－6	S60. 7. 23	小樽バイン
第７号	名取高三郎商店ナトリ	明治39年以降	木骨石造2階建	店舗	色内1－1－8	S60. 7. 23	大正硝子館
第８号	岩永時計店	明治30年代	木骨石造2階建	店舗	堺町1－21	S60. 7. 23	小樽オルゴール堂堺町店
第９号	第百十三国立銀行小樽支店	明治28年	木骨石造1階建	銀行	堺町1－20	S60. 7. 23	オルゴール堂海鳴楼
第10号	小樽商工会議所	昭和８年	鉄筋コンクリート造3階建	事務所	色内1－6－32	S60. 7. 23	
第11号	小樽市庁舎	昭和８年	鉄筋コンクリート造3階建	市庁舎	花園2－12－1	S60. 7. 23	小樽市庁舎本館
第12号	小樽区公会堂	明治44年	木造1階建	宿泊所	花園5－2－1	S60. 7. 23	小樽市公会堂
	岡崎家能舞台	大正15年	木造1階建	能楽堂	花園5－2－1	S60. 7. 23	小樽市能楽堂
第13号	小樽倉庫	明治27年	木骨石造1階建	倉庫	色内2－1－20	S60. 7. 23	小樽市総合博物館運河館など
第15号	早川支店	明治37年	木骨石造2階建	店舗	色内2－4－7	S61. 4. 11	Vivresaviehmi－yyu
第16号	越中屋ホテル	昭和６年	鉄筋コンクリート造4階建	旅館	色内1－8－25	S63. 7. 15	アンワインドホテル
第17号	共成㈱	大正４年	煉瓦造2階建	店舗	住吉町4－1	H1. 3. 29	小樽オルゴール堂
第18号	三菱銀行小樽支店	大正11年	鉄筋コンクリート造4階建	銀行	色内1－1－12	H2. 7. 5	小樽運河ターミナル
第19号	安田銀行小樽支店	昭和５年	鉄筋コンクリート造2階建	銀行	色内2－11－1	H2. 12. 22	
第20号	渋澤倉庫	明治25年頃	木骨石造1階建	倉庫	色内3－3－20	H3. 7. 17	小樽ゴールドストーン
第21号	木村倉庫	明治24年	木骨石造2階建	倉庫	堺町7－26	H3. 7. 17	北一硝子三号館
第22号	増田倉庫	明治36年	木骨石造2階建	倉庫	色内3－10－19	H3. 7. 17	
第23号	上勢友吉商店	大正10年	石造3階建	店舗	入船1－1－5	H3. 7. 17	遊工房
第24号	第一銀行小樽支店	大正13年	鉄筋コンクリート造4階建	銀行	色内1－10－21	H3. 7. 17	ﾄｯﾌﾟｼｪﾝﾄ・ﾌｧｯｼｮﾝ・ｺﾌﾞ㈱
第25号	第四十七銀行小樽支店	昭和11年	木造2階建	銀行	色内1－6－25	H3. 7. 17	㈱渋谷建設
第26号	猪股邸	明治39年	木造2階建	邸宅	住吉町	H3. 7. 17	
第27号	寿原邸	大正元年	木造2階建	邸宅	東雲町8－1	H3. 7. 17	旧寿原邸
第28号	小樽聖公会	明治40年	木造１階建	教会	東雲町10－5	H3. 7. 17	
第29号	小樽組合基督教会	大正15年	木造2階建	教会	花園4－20－18	H3. 7. 17	小樽公園通教会
第30号	三井物産小樽支店	昭和12年	鉄筋コンクリート造3階建	事務所	色内1－9－1	H3. 7. 17	松田ビル
第31号	北海道拓殖銀行小樽支店	大正12年	鉄筋コンクリート造4階建	銀行	色内1－3－1	H3. 10. 4	小樽芸術村似鳥美術館
第32号	岡川薬局	昭和5年	木造3階建	店舗	若松1－7－7	H5. 11. 24	(旧) 岡川薬局
第33号	久保商店	明治40年	木造2階建	店舗	堺町4－4	H5. 11. 24	くぼ家
第34号	金子元三郎商店	明治20年	木骨石造2階建	店舗	堺町1－22	H5. 11. 24	瑠璃工房
第36号	田中酒造店	昭和２年	木造2階建	店舗	色内3－2－5	H5. 11. 24	
第37号	渡邊酒造店	昭和5年	木造3階建	店舗	稲穂4－6－1	H5. 11. 24	
第38号	中越銀行小樽支店	大正13年	鉄筋コンクリート造2階建	銀行	入船1－1－2	H5. 11. 24	銀の鐘
第39号	北海道庁土木部小樽築港事務所見張所	昭和10年	木造1階建	事務所	築港2－2	H5. 11. 24	
第40号	通信電設浜ビル	昭和8年	鉄筋コンクリート造4階建	事務所	色内1－2－18	H5. 11. 24	協和浜ビル
第41号	戸出物産小樽支店	大正15年	木造一部煉瓦造3階建	事務所	入船1－1－1	H5. 11. 24	
第42号	嶋谷倉庫	明治25年	木骨石造1階建	倉庫	色内1－2－18	H5. 11. 24	
第43号	作左部商店蔵	明治初期	土蔵造2階建	蔵	住吉町15－3	H5. 11. 24	シーボート
第45号	高島町役場庁舎	昭和10年	木造2階建	役場	高島4－1－1	H5. 11. 24	
第46号	花園町会館	昭和２年	木造2階建	会館	花園4－3－8	H5. 11. 24	花園会館
第47号	潮見台浄水場管理棟	昭和２年	鉄筋コンクリート造1階建	浄水場	潮見台4－143	H5. 11. 24	
第49号	天上寺本堂	明治23年	木造1階建	寺院	入船4－32－1	H6. 5. 12	

指定番号	建物の名称	建設年次	構造	建設時の用途	住所	指定年月日	現在
第50号	水天宮本殿、拝殿	大正８年	木造1階建	神社	相生町3－1	H6. 5. 12	
第51号	高橋倉庫	大正12年	木骨石造2階建	倉庫	色内1−2−17	H6. 5. 12	小樽芸術村ステンドグラス美術館
第52号	荒田商会	昭和10年	木造2階建	事務所	色内1−2−17	H6. 5. 12	小樽芸術村アール・アーヴォーグラス館
第53号	日本石油㈱倉庫	大正９年	木骨石造1階建	倉庫	色内3－6－18	H6. 5. 12	運河公園休憩棟
第54号	日本郵船㈱小樽支店残荷倉庫	明治39年	石造1階建	倉庫	色内3－7－6	H6. 5. 12	
第55号	嶋谷汽船㈱社長宅	昭和２年	木造2階建	邸宅	富岡2－25－32	H6. 5. 12	
第57号	日本郵船㈱支店長社宅	明治末期	木造1階建	邸宅	末広町3－7	H6. 5. 12	
第58号	恵美須神社本殿	文久3年(1863年)	木造1階建	神社	祝津3－161	H6. 5. 12	
第59号	徳源寺本堂	明治30年	木造1階建	寺院	塩谷2－25－1	H6. 5. 12	
第60号	龍徳寺本堂	明治９年	木造1階建	寺院	真栄1－3－8	H6. 7. 7	
第61号	住吉神社社務所	昭和９年	木造1階建	神社	住ノ江2－5－1	H6. 8. 2	
第62号	白鳥家番屋	明治10年代	木造1階建	漁家	祝津3－191	H7. 8. 28	
第63号	篠田倉庫	大正14年	木骨煉瓦造2階建	倉庫	港町5－4	H7. 11. 1	小樽運河レストラン鎧
第64号	岡崎倉庫（３棟）						
	１号棟	明治38年	木骨石造1階一部2階建	倉庫	信香町2－2	H8. 3. 27	田中酒造㈱亀甲蔵
	２、３号棟	明治39年			信香町2－4		
第65号	右近倉庫	明治27年	木骨石造1階建	倉庫	色内3－10－18	H8. 7. 15	
第66号	広海倉庫	明治22年	木骨石造1階建	倉庫	色内3－10－19	H10. 6. 8	
第67号	塩田別邸	正元年頃	母屋：木造1階一部2階建蔵：木骨石造2階建	邸宅	入船2－8－1	H11. 5. 17	夢二亭
第68号	塚本商店	大正９年	木骨鉄網コンクリート造2階建	店舗	色内1－6－27	H13. 3. 27	cafe 色内食堂
第69号	小樽無尽㈱本店	昭和10年	鉄筋コンクリート造3階建	銀行	花園4－1－1	H14. 5. 1	おたる無尽ビル
第70号	カトリック富岡教会	昭和４年	木造一部鉄筋コンクリート造2階建	教会	富岡1−21−25	H16. 2. 25	カトリック小樽教会富岡聖堂
第71号	板谷邸	大正15年～昭和2年	母屋：木造2階　蔵：石造2階	邸宅	東雲町1−19	H17. 6. 10	海宝樓
第72号	小堀商店	昭和７年	木骨鉄網コンクリート造2階建	店舗	住吉町14−4	H23. 5. 26	
第73号	向井呉服店支店倉庫	明治40年	煉瓦造4階建	倉庫	稲穂1−4−13	H23. 5. 26	
第74号	坂牛邸	昭和２年	木造2階建	邸宅	入船5−8−15	H23. 5. 26	
第75号	猪俣邸	明治33年	木造2階建	邸宅	桜1−1	H24. 10. 19	銀鱗荘
第76号	北海製罐倉庫㈱					H24. 10. 19	北海製罐㈱小樽工場
	旧第２倉庫	大正11年	鉄筋コンクリート造2階建	倉庫	色内3−1		
	第３倉庫	大正13年	鉄筋コンクリート造4階建	倉庫	港町4−6		
	工場	昭和6年	鉄筋コンクリート造3階建	工場	色内3−1		
	事務所棟	昭和10年	鉄筋コンクリート造4階、地下1階	事務所	色内3−1		
第77号	浪華倉庫	大正14年	木骨石造1階建	倉庫	港町6−5	H24. 10. 19	小樽運河食堂
第78号	水上歯科医院	昭和８年	木造3階建	医院	住ノ江1−6−26	H25. 7. 25	
第79号	光亭	昭和12年	木造2階建	料亭	東雲町3−8	H25. 7. 25	罐友倶楽部
第80号	前堀商店	昭和初期	木骨鉄網コンクリート造一部木骨石造3階建	店舗／邸宅	色内2−9−22	H26. 7. 2	
第81号	丸ヨ白方支店	明治末期～昭和6年	木造一部木骨石造3階建	店舗／邸宅	稲穂2−14−1	H26. 7. 2	December3
第82号	小樽保証牛乳株式会社	昭和11年	木造2階建	事務所	花園2−12−13	H28. 7. 25	小樽ミルク・プラント
第83号	磯野支店倉庫	明治39年	煉瓦造2階建	倉庫	色内2−2−14	H28. 7. 25	ISO
第84号	杉森喜一郎邸	昭和初期	鉄筋コンクリート造2階建	邸宅	緑3−9−5	H28. 7. 25	小樽ゲストハウス／バスタクラブ
第85号	北海雑穀株式会社	明治42年以前	木骨石造2階建	店舗	堺町1−18	H29. 4. 25	小樽硝子の灯・彩や

※指定番号第３号、14号、35号、44号、48号、56号は欠番のため2020年12月現在79棟

右近倉庫

広海倉庫

三井物産

小樽のまちづくり運動と歴史的建造物

今般「シビックプライド」という言葉がよく聞かれます。いわば「街の誇り」と直訳できますが、小樽の「歴史的建造物とその再生」が「シビックプライド」に位置づけられるまでには、長い道のりがありました。

昭和48(1973)年に誕生した「小樽運河を守る会発起人会」は、解体される臨港線沿線の石造倉庫を目の当たりにし、運河も埋め立てられると知った市民の危機感から誕生し、その後10年に及ぶ小樽運河保存運動の中で、

「運河沿線だけではないぞ！小樽には素晴らしい建築群がたくさんあるのだから、こいつを活かすことが小樽の大事な個性になる！」

と認識することになるのです。つまり当時の中央集権的開発で金太郎飴のように、どこにでもある風景へのアンチテーゼとして、小樽の歴史が育んだ「個性」に開眼しました。それらが目に見えるばかりか、目立つ存在であったことは、実に恵まれた小樽だったといえます。

それ以降、右に示す22のまちづくり団体が、小樽の歴史的建造物再生を目指し、様々な角度から微に入り細に入る運動を起こし、その価値観を育んできました。その成果として、小樽は国際的な観光都市に成長し、小樽の個性的な観光を歴史的建造物再生が牽引してきたのです。

令和元(2019)年５月25日に開催された「小樽100年プロジェクト･セミナー」は､「ちょっと待てよ！歴史的建造物再生に異存はないが、小樽の歴史的建造物は自然災害が頻繁に発生しているのに耐震補強さえされていない、経済の成長が当たり前でない時代に、所有者のやむを得ない事情で解体されてしまう場合もあるぞ！再生の前に維持されることも大事だ！」というテーマで学び、国からの支援や小樽市の自助努力による「歴史的建造物維持と歴史的建造物再生」を訴えました。この方針には、令和元(2019)年時点で小樽の30のまちづくり団体が賛同し「小樽宣言」を発信、翌日の全国町並み保存連盟総会において「支持・賛同決議」がなされました。

●小樽の歴史的建造物再生に向けたまちづくり運動

- 小樽運河を守る会「運河の保存」1973－1984
- ポートフェスティバルインオタル実行委員会「運河周辺のポテンシャリティを表現」1978－1994
- 小樽青年会議所「歩こう。見よう。小樽ふるさとへの路。」1979－1992
- 小樽市民会議「行政と民間の橋渡し」1982－
- 小樽再生フォーラム「運河保存の精神継承」1985－
- オタルサマーフェスティバル実行委員会「銀行街のポテンシャリティを表現」1986－1994
- 能に親しむ会「岡崎家能舞台と能の復興」1986－2006
- 小樽フロンティア21「北海道鉄道発祥の意義の普及」1993－
- 小樽塾「商都小樽の復活」1995－
- 小樽まちづくり協議会「旧手宮線の活用」1996－
- 小樽観光誘致促進協議会「観光の振興」1998－2007
- 小樽雪あかりの路実行委員会「冬の風物詩」1998－
- 廣井勇･伊藤長右衛門胸像帰還実行委員会「歴史偉人の顕彰」1999
- NPO法人小樽トラスト「歴史と文化のまちづくり」2002－
- NPO法人歴史文化研究所「歴史を未来の資源に」2004－
- 小樽教育旅行誘致促進実行委員会「教育観光プログラム」2005－
- 小樽ワークス「坂牛邸の再生とアートなまちづくり」2008－
- 旧岡崎家能舞台を生かす会「能舞台利用促進と再建」2007－
- NPO法人北海道鉄道文化保存会「鉄道文化のまちづくり」2008－
- NPO法人小樽民家再生プロジェクト「古民家再生」2012－
- NPO法人OBM「観光戦略と北運河再開発」2012－
- 小樽100年プロジェクト・セミナー「歴史的建造物の保全」2019

●小樽100年プロジェクト発起人30団体（順不同）

小樽商工会議所、一般社団法人北海道中小企業家同友会 しりべし・小樽支部、一般社団法人小樽観光協会、一般社団法人小樽青年会議所、小樽雪あかりの路実行委員会、一般社団法人北海道建築士会小樽支部、一般社団法人日本アニメみらい協会、一般社団法人北海道建築士事務所協会小樽支部、NPO法人歴史文化研究所、NPO法人小樽民家再生プロジェクト、NPO法人 OBM、NPO法人おたる祝津たなげ会、小樽堺町通り商店街振興組合、小樽職人の会、小樽再生フォーラム、小樽教育旅行誘致促進実行委員会、小樽石蔵再生会、小樽民泊研究会、NPO小樽ワークス、小樽観光ガイドクラブ、小樽おもてなしボランティアの会、おたる案内人ボランティアガイドの会、旧岡崎家能舞台を生かす会、小樽・朝里のまちづくりの会、朝里にまちづくりセンターを創る会、おたる祝津にしん群来祭り実行委員会、小樽市民会議、小樽龍馬会、色内復興会発起人会、小樽100年プロジェクト・セミナー実行委員会

小樽100年プロジェクト･セミナーのセレモニー

小樽100年プロジェクト･セミナーの基調講演

小樽運河

◢そもそも運河って？

運河とは、水運のための人工水路で治水の一つです。治水は、灌漑、水路連絡、排水、給水などを目的とし、小樽運河は水路連絡を目的として造られています。歴史で最も古いのは、紀元前500年に北京と浙江省を繋ぐ京杭大運河で、これは2014年世界遺産に指定されています。日本には運河が89ヶ所あり、1614年：高瀬川(京都府) 9.7km、1615年道頓堀(大阪府) 2.5km、1654年利根川(千葉・茨木県)25km、1894年琵琶湖疎水８kmが有名で、小樽運河は1923年約1.4kmです。

◢小樽運河の特徴は？

小樽運河の特徴は湾曲した海岸に平行して沖を埋め立てたため、「湾曲の美しさ」「水辺と倉庫が一体となった独自の景観」「港湾運河を観光運河に再生」、そして「市民運動の成果」が４大特徴といわれています。

倉庫と一体となった運河の景観

◢なぜ小樽運河は造られたの？

明治期の小樽港は開拓時代の北海道の玄関口であったため、開拓に必要な物資を運ぶ物流港でした(これに対し観光は人流といわれています)。小樽港は行政の中心地札幌に近く、天然の良港(湾に囲まれ、底が深い)だったからです。これらの物資の荷役(荷物の積み卸し)をスムーズにするには、小樽港は大きな船が着岸できるほど深くないため、沖止まりの船から艀に荷を移し、艀から倉庫に収納する荷役が一般的でした(埠頭が一般化していない時代では全国でも沖止まり)。したがって艀荷役の効率化を目的として埋立によって対岸を造成したのが小樽運河です。

運河造成以前の様子＜小樽市総合博物館 蔵＞

◢明治にも運河論争が？

港湾荷役でベストなのは大きな船でも着岸できる「埠頭」です。小樽港に入港する船が多くなる明治30年代、最初はこの案が提起されたのですが、それを裏で画策していたのが北海道炭礦鉄道という大企業でした。幌内の石炭を運ぶ幌内鉄道を経営していた会社です。そこで「大企業の勝手で公共事業するのはいけない」との批判と、埠頭は高額な費用が必要であったこと、そして当時の港湾技術の第一人者廣井勇の助言もあって「運河」に決定し、大正12(1923)年に竣工しました。廣井の助言の意図は「埠頭は将来に期し、多くの港湾労働者が路頭に迷わずに従事できるため」と人間味と段階を踏んだ助言といわれています。

艀が接岸する運河造成後の様子＜小樽市総合博物館 蔵＞

◢では小樽港には埠頭は？

もちろん廣井の指摘通り後年に埠頭は造られました。昭和15年第一埠頭、昭和25年第二埠頭、昭和42年第三埠頭(延長含む)、昭和47年中央埠頭、昭和54年色内埠頭、昭和56年勝納埠頭、平成

小樽港に埠頭が造成されていく様子
＜小樽市広報公聴課 蔵＞

16年港町埠頭竣工(第一埠頭の拡幅) が時代のニーズとともに造成されています。

ちなみに小樽港は明治22年「特別輸出港(限定品の輸出許可)」、明治32年「開港場(輸出が可能な港)」、昭和26年「重要港湾(国際・国内海上輸送網の拠点、国の利害に重大な関係を有する港湾)」、平成23年「外航クルーズの日本海側拠点港」といった指定変遷を歩んで来ました。

平成17年以後の小樽港 <小樽市広報公聴課 蔵>

運河は時代遅れ？

小樽運河は大正12(1923)年竣工し、大正13年には艀が595隻も活躍するほどの活気を呈しましたが、港湾荷役は昭和に入り、より近代的な埠頭建設へ向かい、運河の活気はおよそ10年で停滞してしまいます。その結果、戦前戦後には3つの連結する川からの排水、廃船などの放置、ヘドロからの悪臭が漂い、「無用の長物」といわれ、関係者以外立ち寄らないデッドゾーンとなるのです。

放置された運河<小樽市総合博物館 蔵>

昭和の運河論争って？

昭和40年代には自動車社会となり、昭和41(1966)年に小樽市は都市計画決定として「道道臨港線」をつくり、昭和46年に予定されていた高速道路に連絡する道路計画を発表します。想像して見てください。この時代は日本全国が高度経済成長に沸き返り、行政・経済・文化はそれぞれ信頼して機能分担していましたので、昭和41年の都市計画発表に誰もNoとする問題意識を持ちませんでした。

昭和47年有幌倉庫の解体<井上 雅博 氏>

ところが昭和46～48年にかけて、臨港線沿線の石造倉庫が道路拡幅のためどんどん壊されていくのを目の当たりにした市民の中に「このままでは運河も埋め立てられ、倉庫も壊されて小樽の歴史も個性も無に帰す」と思う人々が声を上げ、昭和50(1975)年に「小樽運河を守る会」が設立され、一方昭和51(1976)年に「道道臨港線早期完成促進期成会」も設立され、戦いの火ぶたが切られるのです。

どんな戦い？

運河幅20mと40mの境

埋立派は小樽市、小樽市議会、小樽商工会議所、小樽港湾業界という、いわば小樽の政治経済のリーダー層の集まりに対し、保存派は主婦、教員、零細企業、文化人といった陣容でしたので、大人と子供ほどの違いがありましたが、保存派は以後、若者や全国に波紋を拡げ、加えて大企業の西武流通グループが味方についたばかりか、昭和58年には埋立派の商工会議所会頭ら3人が保存派に味方するようになり、小樽市民の優に半分以上は「運河は残しきれいに整備して観光都市にしよう」と世論まで加勢するようになるのです。

その結果、「南側(札幌寄)6割の運河を半分埋立道路にし、半分残して整備する」といった政治的決断が昭和59(1984)年に下され、昭和61(1986)年に今の観光運河が竣工されました。

小樽運河保存運動が観光につながったの？

当時「運河は残しきれいに整備して観光都市にしよう」といった世論に加え、小樽運河保存運動が提起してきた「歴史的街並みを活かした小樽独自のまちづくりをしよう」が、後の小樽観光の旗印になり、今日では現存する歴史的建造物およそ1000棟のうち200棟が再生され、小樽観光を牽引しているのです。

40年前には誰も小樽が観光都市になるなど想像もしていなかったのです。今日では毎年700～800万人が訪れる全国区、いや国際的な観光地に成長し、小樽の観光関係者が「DMO」設立に向け、いわば小樽観光第二章が始まっています。

手宮線

明治13年張碓で馬車道づくりの指導に当たるクロフォード
＜北海道大学附属図書館北方資料室 蔵＞

手宮線はなぜ敷かれたの？

明治政府樹立時は押し寄せる帝国主義に対抗するため、中央集権の強化と近代産業の移植を急ぎました。近代産業では生産性向上のための機械化が最大の課題で、同時にエネルギーの調達も急務でした。北海道ではお雇い外国人らの調査により幌内（ほろない）の石炭が発見・確認され、採掘された石炭を如何に運搬するかが課題でした。結果的に小樽港を積み出し港として、幌内～手宮間を鉄道で運搬する決定が下されました。官営幌内鉄道は客車として人も運びましたが、由来は貨車として石炭運搬を目的として敷設されたものです。近代化を急ぐ日本にとって、燃料となる石炭は膨大な国家予算をかけても、大きな価値を持っていたのです。

この官営幌内鉄道の指導に当たったのが、お雇い外国人でアメリカから招いたジョセフ・クロフォードでした。難関は札幌と小樽の間にある張碓の海岸線でしたが、明治13(1880)年1月8日から工事を着工以来、なんと11ヶ月半後の11月28日には汽車運転式を挙行し、手宮・開運町・銭函・軽川（→手稲）・琴似・札幌停車場開業に至っています。

明治13年木造の高架を走る義経号＜北海道大学附属図書館北方資料室 蔵＞

明治14年以降入船鉄橋を走る蒸気機関車＜小樽市総合博物館 蔵＞

現在の小樽駅の鉄道とは違うの？

北海道初の鉄道はすでに明治13(1880)年に小樽～札幌、明治15(1882)年に小樽～幌内(現三笠市)が開通し、北海道炭礦鉄道経営時には「幌内線」と呼ばれましたが、明治42(1909)年、鉄道院は鉄道線路名称制定によって、一本の路線でも南小樽～手宮間の2.8kmの名称を「手宮線」とし、岩見沢～幌内及び幌内太(現在の三笠)～幾春別間の20.8kmを「幌内線」と名称を区別しています。

花園付近　国鉄の電化で電車が走っているのが函館本線
右側の一段下に通るのが手宮線
＜小樽市広報公聴課 蔵＞

昭和戦前現小樽駅から出発を待つガンガン部隊＜小樽市広報公聴課 蔵＞

一方明治36年開通の北海道鉄道は船舶の代替として人も物も運ぶもので、函館と今の南小樽を結ぶ路線が敷設され、明治42年に「函館本線」と呼ぶようになります。

したがって小樽には明治36年以後、北海道鉄道と北海道炭礦鉄道幌内線が敷かれたことになります。幌内線は小樽の手宮駅を起点とし、函館本線は函館から来て長万部～倶知安～蘭島～塩谷～小樽のコースをたどり、北海道鉄道は南小樽まで、そこから札幌までは北炭幌内線となっています。

幌内鉄道は誰が経営していたの？

明治13(1880)年に開拓使が幌内鉄道を敷設し、その後工部省、農商務省を経て明治19(1886)年から北海道庁に変わりますが、明治21(1888)年には半官半民で北有社、明治22(1889)年から北海道炭礦鉄道会社が幌内炭鉱も鉄道も運営、明治39

(1906)年にはまた国営となり、昭和60(1985)年に廃線となっています。

廃線後はどうなったの？

廃線前の昭和55(1980)年に青年会議所ＯＢによって「義経･しづかランデブー」を開催し、「鉄道の街小樽」の起点となります。平成５(1993)年にはフロンティア21(谷内馨一代表)が旧手宮線の有効利用を議論し、平成７(1995)年青年会議所(芳川雅勝代表)によって「歩こう見ようフロンティアロード・スタンプラリー」が開催まれています。本格的にオール小樽で議論されたのが同年に設けられた「旧国鉄手宮線活用打ち合わせ会議」でした。小樽市が事務局となり26のまちづくり団体で議論が行われ、平成８(1996)年に「交通系＆遊歩道系の両論併記」で小樽市長に答申します。しかし同年「小樽まちづくり協議会」が設立され、平成９(1997)年３～９月計６回に亘る「小樽まちづくり連続シンポジウム」を開催し、交通系の可能性を追求し、世論に訴えました。こうした運動の成果として、平成19(2007)年ＪＲ北海道から小樽市土地開発公社(市営)が先行取得し(1,160mに及ぶ細長い線路用地の15,218.31平米を総額１億7,900万円で)、平成28(2016)に散策路が開通しています。現状(2020年)は小樽市総合博物館～寿司屋通り約1.6kmまでが整備され、寿司屋通り～南小樽駅約1.15kmはＪＲ北海道所有で廃線状態のままです。

平成９年小樽まちづくり協議会提案の路面電車イメージ

平成９年小樽まちづくり協議会提案の文学館横の手宮線イメージ

散策路はどんな特徴があるの？

平成29年整備後の手宮線散策路

長い鉄路の残る公園(散策路)は全国でもここだけといわれています。これは「小樽まちづくり協議会」の何度にも亘る市との交渉の成果でした。完成の平成28年から、市民の散策や通勤の道として愛され、今日では観光客も写真を撮ることが増えてきました。これも港湾運河が観光運河に再生されたように、運搬鉄道が散策鉄道に再生されたことになります。いずれも市民運動の努力が媒介となって変革されたものです。

踏切はどうなったの？

下記に旧手宮線の踏切名称と近隣を表していますが、現役は函館本線供用の⑫相生町のみです。

＜平成20年山下紘由調査＞

①手宮川通：小樽市総合博物館本館、旧手宮鉄道施設、能島通り商店街
②八間道路：旧日本郵船㈱小樽支店、錦町商店街
③中通：旧本間水産、錦町商店街
④余市街道：田中酒造本店
⑤宮越道路：国道結節、稲北商店街
⑥第３火防線：龍宮通り、中一商会、仲谷工業、梁川商店街
⑦新第１号：ＩＳＯ、フリーランス、梁川商店街
⑧第２火防線：中央通り、中央通り商店街
⑨錦小路：旧小樽商工会議所、都通り商店街
⑩第１火防線：日本銀行旧小樽支店、サンモール一番街、稲穂大通商店街
⑪徳利小路：寿司屋通り、花園銀座街
⑫相生町：旧花園病院（手宮線の鉄路が残る終点）

新第１号
現中央市場の小路

余市街道
現田中酒造本店向かい 塩谷街道

徳利小路
現よしやと新海金物店の小路

第１火防線
現銀行街

＜上記４枚 JR北海道 札幌保線所小樽保線管理室 蔵＞
※上記の名称は国鉄時代につけられた「踏切名」です

銀行街

明治後期　北前船と汽船で賑わう小樽港＜小樽市総合博物館 蔵＞

小樽の歴史を簡単にいえば？

小樽では「北前船」と「炭鉄港」が日本遺産認定されていますが、「北前船」は幕末から明治初期、小樽がまだ鰊のとれる村だった時代に、航路を開拓すると同時に、肥料や海産物資源を以て、一躍小樽を有名にしてくれました。また「炭鉄港」の「港」は、明治32(1899)年には開港場(貿易港)に認定され、明治41(1908)年には北防波堤が竣工し、出船入船で殷賑を極める港になりました。これらを礎に小樽は北海道の物流基地となり、近代産業としての港湾商業で、北海道随一の近代都市に向かいます。それを牽引したのが海運・卸・倉庫などの商業とそれらを支援した「銀行群」でした。

明治41年竣工　北防波堤建設工事
＜小樽市総合博物館 蔵＞

明治45年竣工　手宮高架桟橋
＜小樽市総合博物館 蔵＞

港湾商業って？

大正後期　汽船で賑わう小樽港(人工着色写真)

小樽港は明治41年に北防波堤が竣工した段階で、北海道の近代化を牽引する港湾になり、すでに北前船で開拓した航路にも汽船が走り、鉄道は明治13年敷設の幌内鉄道に加え、明治36年の北海道鉄道(現函館本線)も全道的に拡がりつつあり、こうして海路と陸路が整備され小樽は「北海道の心臓」といわれるようになります。

つまり内地からの物資移入も北海道からの資源移出も小樽港を通して流通したので、これら物資の運搬、卸、保管などのビジネスモデルが移植され、この産業を支援する金融業も同時に移植されてきました。小樽黄金時代の基幹産業は、港湾を核に商業で牽引した港湾商業です。

銀行はどんな役割？

明治32年開業　十二銀行
写真は北陸銀行時代のもの
＜小樽市総合博物館 蔵＞

結果から見ると、現在の額で総資産数十億から一千億以上を持つに至った小樽商人が数多く輩出され、大きな倉庫や立派な社屋・店舗が建ち並びました。その影で多くの銀行が支援したということです。資金さえあれば船、店舗、倉庫を持てる、また仕入れる金さえあれば売って儲けられる、といった資金需要が充満してきます。さらには銀行の多店舗が持つネットワークから各地の情報を入手して、小樽の商業者にアドバイスもしますので、資金を借りた商人たちにとって銀行はまことに頼りがいのある存在でした。

たとえば小樽にある北陸銀行は明治32年に支店を設けた十二銀行が始まりですが、小樽に支店を設けた北陸系の銀行は、ほかに中越銀行、第四十七銀行もあります。この北陸系銀行の株主の柱になったのが北前船主でした。さらに小樽に北前船主の拠点や北陸系銀行の支店が揃うと、同郷の人々を呼び寄せ、北前船主と銀行が支援して新たなビジネスを成功に導いたといわれています。

大正13年竣工　中越銀行
＜小樽市総合博物館 蔵＞

昭和11年竣工　第四十七銀行
＜小樽市総合博物館 蔵＞

どれほどの銀行が？

小樽で一番早い支店設置は明治12(1879)第四十四国立銀行ですが、ここは明治15(1882)年に第三国立銀行に合併、明治16(1883)年に山田銀行に譲渡し、明治34(1891)年には廃業していますので記録だけが残っています。

明治28年竣工　第百十三国立銀行
＜小樽市総合博物館 蔵＞

明治41年竣工　百十三銀行
＜小樽市総合博物館 蔵＞

現存する建物として一番古いのが明治28(1895)年の第百十三国立銀行(現海鳴楼)です。ここは明治30(1897)年に百十三銀行と改称し、明治41(1908)年に新築移転(現浪漫館)し、昭和３(1928)年に北海道銀行に合併されます。

銀行の銀行といわれる日本銀行は明治26(1893)年に小樽に派出所を設け、出張所、支店と改称し明治45(1912)年に新築移転し、平成14(2002)年に業務終了となり、平成15(2003)年に金融資料館になっています。

さて小樽には明治から戦前までに、のべ55行(合併前の支店設置数)もの銀行が支店を設け、一番多くの支店を擁した時代が大正11(1922)年の24行です。

現在は政策投資、北洋、北海道、北陸銀行、そして北海道信用金庫の市中銀行５行ですから、当時の経済的発展を物語っています。いずれも日銀は含んでいません。　＜『小樽の銀行小史』＞

銀行街

小樽の浅草通り、堺町、色内大通りには多くの銀行建築が残されています。銀行建築以外も含めて、それら大型の建築群のある地区を小樽では「銀行街」と呼んでいます。

浅草通りの日本銀行(金融資料館)、北海道銀行(小樽バイン)、第一銀行(トップジェントコア)、三菱銀行(小樽運河ターミナル)、北海道拓殖銀行(小樽芸術村似鳥美術館)に加え、三井物産(松田ビル)、小樽地方貯金局(市立小樽文学館・美術館)も含め、堺町の百十三銀行、第百十三国立銀行、中越銀行(銀の鐘)、色内の第四十七銀行(渋谷建設)、安田銀行、横浜正金銀行(三立機電)、日本郵船(旧日本郵船)の建物が現存し、それらの洋風建築はまことに小樽の誇りといえます。

誇りの根拠は建物の豪華さばかりではなく、「北前船」も「炭鉄港」も他の地域との連携であり、自立の礎と位置づければ、「銀行街」は小樽独自で開花させた都市のシンボルといえます。「北前船」も「炭鉄港」もありがとう、これから僕は「銀行街」をシンボルとした近代都市に向けて邁進します、と小樽が言っているようです。

明治45年竣工　日本銀行
＜小樽市総合博物館 蔵＞

明治45年竣工　北海道銀行
＜小樽市総合博物館 蔵＞

大正後期の銀行街(浅草通り)
＜小樽市総合博物館 蔵＞

大正11年竣工　三菱銀行
＜小樽市総合博物館 蔵＞

大正12年竣工　北海道拓殖銀行
＜小樽市総合博物館 蔵＞

昭和５年竣工　安田銀行
＜小樽市総合博物館 蔵＞

大正13年竣工　第一銀行
＜小樽市総合博物館 蔵＞

昭和初期の銀行街(色内大通り)
＜小樽市総合博物館 蔵＞

石蔵

「小樽軟石」という呼び名は、小樽で採掘された軟石をいいます。
小樽では、天狗山、奥沢などから採掘されていました。
小樽の石造建築には石造倉庫と商店や個人が建てた石蔵がありますが、ここでは後者の石蔵を指します。

小樽にはどのくらい石蔵があるの？

昭和戦後運河沿いの石造倉庫群＜小樽市総合博物館 蔵＞

小樽では石蔵も歴史的建造物の中に含まれています。平成４年の歴史的建造物は2,357棟（日本建築学会北海道支部調査）ありましたが、平成24年には1,178棟（歴史文化研究所追跡調査）に半減しています。一方石蔵は、昭和25年に540棟（道庁調査）ありましたが、平成25年355棟（竹内勝治調査）、令和２年11月現在314棟（同）が現存しています。他の歴史的建造物が解体される速度に加え、石蔵は簡単に解体されていません。

大正期有幌町の石造倉庫群
＜小樽市総合博物館 蔵＞

昭和初期色内大通りの石造建築群
＜小樽市総合博物館 蔵＞

どうして解体されにくいの？

理由は３つあります。代々相続されている場合は「先祖の誇り」があり、建築的に「まだ使える」こと、石蔵をデザインとして「再利用（再生）したい」という理由です。そこで再生（カフェ・レストラン・宿泊施設、店舗、ホール、ミュージアムなど）されているのはおよそ60棟です。

カフェに再生　石と鉄

蕎麦屋に再生　籔半

ショップ＆ギャラリーに再生
December3

ミュージアムに再生
小樽市総合博物館運河館

石蔵は小樽らしいの？

木骨石造の柱と梁　小樽オルゴール堂本館

石蔵は他の歴史的建造物と比べると、より小樽独特の建築といえます。まず小樽の５ヶ所ほどの地場で採掘された小樽軟石は「商人の合理性（地元から安価で調達）」を示し、北前船が土壌をつくった物流基地の小樽港に、大型の石造倉庫の必要があったという「歴史的必然性」、そして小樽商人の誇りとして、蔵持ち一人前とする「意識的昂揚」、さらには木骨石造という「建築様式」

石壁を活かした廊下　田中酒造亀甲蔵

からして、十分に小樽らしいといえます。したがって石蔵は小樽にとって、歴史的に重要な文化財といえるでしょう。

どうして小樽で石蔵がたくさん建ったの？

明治時代の建材の多くは木材であったこと、また小樽は厳寒の気候で火を多用したことなどから、大火の発生が多く、その度に一財産を失う大災害に見舞われていました。今日の様にコンクリートや耐火材が普及していない中で、小樽近辺の軟石に需要が高まるのは自然です。つまり火事を防ぐために盛んに軟石が採掘され、石蔵が建てられてきました。また日本では「卯建（うだつ）が上がる」と一人前でしたが、小樽では「蔵持（くらも）ち」が一人前の商人を証明していたようです。

明治37年の大火では石造建築だけが残った＜小樽市総合博物館 蔵＞

札幌軟石と小樽軟石は違うの？

いずれも耐火材として普及したのですが、成り立ちと堅さや色合いが異なります。

成り立ちでは、札幌軟石が約４万年前に支笏火山の噴出物が陸上で堆積した弱溶結凝灰岩（じゃくようけつぎょうかいがん）ですが、小樽軟石は1000万年前～800万年前に水中火山の噴出が水中で堆積した凝灰質砂岩もしくは角礫凝灰岩（かくれきぎょうかいがん）です。

堅さでは札幌軟石よりも小樽軟石の方がもろいようです。色合いでは、札幌軟石は灰や黒色ですが、小樽軟石は白、黄土、また地層（ちそう）により多様な表情を見せています。

＜博物館学芸員 大鐘 卓哉氏講演より＞

小樽市内の再生石蔵は？

ＮＰＯ法人小樽民家再生プロジェクトでは平成27年・平成31年に、再生された中心市街地の石蔵43棟を取材しています。

①ショップ：大正硝子、小樽キャンドル工房、おたる瑠璃工房、オルゴール堂堺町店、海鳴楼、六花亭、北菓楼、北一硝子三号館、小樽オルゴール堂、キンダーリープ、ギャラリー蔵、おたる瑠璃工房Ⅱ、ディッセンバースリー、田中酒造亀甲蔵、ヴェニーニ、小樽彩や、浪漫館の石蔵

②カフェ：フリーランス、ゴールドストーン、プレスカフェ、くぼ家、叫児楼、アルバコール、オサワイナリー、ヴェールボア、石と鉄

③レストラン：北海あぶりやき、小樽ビール・小樽倉庫No.1、びっくりドンキー、すし耕、マンジャーレ、ふじ寿司、藪半、源平、夢二亭、健康応援社、和楽、ラーメン問屋

④ミュージアム：小樽市総合博物館運河館、小樽芸術村ステンドグラス美術館

⑤ホール：運河プラザ

⑥宿泊施設：蔵宿末広

石蔵の街～秘密から開放へ～

石蔵は、それ自体孤立して建てた人はいません。つまり事務所や店舗あるいは自宅母屋の裏に付随して物を保管する目的だったからです。その物は大事な物ですから耐火の軟石を使用したわけですが、こういった事実経緯からして、石蔵はそもそも秘密めいていました。しかし現代の再生した石蔵はすべて不特定多数の人々が入って楽しめる空間になっています。

このように石蔵の「秘密」「保管」「裏」といったイメージが、時を経て現代人が再生することによって「開放」「交流」といった「明るい」イメージに変化しています。

軟石の彫刻オブジェ（小樽石蔵アート展）
石蔵が開放空間となり、軟石をアートに使用

鰊文化

海を歩く漁師
神恵内の袋澗で鰊満載の袋網が浮く
<神恵内村 蔵>

小樽の鰊

にしん御殿に展示される道具類

「鰊(にしん)は後志沿岸地方(小樽・余市・古平・積丹・神恵内、泊、岩内、寿都、島牧)において、近代(明治)以前から人々の定着を促し、統計の残る明治20年から昭和10年までの50年間でさえ、のべ14,877,652石の漁獲高を記録し、さらに50年かけて20万人の人口になるまで人々の生活を支える大きな要素でした」<後志学後志鰊街道>と総括的な記録がありますが、このような鰊の貢献は後志に限らず北海道の西海岸の地域にも少なからず認められています。

さて小樽では、鰊で和人の定住がはじまり、鰊を求めて寄港する北前船によって近代商業の礎(いしずえ)が築かれたことを思えば、鰊は小樽にとってこの上ない貢献をしてくれたといえます。令和の時代から見て、曽祖父や曽祖母はそんな時代に育ち、彼らは多くの言い伝えを末裔(まつえい)の私たちに残しています。

「鰊は食うもんじゃねぇ着るもんだ」とは肥料になって綿花栽培を促進したことをいい、「鰊は買うもんじゃねぇ拾うもんだ」とは生鰊を運ぶ馬車からそこら中の道端にこぼれ落ちていたことをいい、「ニキビ盛りの腕白小僧が多かった」とは鰊の脂分がニキビの原因だといい、「支払いはゴガッパよ」とは３月４月の鰊漁獲期を過ぎ精算が５月に行われたことから５月払い(略してゴガッパ)という慣習があったこといい、「鰊は魚じゃねぇ」とは鰊を「鯡(魚に非ず)」とも書く所以などよく聞いてきました。

そして現存するにしん御殿、銀鱗荘、旧白鳥家番屋、旧青山別邸、茨木家中出張番屋、茨木家住宅、旧近江家番屋などの建築遺産や道具類、数の子や身欠(みがき)鰊の水産加工、忍路(おしょろ)鰊場の会などの芸能はまさに「鰊文化」といえます。

このように鰊は小樽にとって移住を促進し経済と文化、そして生活にも深く影響を与えてきました。

船から網ごと運ぶ
<余市水産博物館 蔵>

網に付着した鱗を取る
<余市水産博物館 蔵>

後志の人口と鰊

地域	歴代最大人口 歴代最大漁獲高		人口減少率		
島牧	大正６年	8,075人	令和２年	1,418人	17.8%
	明治36年	78,000石			
寿都	明治41年	37,880人	令和２年	2,896人	7.6%
	明治36年	116,672石			
岩内	明治41年	37,335人	令和２年	12,065人	32.3%
	明治33年	53,349石			
岩宇※	大正６年	12,472人	令和２年	2,395人	19.2%
	大正９年	101,000石			
積丹	大正６年	11,735人	令和２年	1,945人	16.5%
	大正９年	128,152石			
古平	大正６年	9,005人	平成31年	3,048人	33.8%
	大正９年	70,000石			
余市	昭和10年	28,396人	令和２年	18,308人	64.4%
	大正９年	67,495石			
小樽	昭和39年	207,000人	令和２年	112,567人	54.3%
	大正14年	119,666石			

※現在の泊・神恵内は「岩宇」で一つの地域でした

上記の表ではどの沿岸地域も鰊がふんだんに獲れていた前後に最大人口を抱え、不漁になるにしたがって人口が減少していることは共通します。小樽は大正14年に最大漁獲高を記録していますが、大正期には不漁の年も少なくありません。それなのに昭和39年まで人口が増加したのは、上記９市町村の中で唯一「港湾商業」というもう一つの産業が盛んになったという背景があります。

鰊を炊く木材を周辺の山から伐採したため背景の山には大木がない
<小樽市総合博物館 蔵>

忍路港の鰊場＜小樽市総合博物館 蔵＞

ローカといわれる貯蔵倉から干して身欠にする作業＜余市水産博物館 蔵＞

鰊の肥料文化

一方で地方に運ばれた鰊の肥料「〆粕(しめかす)・鰊粕」はどのような役に立ったのでしょうか。様々な資料には、徳島県の藍、大阪府泉州の綿花、長野県の桑などに提供されたほか、全国の米、そして和歌山県の有田みかんにも貢献しています。

生鰊を鉄鍋で煮る＜小樽市総合博物館 蔵＞

平成20年１月７日北海道新聞には「わしゃ 80近くになるが、これまでニシンを一度も食べたことがない。ニシンは、わしらの生活を支えてくれるミカンが食べるものやったさかい」と有田市のミカン農家長老の話が記され「ニシンミカン」とも言われています。

また、徳島でも「鰊粕を使えば使うほど上質の藍ができた」と取材されています。徳島には博物館「藍の館」も重要な観光施設になっています。

肥料となって栽培されたものにはニシンの姿は消えますが、「甘いミカン」「上質な藍」となって人々に貢献していることは確かです。

煮て柔らかくなった鰊を木製の圧搾機で水分を除く＜小樽市総合博物館 蔵＞

筵を敷いて上に圧搾機から粕を載せ天日で乾燥させる＜小樽市総合博物館 蔵＞

乾燥した〆粕を梱包する＜小樽市総合博物館 蔵＞

鰊の食文化

鰊が獲れた小樽の鰊料理には「鰊漬け」「鰊の三平汁」「鰊の飯寿司」の元祖三品に加え、今日では様々なレシピが誕生していますが、道内から北前船で運ばれた鰊は干した(身欠)状態なので、いわゆる保存食です。そして食文化の面白さは、海のない地域には海のものが大切で、地元で獲れないものはこれも大切、そんな貴重さが食文化として発展継承されているようです。

平成20年１月５日北海道新聞には「会津人の郷土食だな。まぁ食べてみなっせ」と身欠鰊づくしの料理、山椒漬け、天ぷら、山菜との煮付け、押しずしを前にして「様々な料理は、保存食のニシンを大切にした内陸の会津人の智恵だ」と会津若松市の郷土料理店が取材されています。

また、京都取材では「身欠が好まれる理由は、京都の伝統的な家庭料理『おばんざい』にある。季節の京野菜の炊き合わせに身欠が使われ『ニシンなす』は夏の京のおばんざいの代表格」と記しています。

京都といえば「にしん蕎麦」が有名です。にしん蕎麦は京都の老舗「松葉」考案で、身欠鰊を甘露煮にしてお蕎麦の上に盛りつける料理です。松葉は文久元(1861)年創業ですが、明治15(1882)年二代目松野与三吉が“にしんそば”を発案し元祖になりました。

さらにホームページ「郷土料理ものがたり」の岐阜県には「にしんずし」がお正月のご馳走で食卓には欠かせない郷土の逸品と紹介されています。

このように海のない地域や鰊の獲れない地域では、北前船の時代から流通し、貴重な食材として根付き、それぞれの地域の大切な食文化として今も息づいています。

北海道の定番鰊漬け＜岩内町 蔵＞

最近では鰊の蒲焼きも＜岩内町 蔵＞

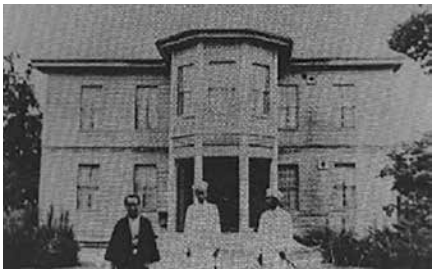
運動遺産

目に見えない運動の継承

小樽人気質

小樽波止場移民漂着 ＜北海道立文書館 蔵＞

「小樽は歴史的に『民の力』が先導してつくられてきた」といわれています。
『民』は人間ですから善も悪も成しますが、悪は騙しや犯罪や陰謀など、後世の人々には迷惑この上ないのですが、善は後世の人々に「がんばろう」と奮起を促し「良いまちづくりをしよう」と社会的傾向につながります。ここでは善の系譜から小樽人の志をみつめてみましょう。



釧路集治監 ＜標茶町 蔵＞

北海道移民荷物取扱所＜北海道立文書館 蔵＞

小樽に集合した移住者達＜北海道立文書館 蔵＞

北海道の形成

日本史において早くから「日本」を構成した内地(本州・四国・九州)から見ると、明治２(1869)年に誕生した北海道はどう映っていたのでしょうか。明治11(1878)年に明治政府は「全国の罪人を特定の島嶼(とうしょ)に流し収監する」決議をし、選ばれたのが北海道でした。その結果、明治10年代には全国に集治監（監獄）が６ヶ所ある中で、３ヶ所が北海道にあったことから、主に中央政府から見る北海道は、あたかも流刑地の位置づけでした。「島嶼」という言葉からいわゆる「島流し」「流罪」が連想され、北海道は政府にとってやっかい者を閉じ込める島だったとの印象を抱かせます。

ところが一方で北海道は鰊や石炭などの資源に恵まれていたため、経済的資源を確保したいことや、ロシアの南下を食い止めるため、軍事的心配をしていた明治政府は、国民を内地から移住させて北海道をしっかりした領土にする政策を打ち出しました。その結果、明治２年から昭和元年まで227万人の移住が記録されています。このように明治政府は「やっかいな北海道」と「経済的・軍事的に貴重な北海道」という矛盾を抱えて近代化を進めてきました。

小樽の形成

さて北海道への移民搬送は全て船で、主に函館港と小樽港がその受け入れ先でした。ですから小樽は日本各地からの移民で形成されてきました。そこで想像して見てください。移民前の人々の気持ちや、移民後のコミュニケーションについてです。農家や商家などの口減らし、幕末の争いで負けた武士団、そして追われるような境遇の人々でしたから、決して積極的に移住したとは思えません。また移住後はというと、明治には今日のような日本語や標準語が行き渡っていません。青森弁や新潟弁などの方言を本人は標準語と認識していますので、お互いに何を言っているのかよくわからなかったはずです。したがって生きて行くには「負けてたまるか」と気持ちを奮起させ、「わかるまで」と大声で語るので、必然的に心は攻撃的になります。まして小樽は次第に物流基地になっていくため、物が中心で人は歯車のような労働形態ばかりでした。移住前には内地でまともな教育も受けられず、移住後は歯車ですから、必然的に「あらくれ」になります。大人も子供もです。

小樽を形成した移民について語った印象深い記録があります。稲穂小学校校長であった稲垣益穂(ますほ)は「何等土地に歴史が無く、隣家の制裁とては針の尖(さき)ほども無い土地で、然も内地の失敗者、手あまし者、札付等、其土地に居り困(くる)しきもののにげこむに極めて便宜的な土地」と言っています。

小樽港民

「あらくれ」は悪にもなりますが善にもなります。その志は明治後期から市井で語られ、新聞にも掲載された「小樽港民(こうみん)」という認識です。港がつくられ大きな倉庫が建ち始め、立派な銀行や商

北防波堤＜小樽市総合博物館 蔵＞

寿原重太郎
＜スハラ食品90年のあゆみ＞

廣井　勇
＜北海道開発局小樽開発建設部 蔵＞

店が軒を連ねる中で、小樽人は「小樽はすごい」と感じ「俺も立派に出世せねば」と考え、そのためには「人々に喜ばれることを」と志を立てるのです。当時は小樽区民で、同じように室蘭や釧路でも「港民」は使われていましたが、あえて「小樽港民」と自称したのは「この港は小樽の港ではあるが、小樽だけの港ではない」と公を思う志が伝わってくるのです。

明治32年に小樽で初めて小樽区会議員選挙が行われますが、立候補者の一人で商人であった寿原重太郎は選挙演説で「我ら小樽港民たるもの」と使い、大きな会社のためだけに公共事業をすべきではない、と叫んでいます。また明治41年に竣工した日本初の日本人だけでつくった小樽北防波堤の指導者廣井勇は、小樽港民の象徴といわれています。

「小樽港民」という認識は、成功した小樽商人が多くの今日でいう歴史的建造物を建設し、港づくりに携わった人々が防波堤や運河をつくり、「あらくれ」の土壌を牽引する立派な志があったことを物語っています。

小樽志民

小樽運河保存運動は今日の小樽観光の契機となると同時に、歴史的建造物再生という小樽独自の文化・観光素材を育みました。小樽運河を守る会、ポートフェスティバル実行委員会、小樽運河百人委員会などの若きリーダー、そしてそれらのシンクタンクとなった若き研究者を「小樽志民」と称したいのです。

想像して見てください。運河埋立と保存でもめていた昭和50年代、保存派が「運河を綺麗にして観光」「歴史的建造物を改修して残そう」といえば埋立派に「俺たちが使ってきた運河だ」「スクラップ＆ビルドの時代だ」と叱られていました。そして「運河埋め立ての約100億円の公共事業こそが高度経済成長に乗り遅れた小樽経済のカンフル剤」とも言っていましたが、運河を核とした観光都市小樽が稼ぐのは毎年１千億前後にまで発展してきたのです。小樽にとって文化的にも経済的にも「小樽志民」が叫んでいたことが正しかったと歴史は証明しています。

小樽運河百人委員会の運河保存と代替道路の提案

第3回ポートフェスティバルのポスター

ここまでの歴史から、小樽は商人や労働者や学者の努力によって立派な街並みに発展し、若者達が歴史的建造物の再生運動をしたことから全国区の観光都市になってきたことが明確です。

小樽協民

時代は現在、令和に入っていますが、ここ数年で「小樽市中小企業振興基本条例」「小樽100年プロジェクト」「日本遺産」「観光税の導入」「ＤＭＯづくり」など民間が研究して主導してきた政策は、すでに小樽市の公的なテーマになってきました。これまで市民の多くは「町内会に街灯を」「家が面する道路の除雪を」など要請や文句を言うだけでしたが、ここに揚げた新たな政策は民からの提案を「官民協働」共通のテーマで、機能分担する関係に進化してきています。このような小樽的傾向を「小樽協民」と認識できます。

「小樽港民」で種を蒔き、「小樽志民」で肥料を添え、「小樽協民」で花を咲かせるといった、目に見えない系譜が小樽に紡がれているのです。

小樽100年プロジェクト・セミナー
旧三井銀行

小樽運河保存運動

明治から昭和初期、北海道では「我が世の春」を謳歌（おうか）した小樽でしたが、戦後マスコミなどから「斜陽（しゃよう）」と言われるようになりました。戦時中の統制経済によって自由な経済活動が制限され、敗戦によって樺太市場を喪失し、戦後は日本海側から太平洋側へ物流が変化し、倉庫からコンテナへ荷役システムが変化することによって、小樽の基幹産業であった港湾商業が大打撃を受けてしまうのです。

斜陽からの脱却１

斜陽とは言われましたが、港湾業や繊維業は昭和30～40年代まで活性化していました。そのおかげと同時に、小樽の都市性に希望を抱いて道内からの移住者も増え、昭和39(1964)年には人口207,000人を超えるほどになります。

2007年
第41回おたる潮まつりポスター

しかし以後は、産業全体が衰退傾向を辿る中、「斜陽脱却」を図るべく、昭和42(1967)年第一回「潮まつり」が開催されます。この頃にはかつての「小樽商人」の気概もわずかに継承され、資金的余裕もありました。

斜陽からの脱却２

産業衰退は人口減少に直結し、働く層がどんどん小樽から離れていく傾向を止めることはできませんでした。ここに昭和48年から59年までの正味10年間、「小樽運河保存運動」が勃発するのです。簡単にいうと、車社会を迎えていたことから、昭和46年に竣工した札幌～小樽間高速道路に連結した臨港線をどう造るかという課題に対し、「沿線の石造倉庫を解体し運河も埋めて道路にすべきで、国からの補助金も大助かり」という意見と、「倉庫と運河を保存・再利用し、市内の歴史的建造物も同様に再利用し、いわば近代史を再利用する観光都市に舵を切り、道路は一本海寄りに」という意見に分断するのです。

1984年　第7回
ポートフェスティバルのポスター

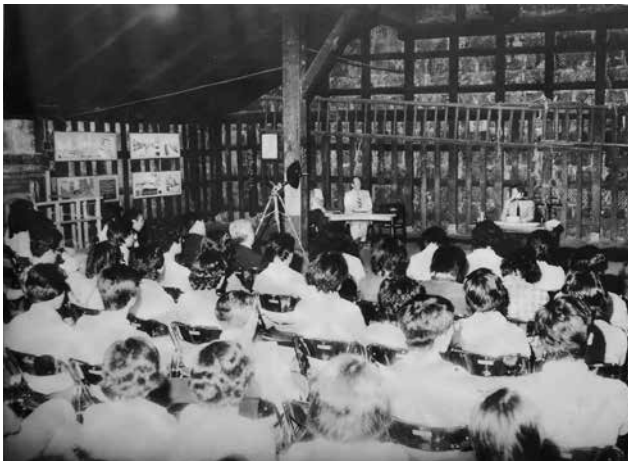
この問題は小樽を超えて全国に報道され、市議会、道議会、国会でまで議論され、小樽運河は全国に知れ渡っていきました。

1978年 第1回ポートフェスティバル
<志佐 公道 氏>

結果的に昭和59年に政治的結論が出され、今日の運河になっていくのです。

1978年第1回ポートフェスティバルに集う若者達 <志佐 公道 氏>

ポートフェスティバル実行委員会発行雑誌『ふぃえすた小樽』


1978年石造倉庫セミナー　前野商店倉庫

「もう一つの」の意味

「もったいない」という概念は日本独自の概念で、世界でも「MOTTAINAI」と表現されていますが、逆に英語圏にあって日本にない概念もあります。「もう一つの」を英訳すると「Another」ですが、英語圏には「Alternative」という表現があります。

当時の小樽の状況をこの概念でみると「なるほど」と理解が出来ます。高度経済成長に乗り遅れた小樽を前提に、押し寄せる車社会を想定していましたが、「Another」的考え方だと、「今度こそ乗り遅れずに道路ありき」となりますが、「Alternative」的考え方だと、「乗り遅れたから残った歴史的環境を武器に観光都市を目指す」になります。「Another」は既成概念を前提とした「もう一つ」ですが、「Alternative」は異次元の発想(この場合は観光)を目標とした「もう一つ」となります。

「Another」は誰にでも理解しやすいのですが、「Alternative」は簡単には理解されません。事実昭和50年代前半には誰もが「えっ小樽が観光？」とリアリティを感じてもらえませんでした。

歴史再生の小樽モデル

「小樽運河保存運動は学びながら運動する」とは、小樽運河を守る会の峯山冨美会長がよく言っていた言葉です。当初は情緒的、文化的な動機で「運河保存」を訴えましたが、より多くの人々の賛同を得るには、経済的、建築的、都市計画的にも説得力を持たせる必要があったからです。「どうすれば経済が豊かに？」「どうすれば再利用が可能に」と多くを学ぶのです。この学びの中から「運河や石造倉庫はもとより市内の歴史的建造物も再生して、小樽独自のまちづくりと観光都市を目指そう」と旗を振るようになりました。これを機に歴史的建造物がホール、カフェ、レストラン、ミュージアム、ギャラリー、ショップなどに再生されて、小樽観光を牽引するばかりか、観光収入がすべて小樽外からのものであることから、市内での経済効果も期待されるようになっています。

小樽運河を守る会会長　峯山冨美

これら「歴史的建造物再利用」は、以前にはなかった新たな観光という産業まで発展させたことから「小樽モデル」といわれ、全国各地にも波及しています。

観光の行方

観光産業は小樽の総出荷額の30％にもなる基幹産業です。しかしまだ人口減少には歯止めをかけるほどにはなっていません。市内で仕入れ、市内で生産し、市内で消費することは「地産地消」で大切なことですが、それだけですと小樽の経済はだんだんしぼんでいきます。たとえば私たちの生活で全国チェーンのお店を利用することは普通にありますが、これは経済的には市外にお金が流れていくことを意味します。これに対し観光産業は、小樽独自のものを小樽以外のお客様が買ってくれますので「外貨獲得」といわれ、小樽経済を大きくしてくれる役割を果たしてくれます。

小樽市は平成16年に「観光を基幹産業」と認識し、平成20年には「観光都市宣言」を発していますが、観光に無関係と思っている市民には「交通渋滞を起こして困る」「観光客はゴミを増やして困る」などといった認識も少なくありません。

「観光は小樽にとって大切なもの」と考える市民は、「小樽が一つになり今こそDMOをつくってもっと稼げる観光都市に」と認識しています。つまり観光を「小樽にとって大切なもの」から「小樽市民にとって大切なもの」に変革していこうとしているのです。

まちづくり運動 その成果

この稿は現代史で今日も続いている小樽の独自性についてです。昭和50(1975)年に「小樽運河を守る会」が誕生以来、80を超えるまちづくり団体が小樽に誕生し、様々な資源を発掘・錬磨しています。今で言うNPOですが、「小樽のこれっていいよね」「俺もそう感じていた」といった会話から志を立て、仲間が集い、多くの企業などから協賛を集めイベントなどを開催しています。小樽の規模でこの数字は全国的にも突出しています。ここでは、小樽のまちづくり運動がどのような成果をもたらしてきたかをまとめてみます。

運河周辺

■小樽運河を守る会(1973-1984)
■ポートフェスティバルインオタル実行委員会(1978-1994)
■小樽運河百人委員会(1983-1984)

これらのまちづくり運動によって、ゴミ溜めの運河と空の倉庫で関係者以外立ち寄らない運河周辺は、小樽観光のシンボルとなり小樽は観光都市に舵を切るようになりました。現在の小樽運河は昭和61(1986)年に整備されています。また、その後の小樽のまちづくりに大きな影響をもつことになります。

昭和中期　衰退の兆しを見せる運河<小樽市総合博物館 蔵>

昭和40年代　衰退し放置された運河<小樽市総合博物館 蔵>

昭和47年　道路拡幅のために解体される石造倉庫<井上 雅博 氏>

昭和53年　運河保存に向けた第1回ポートフェスティバル<志佐 公道 氏>

昭和61年
港湾運河を観光運河に整備

銀行街

■オタルサマーフェスティバル実行委員会(1986-1994)

小樽の銀行街は戦時中を契機に産業衰退によって、次々に撤退が続き、夜間は街灯もなく暗い地区でした。このまちづくり運動によって、銀行建築群が見直され、夜間のライトアップ、レストラン、ショップ、ミュージアム、ホテルなどによって銀行建築群が再生されてきました。

昭和初期　活気を呈していた銀行街(色内大通)<小樽市総合博物館 蔵>

昭和35年
撤退間近の銀行街(浅草通)
<小樽市広報公聴課 蔵>

平成元年
第4回サマーフェスティバルの銀行街

平成2年　第5回サマーフェスティバルでライトアップされる旧越中屋ホテル

令和元年　シンポジウムが開催された旧三井銀行

手宮線

■小樽青年会議所OB義経・しづかランデブー(1980)
■小樽ルネサンス21(1982-)
■小樽フロンティア21(1993-)
■北海道開拓鉄道協議会(1996)
■小樽まちづくり協議会(1996-)
■小樽雪あかりの路実行委員会(1998-)
■小樽・鉄路・写真展(2000-)
■小樽鉄道写真展(2001-)
■ＮＰＯ法人北海道鉄道文化保存会(2008-)
■小樽がらす市(2009-)

手宮線に関しては実に多くのまちづくり団体が志をたむけてきました。これらの運動から、ＪＲ北海道が有していた手宮～寿司屋通り約1.6kmを、平成19年から順次小樽市が買い上げ、平成28年に鉄路を残した散策路として整備しました。

明治中期　現寿司屋通りを走る蒸気機関車＜小樽市総合博物館 蔵＞

昭和55年
小樽青年会議所OBによる
義経・しづかランデブー
＜小樽市広報公聴課 蔵＞

平成10年
小樽まちづくり協議会
提案の運河と色内背景の
手宮線プラン

平成31年
整備された手宮線
散策路
旧日本郵船裏

北運河

■廣井勇・伊藤長右衛門胸像帰還実行委員会(1999)
■NPO 法人 OBM(2012-)
■小樽青年会議所北運河ルネサンス(2016-)

小樽運河の北側約400mは大正12年竣工の運河の原形を留め、護岸や散策路が整備され、旧日本郵船と運河の間に小樽運河公園が設けられました。しかしこの地区は先行した堺町や南運河のように、観光客が足を運ぶことが滅多にありませんでした。しかし運河の原形保持に加え、北前船倉庫３棟が肩寄せて並び、手宮鉄道施設(重要文化財)、北海製罐工場群といった小樽の歴史聖地であり、手宮公園、色内埠頭公園に囲まれた贅沢な自然環境と認識する志によって、市民が愛する新たな観光拠点にすべく議論が進んでいます。

大正～昭和
港湾荷役で活気を呈した北運河
＜小樽市総合博物館 蔵＞

平成11年
廣井勇・伊藤長右衛門胸像帰還
実行委員会による除幕式
＜小樽市広報公聴課 蔵＞

平成26年　NPO法人OBM提案の北運河イメージ図

平成30年　北運河から北海製罐
第三倉庫を望む

平成30年　北運河から運河公園
と旧日本郵船を望む

第三埠頭

■小樽塾(1995-)
■舫実行委員会(2005-)
■小樽商工会議所港湾振興プロジェクト(2011-)

小樽港は昭和26年「重要港湾」に指定されて以来、港湾関係者が忙しく働く地区でしたが、昭和40年代から小樽港が寂れていく過程で、市民が釣り糸を垂れ、カップルが海を眺めるコースなどにもなり、平成23年「外航クルーズの日本海側拠点港」、つまり物流から人流に、第三埠頭が国によって位置づけられ、開発局は大型クルーズ船が着岸できるように、浚渫整備工事を進めています。

小樽は小樽港によって発展した歴史を持つことから、港はアンタッチャブル（手を付けられない）な領域でしたが、これらのまちづくり運動によって世論や経済界も次第に人流を認識するようになったといえます。

明治後期桟橋時代
＜小樽市総合博物館 蔵＞

昭和42年第三埠頭竣工
＜小樽市広報公聴課 蔵＞

平成26年 小樽商工会議所港湾振興プロジェクトのコンテナカフェ

祝津

■後志鰊街道普及実行委員会(2005)
■小樽祝津にしん祭実行委員会(2008-)
■祝津たなげ会(2008-)

祝津地区は鰊文化遺構の宝庫です。にしん御殿、旧白鳥番屋、茨木家、茨木家中出張番屋、旧青山別邸などの建築群、そして鰊漁の様々な道具や逸話が満載です。

平成17年 後志鰊街道普及実行委員会発行『後志学 後志鰊街道』

北海道西海岸はほとんど鰊で集落が誕生していますが、その中でも祝津の鰊文化の集積と原形維持は群を抜いています。まさに小樽の歴史原形は祝津にありと言っても過言ではありません。これらのまちづくり運動によって、祝津地区の住民も応援するようになっています。

外観

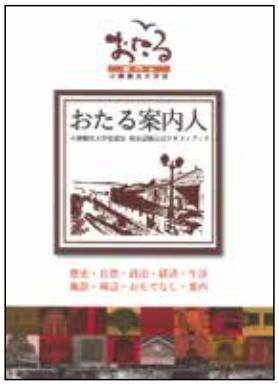
内観

平成22年修復 小樽祝津にしん祭実行委員会や小樽祝津たなげ会の拠点 茨木家中出張番屋

ガイド

■小樽観光ガイドクラブ(2002-)
■小樽おもてなしボランティアの会(2002-)
■小樽観光大学校(2006-)
■「おたる案内人」ボランティアガイドの会(2018-)

小樽観光の満足度でいうと、ガイドのあるなしで大きく違ってきます。なぜなら小樽の目に見えない近代史物語こそが小樽独自の観光資源だからです。そしてガイドは交流観光の大切な契機です。ガイドを聴いてどんどん小樽を深掘りしていくことこそ、小樽観光の醍醐味です。



平成18年 おたる案内人公式テキストブック

建物遺産

再生された歴史的建造物

【入船地区】
蔵宿 末広 …… 32
Hands on Toy's kinderlieb … 33
小樽オルゴール堂 手作り体験 遊工房… 34
大正硝子 ギャラリー蔵 …… 35
小樽オルゴール堂 本館 …… 36
【堺町地区】
銀の鐘１号館 …… 37
北菓楼小樽本館 …… 38
六花亭 小樽運河店 …… 38
北一硝子三号館 …… 39
おたる瑠璃工房 …… 40
ふじ鮨 小樽店 …… 41
大正硝子かんざし屋 …… 42
利尻屋みのや不老館、小樽出世前広場、
大正クープ館、ホラ吹き昆布館 … 44
小樽磯鮨 …… 46
大正硝子 くぼ家・Maharo … 47
大正硝子奥野商店 …… 48
たけの寿司 …… 49
オルゴール堂® 海鳴楼本店 … 50
大正硝子 宇宙（SORA）…… 51
小樽硝子の灯・彩や …… 51
小樽オルゴール堂 堺町店 …… 52
おたる瑠璃工房 運河店 …… 53
小樽浪漫館 …… 54
小樽キャンドル工房 …… 55
【色内地区】
大正硝子本館・とんぼ玉館・
びーどろ館 …… 56
おたる織物㈱ 染織アトリエKAZU… 57
小樽運河ターミナル …… 58
小樽芸術村 ステンドグラス美術館… 59
小樽芸術村 ステンドグラス美術館
ミュージアムショップ …… 60
小樽芸術村 似鳥美術館 …… 61
小樽芸術村 旧三井銀行小樽支店… 62
UNWIND HOTEL & BAR 小樽… 64
Café 色内食堂・北勝庵・游菓… 66
すし耕 …… 67
Café & Hostel 石と鉄 …… 68
ISO …… 69
洋食屋マンジャーレ TAKINAMI… 70
vivre sa vie ＋ mi-yyu …… 71
JAZZ喫茶 フリーランス …… 72
小樽 GOLD STONE・PRESS CAFÉ… 74
田中酒造本店 …… 76
旧日本郵船株式会社 小樽支店 … 78
Coworking Cafe & Bar "The Harbor" … 80
【臨港線地区】
初代 小樽本店 …… 81
田中酒造 亀甲蔵 …… 82
中国料理 好 …… 83
北海あぶりやき運河倉庫 …… 84
小樽ビール 小樽倉庫No.1 …… 85
オタルタイムズガーテン …… 86
小樽市観光物産プラザ(運河プラザ)・
小樽市総合博物館運河館・
小樽百貨UNGA↑（プラス）…… 88
【銀行街地区】
日本銀行旧小樽支店 金融資料館… 90
小樽バイン …… 92
【その他地区】
旧岡川薬局 …… 93
珈琲店 はち…… 94
石蔵 Café ヴェール・ボア … 95
旧寿原邸 …… 96
小樽蕎麦屋 籔半 …… 97
December3 …… 98

堅牢で清潔感ある外観

落ち着いた２階宿泊スペース

石壁と採光を考えた再生

観光エリアでは石蔵宿泊の第一号

蔵宿 末広【宿泊】

歴史的エピソード

末広稲荷由緒

末広稲荷は小樽の有名な侠客であった、末広こと鈴木吉五郎が明治17(1884)年３月10日、京都伏見稲荷の分霊を請い奉祀したもので、正一位稲荷大神宮の霊が今も社内に存する。衣食住を安定する保食神である。

吉五郎は小樽最初の私設消防組の創始者であり、また芝居小屋の末広座や末広見番を興すなど社会公共に尽くしたが、明治20年代の頃には、この稲荷社は陸橋下筋向かい末広座に相対し、花柳界の振興と相まって、界隈一帯参詣人の列をなし、殷賑を極めたと伝わる。

吉五郎のあと大畑五郎次・大畑よしが継承して、祭祀を絶やさなかったが、よしの死後は入船町の有志が保存会をつくって維持管理に当たり今日に及んでいる。

茲に92年に亘る末広稲荷の由緒を誌るすと共に、永く当町文化財としての銘とする。

＜末広稲荷説明板＞

「近隣には「末広座」や「末広見番」があり、花柳界が近かったこともあって、芸者衆の参拝がひきもきらなかった」と渡邊悌之助さんは当時の様子を語っています。

＜平成５年４月
ねっとわーく小樽＞

建物のあらまし

宿泊施設とする以前から事務所で使用されていたことから、道路側の１階・２階それぞれに開口部(窓)が設置されていました。内部は清潔と防寒を考慮して断熱材でくるんでいますが、一部石壁を残す工夫をしています。

建物使用履歴

木造母屋は明治36年小川喜三郎、明治37年５月金権造、10月吉田重次郎、明治38年渡邊正助と移っていますが、母屋に付属していたこの石蔵は、元来鰊漁親方の、渡邊正助が渡辺薬品㈱経営時に建立したと思われます。昭和38年には渡邊悌之助(末広稲荷掲示板)が相続、平成18～19年には小野君江氏が㈱ニチヤク事務所とし、平成30年に改装して「蔵宿末広」として小野家で営業しています。

ちなみに渡邊正助の渡辺薬品㈱は他の資料では小樽最古の薬局といわれていますが、「小樽商工名録(大正11年)」では、明治28年岡川松太郎、同35年秋野音次郎、三ツ野得二、同36年佐藤三男、同37年城戸蔵六、同38年渡邊正助の順となっています。

＜竹内勝治調査＞

現施設の Profile

①現在の施設名：蔵宿「末広」
②住　所：小樽市入船１丁目3-10
③電　話：0134-64-1027
④ＵＲＬ：https://kurayado-suehiro.com/
⑤施設代表者：小野 英紀
⑥地図位置：１

お子様が楽しくなる品格です。

今は昔説明に店長が奮闘

回廊式の店内は遊び場もあり目を細めたくなる風景

デジタルは架空だが
アナログこそ遊びの神髄

キンダーリープ【玩具ショップ】

歴史的エピソード

今井 喜七

今井喜七（きしち）は小樽市山ノ上町84にて銅鐵金物、板硝子製造卸・小売を生業とし、創業は明治９(1876)年９月との記録が残されています。<大正11年小樽商工名録>その証拠に、建物内の梁に「㊤鐵雑今井喜七」と記されています。

また「今井喜七」の名で思い浮かぶのが、名取高三郎商店の高三郎の叔父に当たり、高三郎は喜七の下で修行し、独立に際し今井の印㊤を暖簾分けされ、下に「一」をつけています。

また店内に「木」の印がありますが、昭和36年の住宅地図では「熊木商店」とあり、この蔵の隣に熊木が在住していました。ではその熊木太一郎はというと、７歳で酒田市から来樽（保護者がいたと思われます）し、のちに蔵の奥に工場を造り、漁業用の太い縄を製造していました。ただ謄本には記録されていません。

「木熊木太一郎　山ノ上町１　縄、筵、藁工品卸　創業明治25年６月」の記録もあります。

<竹内勝治調査><大正11年『小樽商工名録』>

㊤鐵雑　今井喜七

恐らく熊木の「縄などの在庫を半端な数で出すな」といった注意だと

熊木商店の片鱗

建物のあらまし

小樽では小型の木骨石造倉庫で、梁の頑丈さに加え、再生の際に内部を木材と煉瓦で外気遮断しています。再生の特徴は２階を吹き抜けにし回廊で開放感を出しています。

建物使用履歴

建物は今井喜七創業の明治９年以後の創建ですが、謄本には昭和５年今井喜七、この間に熊木が使用し、昭和18年渡辺ツセ、昭和27年松木久代と記録されています。

昭和後期には木調アート＆カフェ「匠伽藍（たくみがらん）」開設、平成16年から小樽オルゴール堂の体験工房・倉庫、平成19年キンダーリープ開店に至っています。

現施設のProfile

①**現在の施設名**：Hands on Toy's Kinderlieb
②**住　所**：小樽市住吉町４-４
③**電　話**：0134-24-1031
④**ＵＲＬ**：https://www.kinderlieb.info/
⑤**運営会社代表者**：杉本 英樹
⑥**地図位置**：２

キーストーンが特徴の外観

１階ショップ

２階体験工房

イージーオーダーだから誰でも製作できてメロディも選べる

小樽オルゴール堂 手作り体験 遊工房【オルゴール製作体験工房】

歴史的エピソード

変遷の激しい地区

この建物がある場所は、歴史的に激しい変遷（へんせん）を辿っています。

幕末から明治初期は、写真①②③のように運上屋や倉庫が建ち並ぶ集落でした。ここ（入船１丁目）より先に開けていた勝納川流域が明治14（1881）年の大火によって、全焼したため、繁華街は遷都（せんと）するかのように、この入船に移ってきます。明治13（1880）年に敷設された鉄道の鉄橋ができ、明治中期には入船川流域には初めて商店街らしい街並みが④のように整備されていきます。さらに入船河口にあった船入澗に船舶の物資流通が活発になります。その後、昭和初期には色内地区に港が整備され、商業機能は堺町や色内に遷都し、昭和時代に突入します。戦後は埋立も進み、昭和32（1957）年は⑤⑥のように主に繊維問屋街を形成し、今日に至ります。

①

②

③

④

⑤

⑥

＜小樽市総合博物館 蔵＞

⑤昭和32年入船通り　繊維問屋街と鉄道

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

現存する純石造（36cmの厚い石材）３階建てとしては唯一、瓦葺き屋根にドーマー窓（屋根窓）が設置され、各階の窓はスマートなキーストーンで飾られ、縦長構造。正面が札幌軟石、側面が小樽軟石造です。　＜『小樽の建築探訪』＞

遊工房再利用時には外観は補修不要。小樽オルゴール堂本館の重厚感を裏切ることなく、同じく重厚感を持つ建物は、小樽オルゴール堂のイメージ向上につながっています。

建物使用履歴

大正10年に畳表、縄、筵、藁工品問屋の「マルジョウ上勢友吉（うえせいともきち）商店」として創建され、昭和55年１階正面左端の旧出入り口を窓に改修、平成20年　小樽オルゴール堂 手作り体験 遊工房開館に至ります。

平成３年　小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①現在の施設名：
小樽オルゴール堂 手作り体験 遊工房
②住　所：小樽市入船１丁目１-５
③電　話：0134-21-3101
④ＵＲＬ：https://www.otaru-orgel.co.jp/j_youkobo.html
⑤運営会社：株式会社オルゴール堂　代表取締役　柳田 春義
⑥地図位置：３

新築に見える母屋外観

母屋から石蔵に誘導する赤絨毯

しっかりプロフィールが掲示されている

硝子の街小樽を象徴する小樽の硝子作家の作品とプロフィールが一堂に集合

大正硝子 ギャラリー蔵【ギャラリー】

建物のあらまし

内部の改築はギャラリーなので、床と壁を美装し展示ケースや展示棚のセンスは抜群です。

小樽の硝子作家を紹介する石蔵

建物使用履歴

建築年は大正時代ですが建て主は不詳です。平成22年に小樽大正硝子ギャラリー蔵として開館しています。

現施設の Profile

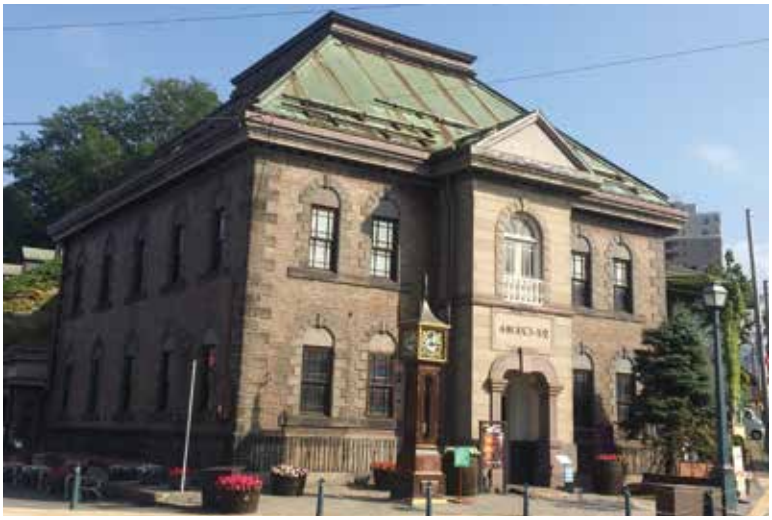
①現在の施設名：大正硝子 ギャラリー蔵
②住　所：小樽市入船１丁目２-26
③電　話：0134-22-2299
④ＵＲＬ：http://www.otaru-glass.jp/store/gallery-kura
⑤運営会社：株式会社アートクリエイト　代表取締役　久末 智章
⑥地図位置：４

コラム 印（しるし）

「マルイ今井百貨店」「カネイ小川商店」など、㊐や〓のような今日でいうマーク的なビジュアル性を持つものを「印」といいます。マークは読めませんが印は読まれる場合が多いようです。これに対し「今井百貨店」や「小川商店」などの社名や店名は「屋号」「商号」といい区別されています。

印の起源は古いのですが、浸透するのは江戸時代で、苗字を許されない農工商の人々が使用しました。たとえば家紋でいうと江戸時代には「菊（天皇家）」と「葵（徳川家）」以外は自由に使うことができました。なぜ普及したかは「区別」が重視されたからです。「区別」が「信用」に進化し、「マルイの商品は間違いない」「カネイの商品は安全だ」というような認識です。今日でいうと「マルイの商品は環境をしっかり考えている」「カネイの商品はフェアトレードを守っている」に通じるといえます。

小樽に最初に印を持ち込んだのは近江商人の弁財船の「帆印（ほじるし）」でした。小樽で歴史的に印が普及したのは明治後期からですが、大正から昭和初期に発行された小樽電話番号簿（小樽市博物館蔵）は、印で引くことができるものも登場しているほどです。ユニークなものには〓「カネタマル」（金貯まる）といったシャレの効いたものや、〓「イチゼンバシ」（一膳箸）といったビジュアルなものもあります。この自由さも小樽の商人達の志としてうかがうことができます。



煉瓦造と奥の石造とがベストマッチングの外観

天井装飾と回廊のファンタジックな内観

洋館と石蔵の組み合わせは絶品
蒸気時計が花を添える

小樽オルゴール堂 本館【オルゴールショップ】

歴史的エピソード

共成株式会社　沼田 喜三郎

この建物は大正４年に共成株式会社の社屋として創建されています。

越中(富山県)西砺波郡津沢出身の沼田喜三郎は、48歳で明治15年小樽の於古発川上流に水車が並んでいるのを見て改良。同郷の京坂与三太郎を呼び、明治24年に共成株式会社を設立します。喜三郎らの建てた水車は直径６ｍ、日本一の大きさで、東京以北最大の精米会社の規模となります。米がつくれなかった北海道に、主に富山から玄米を移入して共成で精米し全道に卸す業務で大成しました。しかしこの社屋を建てる頃には、共成の経営は寿原英太郎に引き継がれています。

また沼田は、明治26年には開墾委託株式会社を設立し、５ヶ年で空知北部3800町歩を開墾し、道庁から土地を付与され、石狩平野の穀倉地帯に発展させます。大正11年に沼田村と名づけられました。

<『小樽豪商列伝』>

大正４年竣工の共成社屋<小樽市総合博物館 蔵>

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

煉瓦造２階建に銅板ぶきのマンサード屋根。正面中央の玄関は古写真をもとに再現しています。窓は防火に配慮し３重で、外に上げ下げ窓、内に両開き窓を納め、その間に鉄製の引き戸を入れています。２階には回廊をめぐらし、天井の装飾は創建時のままです。　<『小樽の建築探訪』>

建物使用履歴

大正４年に共成株式会社(精米・米穀商)の社屋として創建、戦後、フジヤ家具センター、その資本によるブルーハウスとなり、平成元年小樽オルゴール堂に至ります。

平成元年　小樽市指定歴史的建造物
平成６年　小樽市都市景観賞

現施設の Profile

①**現在の施設名**：小樽オルゴール堂 本館
②**住　所**：小樽市住吉町４-１
③**電　話**：0134-22-1108
④**ＵＲＬ**：https://www.otaru-orgel.co.jp/j_main.html
⑤**運営会社代表者**：株式会社オルゴール堂
代表取締役　柳田 春義
⑥**地図位置**：５

茶系のタイルがアクセントの外観

元銀行の回廊を活かした２階客席

内観に合わせたシャンデリア

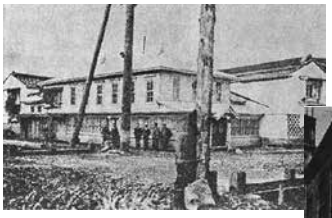
富山と小樽の交流遺産

銀の鐘1号館【ショップ】

歴史的エピソード

北前船と北陸銀行

中越銀行は明治45(1912)年に小樽支店が設置され<小樽新聞>、大正13(1924)年に新築<『小樽の建築探訪』>されたのがこの建物です。昭和18(1943)年には中越銀行、十二銀行、第四十七銀行といった小樽での北陸系銀行が合併して北陸銀行が設立されますが、そもそも北陸の金融機関と小樽の関係の起点は北前船でした。十二銀行小樽支店設置が明治32(1899)年で現在の北陸銀行小樽支店の起点で、令和元(2019)年で120年を迎えています。北陸系金融機関の設立の多くに北前船主が出資し、北陸系移民を小樽に呼び起業を支援したのが北陸系金融機関、さらに今日の小樽観光の歴史的建造物資源には北陸系の商人によるビジネスのものが多く建てられています。



昭和18年北陸銀行南小樽支店
<北陸銀行20年史>

明治45年港町1に開設された
中越銀行小樽支店
<北陸銀行創業百年史>

明治40年第四十七銀行小樽支店
設置、昭和11年に写真の建物が
新築<小樽市総合博物館 蔵>

中越銀行には「北陸銀行南小樽支店通用口」の看板が今も掲げられている

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

タイルと雷文様は外観のアクセントです<『小樽の建築探訪』>。屋上の円形ラウンジは後年増築されています。

建物使用履歴

大正13年に中越銀行小樽支店として創建され、昭和18年に北陸銀行南小樽支店と改称、昭和38年に小樽支店に併合後の昭和50年、繊維問屋戸出物産が縫製工場として使用し、平成６年に「銀の鐘１号館」となっています。

現施設のProfile

①現在の施設名：銀の鐘１号館
②住　所：小樽市入船１丁目１-２
③電　話：0134-21-2001
④ＵＲＬ：http://www.ginnokane.jp/
⑤運営会社：株式会社 長登屋
⑥地図位置：６

品格を備えた外観

清潔感あふれる店内

バウムクーヘン工房

記念写真のメッカとなった日藤メモリアルガーデン

北菓楼（きたかろう） 小樽本館【菓子】

建物のあらまし

外部の石材に関しては一切手を加えず、洗浄のみ行い、店舗に使用するための出入り口の周囲をコンクリートにて補強し、外壁は当時のまま使用しています。屋根は板金葺き替えとし、排煙窓を増設し、暖炉用煙突を増設しています。

建物使用履歴

年代不詳ですが明治に藤居氏が築蔵し、昭和戦後に紙文具卸の株式会社日藤本社(本店)が所有。平成11年に日藤株式会社小樽営業所を天神町へ移転した際、２棟の倉庫前の木造事務所および木造店舗を解体し、石造建築２棟（１棟は隣の六花亭）と前面の空き地を「日藤メモリアルガーデン」として整備しています。

平成14年北菓楼小樽本館として開館。

平成15年　小樽市都市景観賞

現施設の Profile

①現在の施設名：北菓楼小樽本館
②住　所：小樽市堺町７-22
③電　話：0134-31-3464
④ＵＲＬ：https://www.kitakaro.com/
⑤運営会社：株式会社北菓楼　代表取締役　堀　　昭
⑥地図位置：７

日藤メモリアルガーデンのアプローチ

吹き抜けの解放感

明かり取り

製造元で食すゆとりのイートインコーナー

六花亭 小樽運河店【菓子】

建物のあらまし

再生時は外観はほぼ創建時のままですが、内観は清潔感のため石壁を隠し、天井の梁はそのまま補強して活かしています。

建物使用履歴

年代不詳ですが明治に藤居氏が築蔵し、昭和戦後に紙文具卸の式会社日藤本社(本店)が所有、平成14年六花亭小樽運河店『北の大地美術館店』開館しています。

平成15年　小樽市都市景観賞

現施設の Profile

①現在の施設名：六花亭 小樽運河店
②住所：小樽市堺町７-22
③電話：0134-24-6666
④ URL：https://www.rokkatei.co.jp/
⑤運営会社：六花亭製菓株式会社　代表取締役社長　佐藤 哲也
⑥地図位置：８

小樽観光名所　北一硝子三号館

ファンタジック小樽の代名詞　北一ホール

荷物搬送用のトロッコレールが残る

小樽観光に風穴を開けた
小樽観光貢献度No.1

北一硝子三号館【ホール・硝子ショップ】

歴史的エピソード

木村倉庫　木村 円吉

6代目 木村 円吉
<小樽市商工会議所 蔵>

始祖木村円太郎（えんたろう）は天保元(1830)年に青森大泊（おおどまり）で生まれ、弘化３(1846)年には北海道の増毛（ましけ）で鰊漁を営み、後に浜益（はまます）にも進出します。当時松前の漁家花田伝七（はなだでんしち）(小平町の国指定重要文化財旧花田家番屋)の三男を円太郎(二代目円吉)の孫娘ミヤの婿養子に迎え、共に漁業に従事し、木村家独自の「建網（たてあみ）」を開発し、明治中期には小樽に拠点を設け、廻船問屋を営みます。浜益、小樽、十勝の土地を買い、大正９年には小樽一の大地主になっています。　<『小樽豪商列伝』>

昭和40(1965)年に６代目円吉は小樽商工会議所会頭時代に新日本海フェリーを誘致しています。この倉庫は昭和58(1983)年に北一硝子に譲渡されました。

その際に木村円吉が北一硝子の社長　浅原健蔵氏に問い正した「君の構想は小樽のためになるか」の一言に対し、「なります」と断言した逸話があります。

物流業界の大物には想像もできない夢の世界を浅原社長が見ていたのでしょう。

この夢が現実となり、小樽観光が始まりました。

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

中央の通路を挟んで２室に分かれ、通路には港から荷物を搬入する時に使ったトロッコのレールが今も残されています。内部空間のよさをそのまま残し、展示物や照明に工夫を凝らすなど、まさに歴史的建造物再生の見本です。

建物使用履歴

明治24年に木村倉庫として創建され、昭和58年に北一硝子三号館として再生されますが、この再生は小樽の観光都市への牽引役を果たし、歴史的建造物再生モデルとして多くの観光施設の範（はん）となってきました。

昭和63年　小樽市都市景観賞
平成３年　小樽市指定歴史的建造物

現施設の Profile

①現在の施設名：北一硝子三号館
②住　所：小樽市堺町７-26
③電　話：0134-33-1993
④ＵＲＬ：https://kitaichiglass.co.jp/
⑤運営会社代表者：北一硝子株式会社
代表取締役　浅原 健蔵
⑥地図位置：９

明治創建の事務所としては洗練されている

天井と床は新たに張り替えているが十分に古式

大金庫をディスプレーに使用

小樽で最も建物に魅了されて入りやすいデザインと規模

おたる瑠璃工房【アクセサリー】

歴史的エピソード

広海商事株式会社　広海 二三郎

広海といえば小樽の北運河にある「広海倉庫」の創健者です。広海二三郎は石川県加賀市瀬越出身で、同郷の大家七平(広海と姻戚関係)とともに、故郷の瀬越では「ご両家様」と尊称されるほど、自費による公共事業や寄附をしています。広海は明治初年ですでに北前船を８隻所有していますので、十分な貫禄を持つ北前船主でした。ちなみにその貫禄を物語る一端に、多額納税者であると同時に、瀬越にある広海の墓は、江戸期の大聖寺藩主よりも数段大きいのです。

広海は小樽進出の北前船主の中で最も早い明治22(1889)年に倉庫を建てており、北運河に現存しています。また明治32(1899)年には広海・大家両家が住吉神社に大鳥居を建立しています。大鳥居の裏にはしっかり「広海・大家」の名前が刻まれています。そして明治44(1911)年にこの建物広海商事株式会社事務所を開設します。明治44年ともなれば和船の北前船から汽船になり、広海商事は明治36(1903)年に汽船６隻を所有しています。この汽船の運航などの司令塔として、この事務所が使用されていたのでしょう。

広海･大家寄進の住吉神社大鳥居
＜小樽市総合博物館 蔵＞

建物のあらまし

この建物は事務所として使用し、本来の用途のまま旧態を良く残しています。昭和52年に、臨港線まであった倉庫と浴室棟を解体し、西向き正面にあった卯建の屋根部分は撤去しています。１階は玄関の北側に事務室、南側に旧応接室の洋間があり、玄関ホールの天井は２階床組が露出しています。階段の手摺りは親柱が八角形で意匠に優れています。　＜『小樽の建築探訪』＞

建物使用履歴

広海二三郎は安政元年石川県加賀市瀬越町(現在の住所)に生まれ、明治初年で北前船８隻(8300石)を所有し、明治12年には西洋型帆船購入、明治22年広海倉庫を小樽に創建しますが、この段階で和船と西洋型帆船で北前船経営を行っています。そして次第に汽船に移り、明治24年汽船３隻、明治36年汽船６隻を所有。明治41年　広海商事株式会社設立、明治44年　広海商事株式会社事務所開設となっています。以後、この建物は昭和23年白石工業株式会社事務所、平成19年カリオン堺町店、そして平成21年におたる瑠璃工房が開館しています。

現施設の Profile

①現在の施設名：おたる瑠璃工房
②住　所：小樽市堺町５-33
③電　話：0134-21-6260
④運営会社：株式会社オルゴール堂　代表取締役　柳田 春義
⑤地図位置：10

石蔵にマッチした外観

石蔵２階の石壁を残す

石蔵１階の落ち着いたインテリア

寿司屋通り以前に開店した元祖観光寿司店

ふじ鮨 小樽店【寿司】

歴史的エピソード

稲積 豊次郎

稲積 豊次郎
＜小樽市総合博物館 蔵＞

稲積豊次郎（いなづみとよじろう）は維新の７年前文久元(1861)年に富山県高岡の酒造家に生まれ、日清戦争に従軍します。明治31年に小樽米穀取引所の仲買人となり、倉庫業、牧畜業を起こし、明治30(1897)年には稲穂(現産業会館の場所)に腰を落ち着けました。明治後期に倉庫と居宅を構え、明治40年代に稲積倉庫合名会社を設立し、第一より第五までの倉庫を有していました。

小樽初の株式会社共成や中立銀行、拓殖銀行などの株を買い占め、昭和のはじめには資産70万円(今日の16億円相当か)を貯めますが、一切政治には手を出していません。　＜『続・小樽豪商列伝』＞

現在の臨港線入船角の札幌日産あたりにあった稲積倉庫
＜小樽市総合博物館 蔵＞

建物のあらまし

外観は白く風化した小樽軟石で、アーチ状の入口と窓に鉄の扉がしっかり残されています。母屋はふじ鮨開店の際に新築され、石蔵前の庭が美しく整備されています。

建物使用履歴

大正２年に稲積倉庫合名会社が賃貸していますが、創建は不明です。昭和62年に「おたる織物Kazu」が賃借し、平成３年にふじ鮨小樽店の所有となっています。積丹のふじ鮨創業は昭和45年で小樽店は積丹、ニセコに続き３店目です。

現施設の Profile

①現在の施設名：ふじ鮨 小樽店
②住所：小樽市堺町５-36
③電話：0134-33-0232
④ＵＲＬ：https://akr2473227106.owst.jp/
⑤運営会社代表者：株式会社美国ふじ観光
代表取締役　佐藤 勝次
⑥地図位置：11

木造モルタルの昭和感満載の外観

和風硝子製品はじめ雑貨も楽しい

大金庫もディスプレーに

旧店舗名の看板もうれしい

和風硝子に焦点を当てたユニークさ

大正硝子 かんざし屋【和風硝子ショップ】

建物のあらまし

外観は木造二階建ての和風商家の趣をそのまま生かしています。

内観は大金庫を商家風にディスプレーし、碍子（がいし）引き配線を生かし、２階も趣ある造りになっており、観光客の休憩スペースも含めて検討中。

建物使用履歴

創建年代は不詳ですが、昭和22年に宮下商事株式会社（藁工品卸）が購入して使用し、平成24年に小樽大正硝子かんざし屋が開館しています。

現施設の Profile

①**現在の施設名**：大正硝子 かんざし屋
②**住　所**：小樽市堺町４-８
③**電　話**：0134-24-0345
④**ＵＲＬ**：http://www.otaru-glass.jp/store/kanzashiya
⑤**運営会社**：株式会社アートクリエイト　代表取締役　久末 智章
⑥**地図位置**：12

コラム 日本一祭りが多い？

「祭り」といえば昔から神社祭のことです。今日の小樽では神社祭以外のイベントも数多く開催されていますが、「祭り」も多いのです。小樽は北海道の中でも多様な地域からの移民で構成され、移民たちが故郷の「祭り」を小樽にも持ち込んだからです。このような経緯から想像すれば「日本一」とまでは言えないにしても、突出して多いと言っても過言ではないでしょう。

神社への信仰（神道）もさることながら、江戸時代からの慣習で「宗門人別改帳（しゅうもんにんべつあらためちょう）」なる決まりがあり、故郷の実家が浄土真宗を信仰していれば、その家から出る者はその家の信仰を持ち歩く決まりがありました。それは幕府が戸籍管理を寺院に委託していたからです。昔は今日より教育や科学や情報が希薄でしたので、心の拠り所として神社や寺院が人々に身近だったのでしょう。このような仏教の背景から類推して、移民たちが故郷で馴染みの神様も運んで祭りが誕生したと思えます。

＜５月＞ 招　魂　祭　（花園5丁目）
＜６月＞ 潮見ヶ岡神社（若竹町1-10）
張碓稲荷神社（春香町291）
厩　神　社　（手宮3丁目）
小樽稲荷神社（末広町38-1）
水　天　宮　（相生町3-1）
蘭 島 神 社　（蘭島1丁目3-26）
能島水天宮　（梅ヶ枝町4-27）
龍 宮 神 社　（稲穂3丁目22-11）
恵美須神社　（祝津3丁目161）
豊 足 神 社　（銭函2丁目9-10）
＜７月＞ 忍 路 神 社　（忍路1丁目416）
熊 碓 神 社　（桜5丁目26-10）
高島稲荷神社（高島3丁目14-1）
塩 谷 神 社　（塩谷2丁目20-20）
住 吉 神 社　（住ノ江2丁目5-1）
＜８月＞ 天　満　宮　（天神1丁目9-21）
朝 里 神 社　（新光2丁目13-5）

コラム 小樽の寺院

小樽の仏教寺院の始まりは、元禄17(1704)年6月高島(現正林寺境内)に病没者、遭難者のため地蔵を建立。安政2(1855)年6月有幌に東本願寺掛所(量徳寺の前身)建立。安政4(1857)年法惠本願寺の創立を出願し許可を得て新地町に一万坪の貸下を受け本願寺休泊所(本願寺小樽別院の前身)を設ける。安政5(1858)年於古発川畔に妙見堂(妙龍寺の前身)建立。同年6月龍徳寺が寺号公称の経緯が確認できます。<『小樽歴史年表』>

寺院が正式に認められる場合を「寺号公称」といいますので、小樽で最も古いお寺は龍徳寺となります。次に慶應3(1867)年正法寺寺号公称。明治3(1870)年量徳寺寺号公称となり、曹洞宗の龍徳寺と正法寺が先鞭をつけ、浄土真宗の量徳寺が本願寺道路を有珠～札幌に造られた時期に定着しています。

現在全国の仏教宗派寺院数が最も多いのは、各派含めると、浄土真宗20,850、曹洞宗14,604、真言宗12,404、浄土宗8,371、日蓮宗5,533、臨済宗5.378<法林寺作成>の順ですが、小樽では浄土真宗21、曹洞宗13、真言宗11、日蓮宗7となり、順位は全国と同じです。

いずれにしても、神道も仏教も移民が小樽に持ち込みました。

小樽の仏教者の特徴は、早くから宗派を超えて連携していることです。その始まりは、明治22(1889)年に龍山雷雲(たつやまらいうん)、中川慈照(なかがわじしょう)らが「小樽協同談話会」を企画し仏教の講義を行い、大正13(1924)年に『小樽仏教連合會』を設立し「第3回花まつり」を主催、昭和4(1929)年には北海道仏教会小樽支部発足、昭和22(1947)年『小樽仏教会』が創立され、今日も続いています。

小樽寺院一覧

- ●天台宗：浅草観音寺、光明寺
- ●真言宗：金毘羅大本院、金寶寺、新興寺、新正寺、精周寺、日光院、不動院(無漏)、不動院(成田)、宝山寺、法蔵院、龍照寺
- ●浄土宗：観昌寺、直行寺、長昌寺、天上寺、無量寿寺
- ●浄土真宗：圓成寺、光雲寺、西園寺、浄應寺、正覚寺、聖教寺、正行寺、浄暁寺、昭顕寺、浄秀寺、證真寺、浄蓮寺、真光寺、真正寺、誓願寺、専名寺、潜龍寺、宝泉寺、法雷寺、本願寺小樽別院、量徳寺
- ●曹洞宗：円竜寺、興聖寺、高台寺、正光寺、正法寺、昭龍寺、正林寺、宗圓寺、東光寺、南龍寺、龍眼寺、龍泉寺、龍徳寺
- ●日蓮宗：日正寺、本妙寺、妙光寺、妙國寺、妙昌寺、妙龍寺、信受寺
- ●法華宗：宣誠寺、妙源寺、妙法華寺

龍徳寺

量徳寺

小樽出世前広場

不老館

品格と遊びのマリアージュ

小樽出世前広場・不老館・大正クープ館

歴史的エピソード

みのや流昆布売り

４館とも有限会社利尻屋みのやの経営です。昭和15(1940)年利尻生まれの現会長簑谷修氏が51歳で起業した市内唯一の「昆布専門店」です。

「七日過ぎたら鏡をごらん」「お父さん預かります」などユーモアあふれるキャッチコピーと品質が評価され、次々と堺町を核に出店してきました。

簑谷修氏は起業当初から「堺町・色内・寿司屋通りなどの観光街を明治・大正の街並みに」と小樽観光の明確なビジョンを提唱していたこともあり、出店する際には、普通の建物を自ら設計したデザインに改築してきました。しかも部材は道内で解体が決まった古建築から調達するという徹底振りです。

小樽の歴史的建造物再生事例には３つのパターンがあるようです。多くがそこにある歴史的建造物を再生改築するケース、籔半のように新築に古い部材をはめ込むケース、そしてみのやのように普通の建物を自ら描いた設計に基づいて古い部材を再活用して改築するケースです。簑谷氏は寿司屋通りがかつて見番や置屋が建ち並び、芸者や人力車が行き交っていた風景を想像し、妙見川沿いに柳を植樹する運動も先導しています。またみのや店舗の特徴は、販売コーナーだけを拡げることなく、試食や試飲コーナーを充実させるとともに、ユニークな商品名をつけ、骨董品ディスプレーや「歴史館」などのミュージアムを併設し、いわば遊びと品格を兼ね備えています。さらには小樽の様々なキーマンを招いて「炉端放談会」を開催し、本音、無礼講、飲酒をモットーに情報交換されています。まさに小樽の大宣伝マンです。

小樽歴史館（出世前広場）

試飲試食コーナー（ホラ吹き昆布館）

大正クープ館

ホラ吹き昆布館

・ホラ吹き昆布館【昆布ショップ】

昆布ミュージアム（ホラ吹き昆布館）

大正の生活ディスプレー（大正クープ館）

かつての外壁を内壁に利用（不老館）

建物使用履歴〈建築順〉

ホラ吹き昆布館：年代不詳旧小山屋ブラシ製作所（左）と金庫屋（右）、平成３年ホラ吹き昆布館
大正クープ館：戦前小鎌商店、戦後ファインクラフト、平成12年大正クープ館
不老館：平成15年不老館
小樽出世前広場：平成17年小樽出世前広場

利尻屋みのや　代表取締役会長　簑谷　修 氏

現施設のProfile

①**現在の施設名**：ホラ吹き昆布館
大正クープ館、不老館
小樽出世前広場
②**住所・電話**
ホラ吹き昆布館：小樽市堺町４-６　0134-25-4060
大正クープ館：小樽市堺町２-20　0134-31-4014
不老館：小樽市堺町１-20　0134-31-3663
小樽出世前広場：小樽市堺町２-12　0134-25-4060
③**運営会社**：有限会社利尻屋みのや
代表取締役会長　簑谷　修
代表取締役　簑谷 和臣
④　**地図位置**：13（ホラ吹き昆布館）

小樽軟石独特の灰色が美しい

１階待合席の軟石

１階梁のディスプレー

寿司店として石蔵を丁寧に活用したシンボル

小樽磯鮨【寿司】

２階軟石壁の大胆な露出

２階の梁は素朴にそのまま

建物のあらまし

典型的な小樽軟石を使用し、待合席の腰掛けも軟石、２階座敷は軟石壁そのものを活用しています。古材の梁をディスプレーに活用し、もともとあった天井の梁を露出させていることからも、運営者の石蔵への愛着を感じます。

現施設の Profile

①現在の施設名：小樽磯鮨
②住　所：小樽市堺町４-１
③電　話：0134-21-2022
④ＵＲＬ：https://k-hakodate.com/free/isozushi
⑤運営会社：株式会社足立商事コーポレーション　代表取締役　足立 嗣生
⑥地図位置：14

コラム 小樽観光の序章

小樽は鰊で始まり物流で発展してきましたので、外から客を迎える観光に対して、受け皿としての風景も気質も組織も意識していませんでした。以下に観光関連のデータを拾ってみます。

明治34年８月	朝里村に朝里温泉旭風館開業 （温泉観光の嚆矢）
大正９年６月13日	天狗山登山道路完成、山開き挙行 （登山観光の嚆矢）
大正10年３月３日	内務省は手宮洞窟を史蹟に指定 （文化財観光の嚆矢）
昭和６年12月12日	北海道初の越中屋ホテル新築 （近代ホテルの嚆矢）
昭和９年６月15日	蛇の目経営の加藤秋太郎が オタモイ龍宮閣披露宴開催 （名勝観光の嚆矢）

＜『小樽歴史年表』＞

商業港湾都市としての街並みが大方形成され、商談や道内外からの客を迎える越中屋ホテルが昭和６(1931)年にできています。それまでは主に市民を対象とした娯楽として温泉や登山道が整備されたと見ていいでしょう。驚くのは昭和９(1934)年に突如としてオタモイ龍宮閣が生まれ、市民はもとより道内から大勢の観光客が訪れるようになります。しかし、戦後には火事となり、一夜の夢の如く人々に鮮明な記憶を残して消滅してしまいます。

小樽運河保存運動時に描かれた小樽運河の将来ビジョン

そして昭和後期に小樽運河保存運動が勃発し、歴史的(近代史)街並みの再利用が主張され、今日の小樽観光に至りますが、それまでの全国の名所旧跡観光とは異次元の「まちづくり観光」として、独自の観光を歩んでいます。

小樽では珍しい和風の歴史的建造物

床の木材があずましい

石蔵のステンドグラスショップ

創建時からこんなお店と感じさせ 良質な再生には良質なお客が集まる

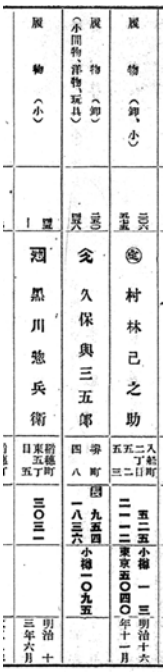
大正硝子 くぼ家・Maharo【喫茶・ステンドグラスショップ】

歴史的エピソード

久保商店　久保 与三五郎

久保商店の創業と発展については、市内在住の五宮佐和子さんから教示された資料にもとづいて紹介します。創業者は五宮さんの祖父久保与三五郎と祖母ステで、福井県出身。明治24(1891)年小樽で卸問屋を創業。履物と玩具を扱い、夕張にも出店し大いに繁盛していました。大正５(1916)年当時には現在の場所で小間物を扱い、道路を隔てた海側では、履物と玩具を販売。大正11(1922)年には海側の土地に鉄筋コンクリート造３階建のビルディングを建て、エレベーターと鉄のシャッターを備えるモダンな建物でした。

＜『小樽學86号』駒木定正＞



大正11年
小樽商工名録より

犬島商会だったころ＜小樽市広報公聴課 蔵＞

さかい家

旧問屋街堺町に昭和58年「北一硝子三号館」が誕生して間もない、昭和60年にこの建物は「さかい家」というカフェとして再生されました。したがって昭和期には北一硝子とさかい家の奮闘によって、小樽観光が始まったといっても過言ではありません。

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

外観は母屋と石蔵が一体となり、店内は商店だった時の天井、床、柱、階段、漆喰塗りの引き戸をそのまま残し、金庫をインテリアに活用するなど、その落ち着いた雰囲気は観光客の心を安らかにしてくれます。２階には和室３室があり、12.5畳の座敷飾の床と違棚を備え、隣接する7.5畳間の境に襖と井桁に筬欄間を収めています。

＜『小樽學86号』駒木定正、『小樽の歴史的建造物』＞

建物使用履歴

明治40年に久保与三五郎が久保商店(洋物・小間物店)を創建し、大正13年　犬島商会(損害保険業)に譲渡、その後「ヤマコウ奥野」が所有し、昭和60年に「さかい家」が賃借してカフェを開業。平成29年に「大正硝子 くぼ家・Maharo」が開業しています。

平成４年　小樽市都市景観賞
平成５年　小樽市指定歴史的建造物

現施設の Profile

①現在の施設名：大正硝子 くぼ家・Maharo
②住　所：小樽市堺町4-4
③電　話：0134-31-1132
④ＵＲＬ：http://www.otaru-glass.jp/store/kuboya
⑤施設代表者：株式会社アートクリエイト
代表取締役　久末 智章
⑥地図位置：15

奥野商店のレトロ感満載の外観

新旧融合のディスプレー

お婆ちゃんの宝物道具類

奥野の奥の石蔵

小樽観光動機のトップ「レトロ感」そのもの

大正硝子 奥野商店【雑貨ショップ】

歴史的エピソード

老舗 山甲（やまこう） 奥野

山梨県から渡道した奥野伯太郎（はくたろう）は明治21(1888)年、小樽の堺町で金物卸の<㊥奥野>(山甲奥野伯太郎商店)を創業します。二代目栄太郎、三代目義夫と継承され、義夫没後に妻淑枝（よしえ）氏が引き継ぎ、令和２(2020)年に132年間の幕を閉じ廃業します。廃業前の奥野㈱は現在観光ストリートとなっている堺町では、明治17(1884)年創業の名取高三郎商店(現ナトリ株式会社)に次いで古く、小樽市内においても老舗10指に入る格式でした。

JAZZと奥野義典氏

昭和37(1962)年生まれ、弘前大学のJAZZ研に所属し、卒業後東京のライブハウスで活躍していた奥野義典（よしのり）氏は、平成元年帰樽し稼業を継承、配達・荷造り・営業に汗をかいていましたが、金物卸の業態変革や業界再編の波は例外なく襲い、旧態での業務拡大には限界を感じていました。

「僕に企業経営の才覚があれば、さてどうするかと思い、勉強したり情報を集めたり熟考したりしたのでしょうが、その道にはいつも限界を感じていました」

奥野 義典 氏

こんな時、昭和61(1986)年から毎年開催されていた野外JAZZライブを伴ったサマーフェスティバル実行委員会から声がかかり、ステージにJAZZ仲間と登壇。平成３(1991)年から実行委員会に加わり、平成６(1994)年にはファイナルとなった第９回実行委員長を全うし、現在は札幌を中心にSax奏者として活躍しています。 <『小樽學』>

現在の「奥野商店」の建物を賃借しているのが、サマーフェスティバル第２回目の実行委員長久末智章（ともあき）氏率いる大正硝子というのも縁というほかありません。

建物のあらまし

木造の店舗の奥に石蔵が２棟連なっています。扱い品はいわゆる「荒物」で日用雑貨、たとえば笊（ざる）や桶（おけ）といった台所用具、草鞋（わらじ）、箒（ほうき）、塵取（ちり）りなどをいいます。奥野のビジネスは基本的に卸売で全道に卸していました。石蔵はそれらの在庫を収納していたようです。

建物使用履歴

明治21年に創業ですので、石蔵はそれ以後に増築しています。

令和２年に大正硝子に賃貸し、現店舗は大正硝子が旧奥野商店を尊重してプロデュースしています。

現施設の Profile

①現在の施設名：大正硝子 奥野商店
②住　所：小樽市堺町3-22
③電　話：0134-34-2711
④運営会社：株式会社アートクリエイト
代表取締役　久末 智章
⑤地図位置：16

小樽では珍しい黒壁

鉄柱を際立たせ漆喰壁を活かす

２階貸切フロアは格天井、二重窓で防寒

店主の笑顔が古民家の安らぎを倍増

たけの寿司【寿司】

建物のあらまし

外観は大正初期に中山家自宅として建設された際、卸売店舗が居並ぶ堺町だったことから、商家風にしたことがうかがわれ、再生時には瓦屋根と漆喰づくりをそのままにして修復。内観は漆喰壁、腰板、格子窓、シャンデリアをそのまま生かし、趣あるスペース。階段や１階鉄柱の意匠が特徴的です。

建物使用履歴

明治35年にヤマジョウ印中山倉庫の石蔵を造り、明治40年中山倉庫は中山合名会社に組織変更し、大正初期に中山倉庫自宅として木造で増築しています。

昭和初期には料理店に転用、その後深谷電器が社屋として再利用し、平成３年　東京本社の養老之瀧株式会社が所有し、寿司処多喜二、民宿旅籠に賃貸、平成25年、続いて令和元年に所有者が移転し、たけの寿司に賃貸継続されています。

現施設の Profile

①**現在の施設名**：たけの寿司
②**住　所**：小樽市堺町２-２
③**電　話**：0134-25-1505
④**ＵＲＬ**：http://www.otaru-takenosushi.net/
⑤**運営会社**：たけの寿司　代表　武田 賢一
⑥**地図位置**：17

コラム　小樽が観光都市に生まれ変わる瞬間

小樽が現在の観光都市になる伏線は、高度経済成長真っ直中で、そのスクラップ＆ビルドの洗礼を受けていない地域をロケ地とした山田洋次監督の『男はつらいよ』により、日本人の原風景と心を訴えてきました。国民の心に、スクラップ＆ビルドへの反省が芽生えたといえます。その頃小樽では、昭和48年以来小樽運河保存運動が始まり、昭和50(1975)年石蔵再利用「叫児楼」、昭和52(1977)年赤煉瓦倉庫再利用「海猫屋」が開店し、歴史的建造物再生のモデルが誕生します。その間に、昭和51(1976)年倉本聰原作で小樽をロケ地にしたテレビドラマ『幻の街』が全国放映され、「レトロな街並み」が全国に記憶されます。それを受けてまた小樽には昭和55(1980)年北一硝子が馬橇にランプをディスプレーし、女性雑誌『an・an』に掲載、そして昭和58(1983)年にいよいよ北一硝子三号館が開店、昭和61(1986)年には小樽運河が整備されて「小樽観光元年」といわれるようになりました。

昭和50年開店石蔵再生「叫児楼」の内観２階

昭和52年開店煉瓦倉庫再生の「海猫屋」の内観２階

屋根の上の２本の石造りの尖塔が印象的

内部は白壁で覆われ二重窓で外気遮断

カーテンボックスはそのまま活かされている

内部の一部に石壁を露出

小樽をオルゴールの街に仕掛けた経営者の店

オルゴール堂® 海鳴楼本店【オルゴール専門店】

歴史的エピソード

我が国最古級の銀行本館建築

この建物は明治26(1893)年創建の銀行建築ですが、我が国の重要文化財(８件)と登録有形文化財(13件)になっている明治期創建の銀行本館の中では最古の可能性があります。日本銀行本店ですら明治29年ですし、全国の銀行本館の遺構の中でも最古級と思われます。小樽の国指定重要文化財は旧日本郵船㈱小樽支店と手宮鉄道施設の２件しかありませんが、たとえば函館には６件あります。

この建物の古格からして重要文化財に十分該当するのではないでしょうか。さらなる調査や運動によって重要文化財指定を実現したいものです。

＜『小樽學』116号駒木定正＞

第百十三国立銀行小樽支店
実測立面図
(製図：安念美幸)

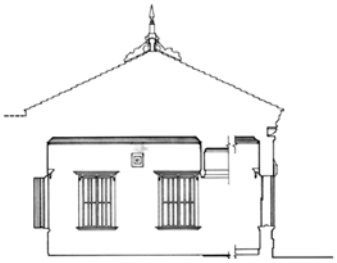


表-1. 重要文化財の銀行(文化庁データを基本)

名　称	時代	重文指定年月日	所　在　地	所有者名
旧第五十九銀行本店本館	明治37	1972. 05. 15	青森県弘前市大字元長町26番地	弘 前 市
岩手銀行(旧盛岡銀行)旧本店本館	明治44	1994. 12. 27	岩手県盛岡市中ノ橋通一丁目2番20号	株式会社岩手銀行
旧第九十銀行本店本館	明治43	2004. 07. 06	岩手県盛岡市中ノ橋通一丁目1番25号	盛 岡 市
旧秋田銀行本店本館	明治45	1994. 12. 27	秋田県秋田市大町三丁目3番21号	秋 田 市
日本銀行本店本館	明治29	1974. 02. 05	東京都中央区日本橋本石町二丁目1番1号	日本銀行
旧横浜正金銀行本店本館	明治37	1969. 03. 12	神奈川県横浜市中区南仲通五丁目60番地	神奈川県
旧日本銀行京都支店	明治39	1969. 03. 12	京都府京都市中京区三条通高倉西入菱屋町48番地	京 都 府
旧香港上海銀行長崎支店	明治37	1990. 03. 19	長崎県長崎市松ヶ枝町4番27号	長 崎 市

建物使用履歴〈小樽市指定歴史的建造物〉

明治26年に第百十三国立銀行小樽支店として創建されています。この場合の「国立」とは「国法によって立てられた銀行」という意味で、民間資本が法律に基づいて設立経営したもので、国が設立して経営した銀行ではありません。銀行名の数字は設立順を示しています。ちなみに日本初の国立銀行は渋沢栄一が明治６年に設立した第一国立銀行で、現みずほ銀行の起点です。明治29年に「国立銀行営業満期前特別処分法」が制定され、各銀行から「国立」の名称が消えています。＜ブリタニカ国際大百科事典＞現在の浪漫館はこの第百十三国立銀行小樽支店が移転新築して、「国立」がはずされ百十三銀行小樽支店になっています。

昭和23年に北海道林屋製茶株式会社所有となり、平成15年利尻屋みのやが所有し、平成16年花月(かげつ)堂に賃貸、平成21年海鳴楼(かいめいろう)に賃貸となっています。

昭和60年　小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①**現在の施設名**：オルゴール堂®海鳴楼本店
②**住　所**：小樽市堺町1-20
③**電　話**：0134-23-6505
④**ＵＲＬ**：http://www.kaimeiro.com/
⑤**運営会社代表者**：株式会社おたる海鳴楼　顧問　塚原 ふさ子
⑥**地図位置**：18

縦長の窓が特徴的

内観はまさにファンタジーなアート空間

奥へ進むと碍子引き配線がレトロなインテリア

洗練された硝子のアート作品は見応え抜群

大正硝子 宇宙（SORA）【硝子アート】

建物のあらまし

碍子（がいし）引き配線を残し、取扱品目が「硝子のアート」作品であることから、ファンタジックな内装環境となっています。器を主とした硝子製品が多い小樽ですが、ここではアート感覚で製作された商品がラインナップされており、小樽の硝子の奥深さを多くの観光客に与えています。

建物使用履歴

創建年代は不詳ですが、昭和40年代に雑穀の相場で商う合資会社丸二殖産商会が使用していました。丸二殖産の柳生社長の立派な邸宅が富岡の海の見える場所にありました。雑穀相場といえば高橋直治が小樽で大儲けしたことから派生したビジネスです。平成13年には株式会社栗原恒次郎商店が所有し、平成17年に大正硝子が倉庫として賃借、平成23年に宇宙（SORA）が開店しています。

現施設の Profile

①現在の施設名：大正硝子 宇宙（SORA）
②住　所：小樽市堺町１-22
③電　話：0134-33-5333
④ＵＲＬ：http://www.otaru-glass.jp/store/sora
⑤運営会社：株式会社アートクリエイト　代表取締役　久末 智章
⑥地図位置：19

雪景色の似合う石蔵

梁を活かした内観

階段手摺が粋

卯建（うだつ）と質実剛健（しつじつごうけん）な外観で硝子小物の意外性がおもしろい

小樽硝子の灯・彩や【硝子小物ショップ】

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

木骨石造２階建ての事務所建築です。この通りには旧金子元三郎商店、旧岩永時計店などがあり、小樽らしい石造り商店の景観を形成しています。外観正面は両袖に卯建を建て、２階内部は創建時の様子を残し、和室に上げ下げ窓があり、その窓は鉄扉で守られ、カーテンボックスは見事な彫刻が施されています。　＜『小樽の建築探訪』＞

建物使用履歴

創建は明治42年以前に北海雑穀株式会社小樽営業所です。その後の変遷は不詳ですが、小樽硝子の灯・彩やは平成年間に開店しました。

平成29年　小樽市指定歴史的建造物

現施設の Profile

①現在の施設名：小樽硝子の灯・彩や
②住　所：小樽市堺町１-18
③電　話：0134-61-1100
④ＵＲＬ：https://www.advance-otaruglass.com/
⑤運営会社：ADVANCE 倶楽部
⑥地図位置：20

シンメトリーの美しい外観

火伏の象徴シャチホコ

元時計店で大きな古時計が特徴的

店舗では唯一シャチホコが揚げられ、均整のとれた外観

小樽オルゴール堂 堺町店【オルゴールショップ】

歴史的エピソード

建築年と岩永時計店楽隊

『小樽歴史年表』には「明治29年12月３日堺町の岩永時計舗開業<小樽新聞>」と記されています。これは開業の年月ですが、この建物は明治32年に岩永時計舗として新築されたものです<銀行大商辞書>。写真の明治34(1901)年11月17日北海タイムスに紙や文具を扱う「奥山商店」が「旧岩永時計店跡に移転開業」しており、つまり岩永は明治29(1896)年に開業し、同32(1899)年にこの建物を新築移転したことを表しています。

また「明治33年岩永時計店楽隊結成<北海道銀行大商店辞書>」はいかにも進取の気性の表れです。「当日の音楽隊は又々岩永時計店並びに日の丸音楽隊より寄贈に決し<小樽新聞明治36年８月26日>」と端艇(ボート)会の催しの記事があり、「又々」から小樽では岩永楽隊が活躍していた様子が読み取れ、岩永楽隊は開け行く小樽で人気を博していたことがうかがえます。

今日では国民的スポーツの野球部が企業や商店所属になることは不思議ではありませんが、音楽隊を明治33(1900)年に商店がつくるハイカラ性は実に珍しいことです。「音の広告」は小樽ではチンドン屋があったし、街頭放送は今もありますが、まさに「鳴り物入り」でひときわ賑やかだったと想像できます。岩永の進取の気性はこればかりではなく、屋根にシャチホコを掲げるデザイン性も、小樽では数少ない事例です。

明治29年12月３日
小樽新聞
(旧店舗の広告)

明治34年11月17日
北海タイムス
３行目「旧岩永時計店跡」

建物のあらまし

この建物は木骨石造の商店建築としては最古の部類に入ります。昭和25年に改築、平成３年に２階ベランダなどを復原しています。屋根の上にシャチホコがのり、当時の小樽商人の心意気が伝わってきます。

明治33年創建間もない時の楽隊
<小樽市総合博物館 蔵>

建物使用履歴〈小樽市指定歴史的建造物〉

岐阜県出身の岩永新三郎(しんさぶろう)が明治14～15年に渡道し、永井町(現南樽駅の裏)で古衣及び質業を兼営します。明治28年に新三郎没後、新太郎が相続して間もない同29年に店舗を焼失してしまいます。同年には堺町に道内最古の時計店を開業。明治32年にこの新店舗を建設します。同39年に東京支店を設置しているのは、今日の「東京本社・地方支店」とは真逆で小気味いいのではないでしょうか。

さて建物は明治32年創建で設計施工は大虎でした。平成24年には株式会社オルゴール堂に賃貸し「小樽オルゴール堂堺町店」名で営業。平成31年に株式会社オルゴール堂に売却されています。<竹内勝治調査>

昭和60年　小樽市指定歴史的建造物
平成５年　小樽市都市景観賞

現施設のProfile

①現在の施設名：小樽オルゴール堂 堺町店
②住　所：小樽市堺町１-21
③電　話：0134-31-1110
④ＵＲＬ：https://www.otaru-orgel.co.jp/j_sakaimachi.html
⑤運営会社：株式会社オルゴール堂　代表取締役　柳田 春義
⑥地図位置：21

頑丈な石造建築

アクセサリーが映える空間

卯建が上がった商家

裏には石蔵

卯建に蔵持ちだから どこに出しても恥ずかしくない佇まい

おたる瑠璃工房 運河店【アクセサリー】

歴史的エピソード

金子 元三郎

金子 元三郎
<小樽市総合博物館 蔵>

明治２(1869)年新潟県三島郡寺泊に生まれ、19歳で松前の金子家の養子となり、上京した際に右翼の頭山満や金玉均（清朝から朝鮮独立を企んだが失敗して日本に亡命）などと交流し、明治24(1891)年には小樽で新聞「北門新報」を発行、主筆に東洋のルソーこと中江兆民を招きます。しかし兆民はのんだくれてばかりでした。小樽の長者番付(昭和６年)横綱の板谷宮吉の初代が越後から出て草鞋を脱いだのも松前の金子家でした。これだけでも異色ですが、金子は財を成した小樽商人の中では最も話題が多く残されています。今ではロシアを「露」といいますが、かつては「魯」と書き、「魯鈍を印象してしまうから露へ」と改める提案を金子はしています。また小樽の浅草寺の右側に大邸宅を構え、その庭に芸者を集めて芸者を駒に将棋をしたり、国政の選挙でズルをしたり、菩提寺として直行寺(その後緑に移転)を堺町に建てたり、その殿様振りは群を抜いていました。

明治33(1900)年には初代小樽区長、明治37(1904)年国会議員、大正３(1914)年憲政会北海道支部長となり、政治の大好きな商人でもあったようです。

この建物は金子元三郎商店で年代からすると小樽初の新聞社「北門新報」を明治24年に創立していますので、その拠点でもありました。

昭和40年代には廃墟となった金子邸<小樽市広報広聴課 蔵>

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

小振りですが、堅牢な木骨石造の姿は明治商家の典型です。丸に橘紋のある２階の窓飾りと卯建が往時を物語っています。　<『小樽の建築探訪』>

建物使用履歴

明治20年金子元三郎商店として創建し、昭和36年三立商会倉庫、平成４年レストラン楽、平成10年代寿司処多喜二、平成19年カリオン堺町店、平成21年おたる瑠璃工房運河店開設に至ります。<竹内勝治調査>

平成５年　小樽市指定歴史的建造物
平成５年　小樽市都市景観賞

現施設のProfile

①現在の施設名：おたる瑠璃工房 運河店
②住　所：小樽市堺町１-22
③電　話：0134-31-5101
④運営会社：１階　株式会社オルゴール堂
２階　有限会社ミュージックボックス
おたる瑠璃工房の姉妹店として設置。２階ではミュージックボックスがオルゴールの工房として使用。
⑥地図位置：22

正面玄関が交差する道路の角に向く独特な外観

開放感満載の吹き抜けの内観

あえて残した碍子引き配線

鉄骨で補強された梁

創建の銀行も驚く再生モデル

小樽浪漫館【硝子ショップ】

歴史的エピソード

藤森 茂男

藤森 茂男

昭和中期に看板制作の株式会社フジモリがこの建物を使用していましたが、専務であった藤森茂男は、小樽運河保存運動の起点を興したキーマンでした。昭和46(1971)年に札樽バイパスが開通し、その連絡道路としての臨港線建設のために沿線(有幌地区)の石造倉庫が次々に解体される様を目の当たりにし、「このままでは運河も埋め立てられ沿線(運河地区)の石造倉庫も壊される。小樽の歴史文化が台無しになってしまう」と危機感を抱いて、昭和48(1973)年に小樽運河を守る会発起人会を組織し、昭和50(1975)年に小樽運河を守る会事務局長として奔走しました。しかし当時の運河埋立方針であった経済界の圧力によって倒産し病に倒れてしまうのです。しかし彼の意志を継いだ小樽の若者達がポートフェスティバルを運河で開催するなど運動の効果により、全面埋立を免れ今日の運河となり、小樽の基幹産業観光に繋がっているのです。

昭和57年有幌倉庫群の解体<撮影:井上雅博>

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

小樽浪漫館開設に伴い、川沿いの北側の棟を増築していますが、外観は本館と同様の設計で違和感なく一体化しています。小樽には同じように小樽バイン(旧北海道銀行本店)の裏が後年一体化を講じて増築されています。いずれも周辺の街並みに配慮した好例です。　<『小樽學』119号駒木定正>

内部天井の碍子引き配線は使われていませんがそのまま残しています。

碍子引き配線とは昭和38年頃まで使われていた配線方式で、白い陶器製の物が、配線の要であるガイシ(碍子)といわれるものです。

昔の電線は今のようにビニールで覆われているものはなく布製でした。そのため配線の絶縁性を高めるために、ガイシで電線を壁から浮かして配線をしていたのです。

建物使用履歴

ちなみにこの場所には明治22年に寿原猪之吉が和洋小間物店を開設しています。建物は明治41年百十三銀行小樽支店として創建され、明治26年に創建された第百十三国立銀行小樽支店が移転したものです。昭和中期には株式会社フジモリ、昭和後期千秋庵、平成15年小樽浪漫館に至っています。

昭和60年　小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①**現在の施設名**：小樽浪漫館
②**住　所**：小樽市堺町１-25
③**電　話**：0134-31-6566
④**ＵＲＬ**：http://www.tanzawa-net.co.jp/shop/02.html
⑤**運営会社代表者**：株式会社タンザワ　相談役　丹沢 良治
取締役　丹沢 大一
⑥**地図位置**：23

木骨石造に内壁を煉瓦で防寒

２階は回廊を巡らし吹き抜けが開放感を

梁もまた煉瓦色に合わせデザインと化した天井

外は軟石、内は煉瓦の絶妙な組み合わせの中でアナログな灯りを

小樽キャンドル工房【キャンドルショップ】

歴史的エピソード

銀行が倉庫？

発見された棟札には「神武天皇即位紀元弐千五百七拾壱歳吉辰」とあり、「紀元弐千五百七拾壱」とは1911(明治44)年にあたり、上棟式があったことを表しています。しかも建て主が「百十三銀行」であることから、隣の「旧百十三銀行(現浪漫館)」(明治41築)が建てたと確定できます。

「なぜ銀行が倉庫を？」と思いますが、おそらく銀行が取引先(物流関連の企業が多かった)の利便のため、あるいは倉庫業を兼営し保管料収入を当て込んだとも考えられます。この兼営パターンは、我が国倉庫業の先駆けが明治13年の三菱為替店であることからもめずらしいことではありません。

その後の経過では、百十三銀行は昭和３(1928)年に旧北海道銀行(現北海道銀行とは異なる)に合併・解散し、同支店も昭和５(1930)年に閉鎖されています。

＜『小樽の銀行小史』＞

◀棟札「神武天皇即位紀元弐千五百七拾壱歳吉辰」

▶棟札「建主 株式会社百十三銀行 棟梁山谷文吉」

新たな発見として、登記簿謄本に出てくる株式会社曲丸古谷商店が、色内２丁目の「石と鉄」の建物を一時所有していたことは興味深いと思います。

建物のあらまし

木骨石造倉庫の内部を煉瓦壁とする新たな再利用で、これにより外観軟石造に内観煉瓦造をマッチングしつつ、防寒対策としています。内観のキャンドルの灯りに煉瓦壁が溶け込みファンタジー世界が表現されています。同じく梁や柱をオイルステンで塗り色彩の統一感を持たせています。

１階と２階の間にフィンランド産の杉柱とフィンランド産煉瓦壁が用いられています。

建物使用履歴

明治44年百十三銀行が倉庫として建築(棟札)、昭和28年北海道拓殖銀行取得、同年古谷製菓株式会社取得、同29年株式会社曲丸古谷商店取得、同63年シマダ梱包株式会社取得と変遷し、昭和62年に高島で開業していた海鱗丸ビール株式会社が平成９年に取得、平成17年にふうどりーむ株式会社に商号変更し本店を移転。ここに「小樽キャンドル工房」が開館しました。

＜竹内勝治調査＞

現施設のProfile

①**現在の施設名**：小樽キャンドル工房
②**住　所**：小樽市堺町１-27
③**電　話**：0134-24-5880
④**ＵＲＬ**：http://otarucandle.com/
⑤**運営会社代表者**：有限会社ロビンス　代表取締役　丹　雅弘
⑥**地図位置**：24

石蔵連なる外観

鉄柱、シックな梁、碍子引き配線残る本館

とんぼ玉館での体験工房

住民から市民を目指した起業第一号

大正硝子館本館・とんぼ玉館・びーどろ館【硝子ショップ】

歴史的エピソード

㊤名取商店　名取 高三郎

安政５(1858)年甲州(山梨県)の農家に生まれ、明治８(1875)年渡道。途中時化に遭い、悔いたが、同行した叔父今井素白(そはく)(喜七)から「金銭は危ないところにしかない」と叱られたことで一念発起します。小樽では明治10(1879)年に叔父が北海道金物業の草分け今井金物店を開業し、高三郎(たかさぶろう)はノコギリの行商を手伝います。明治12年には叔父が故郷に引き上げますが、明治30年(1897)独立して金物・鋼材を扱う新店舗「㊤名取商店」を開設します。

＜『小樽豪商列伝』＞

明治33(1900)年小樽電話局開設で「電話番号１番(小樽)」取得、同39(1906)年にこの店舗・倉庫を新築しています。

明治39年以後の名取高三郎商店＜小樽市総合博物館 蔵＞

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

於古発(おこばち)川河口に位置し、江戸時代はこの川を境にヲタルナイ場所とタカシマ場所に別れていたことから堺(境)町となり、高島橋がかけられています。

札幌軟石と黒い瓦屋根、最大の特徴は西向きと南向きに卯建が上がっていることです。＜『小樽の建築探訪』＞

建物使用履歴

竣工間もない名取高三郎商店
＜小樽市総合博物館 蔵＞

明治39年に名取高三郎商店として創建しますが、当時のこの位置は開けつつある小樽の一つだったことから、名取の勢いが想像できます。昭和46年には本店を札幌に移し、平成10年現びーどろ館に小樽大正硝子館オープン、平成15年大正硝子館本店・とんぼ玉館・びーどろ館がラインナップされています。

昭和60年 小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①現在の施設名：大正硝子館
②住　所：小樽市色内１丁目１-８
③電　話：0134-32-5101
④ＵＲＬ：http://www.otaru-glass.jp/
⑤運営会社代表者：株式会社アートクリエイト
代表取締役　久末 智章
⑥地図位置：25

玄関庇は後年の増築だが札幌軟石造の石蔵は頑丈

漆喰壁に手織り機が絵になる２階工房

シックな内観に映える色とりどりの作品　２階売店

「染め」「織り」の素材にとって湿度を一定に保つ石蔵は相応しい

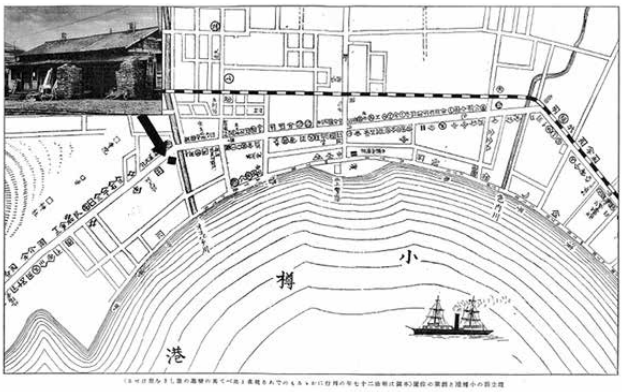
おたる織物㈱ 染織アトリエ KAZU【染織工房】

歴史的エピソード

寿原小間物店　寿原 猪之吉

小樽で「寿原（すはら）」といえば「寿原一族」として印象深く、小樽にハイカラな風を吹かす貢献をされてきました。越中（富山県）福岡出身の寿原彌平次（やへいじ）が明治15（1882）年に起業した寿原商店が起点です。後に姉婿猪之吉（いのきち）と弟重太郎（じゅうたろう）を呼び寄せ、猪之吉が明治22（1889）年に寿原支店として和洋小間物店を開設し、この建物は明治30年頃に建てられています。

明治28年頃の寿原四兄弟。
左から猪之吉、重太郎、弥平次、要太郎
＜『スハラ商事100年の歩み』＞



明治27年初代寿原彌平次創建の寿原商店（現在の浪漫館の場所）
＜『スハラ商事100年の歩み』＞

建物のあらまし

札幌軟石の石蔵も小樽では少なくありません。札幌軟石は約４万年前の支笏火山の噴出物が陸上で堆積した弱溶結凝灰岩（じゃくようけつぎょうかいがん）です。馬車鉄道で搬出されていました。現在では札幌の辻石材のみが採掘しています。札幌軟石は小樽軟石に比べ強固です。

＜小樽市総合博物館学芸員　大鐘卓哉氏講演＞

柱と屋根面を支える部材は均等に並べ、中央には大黒柱と南側の壁との間に大きく曲がった丸太を架けて広い部屋をつくっています。

＜『小樽學』121号駒木定正＞

建物使用履歴

明治34年寿原小間物店倉庫として建設され、昭和後期に松田ビルが所有して賃借でレストランが営業。平成４年におたる織物株式会社が賃借でアトリエ開業しています。平成10年には所有が㈱ロイズコンフェクトに移っていますが、そのまま賃借が続いています。

現施設の Profile

①現在の施設名：おたる織物㈱
染織アトリエ KAZU
②住　所：小樽市色内１丁目10-23
③電　話：0134-22-8544
④ＵＲＬ：http://www.at-kazu.com/
⑤施設代表者：寺岡 和子
⑥地図位置：26

ギリシャ建築様式の６本の半円柱

店内にも３本の円柱

風除室までオシャレ

外部も内部も円柱がショップの価値を引き立ててくれる

小樽運河ターミナル【テナントモール】

歴史的エピソード

三菱銀行の小樽系譜

小樽銀行街の代表的建築物で、三菱銀行小樽支店として大正11(1922)年に創建されました。以後三菱銀行は昭和23(1948)年に千代田銀行に改称、昭和28(1953)年にまた三菱銀行に改称され、昭和44(1969)年に小樽支店が廃止されています。

＜『小樽の銀行小史』＞

財閥による小樽への足跡

三菱といえば土佐の岩崎弥太郎（いわさき やたろう）が創業し財閥となった会社ですが、明治18(1885)年に郵便汽船三菱会社と共同運輸会社が合併し、日本郵船会社を設立＜日本郵船歴史博物館＞し、すでに今の日本郵船の場所に郵便汽船三菱会社小樽出張所が進出(明治11年)していたことから、三菱は明治初期から小樽に足跡を残していることがわかります。

＜『北海道における日本郵船小史』＞

＜小樽市総合博物館 蔵＞

この三菱同様に当時の財閥である三井も渋沢も小樽に少なからず足跡をのこしていることは、明治から昭和初期にかけての小樽が、物流基地としてビジネスチャンスの街であったとうかがえます。

＜小樽市総合博物館 蔵＞

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

大正11年当時としては最新の鉄筋コンクリート造で、外壁は煉瓦色のタイル張り、改築の際に１階に６本の列柱を建てています。またエレベーター付きの建物でした。　＜『小樽の建築探訪』＞

建物使用履歴

大正11年に三菱銀行小樽支店として創建され、昭和44年まで営業しましたが、その後の昭和57年に北海道中央バス株式会社の所有となり、平成18年に１階部分を小樽運河ターミナルとして開店しています。

平成２年　小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①**現在の施設名**：小樽運河ターミナル
「あまとう」「桑田屋」「オガサワラ写真」
「ワインクラスター北海道」「小樽バイン」
②**住　所**：小樽市色内１丁目１-12
③**電　話**：0134-22-7774
④**運営会社代表者**：北海道中央バス株式会社
代表取締役　二階堂 恭仁
⑤**地図位置**：27

石造倉庫の重厚感が映える

石造倉庫ゆえにステンドグラス名品が幻想的

石造倉庫の内観と一体になる作品群

ファンタジー小樽のシンボル

小樽芸術村 ステンドグラス美術館【ミュージアム】

歴史的エピソード

高橋倉庫　高橋 直治

高橋 直治
＜小樽市総合博物館 蔵＞

高橋直治（なおじ）は安政３(1856)年新潟県刈羽郡石地町（かりばぐんいしじまち）に生まれ、貧乏で幼年時に父母と別れ祖母に育てられましたが、手が付けられない腕白小僧だったため、親戚一同から持て余されていました。青年時には大酒飲みで戸外にごろ寝も幾度もありましたが、この暴れ者を救ったのが後の夫人よねでした。直治はよねと一緒に明治８(1875)年に渡道し、同11年に小樽有幌町に雑貨店を開業し、のちに米穀海産物の委託販売や味噌醤油醸造を始め、水車精米を蒸気精米にした先駆けです。最大の商機は大正３(1914)年から７年の第一次世界大戦の際に、小豆を買い占めて高い相場で売ったことでした。「小豆将軍(直治)が買いに出た」とわかれば相場は急騰。小樽の相場は「小豆将軍髭（ひげ）の動き具合一つで変動した」といわれています。

＜『北海道人名辞書・小樽百撰立志編』『おたるの先駆者』＞

大正時代に小豆が収納された有幌の倉庫群
＜小樽市総合博物館 蔵＞

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

主に有幌に集積された高橋倉庫ですが、それで足りず大正後期の全盛期には色内にも小豆収納用として建設されました。前面は運河に面し、背面は出抜小路に接して建ち、周辺の歴史的景観を形成している建物のひとつです。小屋組は梁を二重に架け２本の束を陸梁の中央付近で左右対称に立てるクイーンポストトラス（対束小屋組）と呼ばれる洋風の構造です。　＜『小樽の建築探訪』＞

建物使用履歴

大正12年　高橋倉庫として創建され、昭和40年建築資材を扱う太平産業の倉庫となり、平成元年には観光の胎動から太平産業が「グラスシップ」という硝子販売店に使用、平成14年には「海鳴楼」としてオルゴールのショールームや売店に、平成24年には石原プロダクションが「おもしろ撮影館」、そして平成28年㈱ニトリによって「ステンドグラス美術館」に生まれ変わっています。

平成６年　小樽市指定歴史的建造物
平成29年　小樽市都市景観賞

現施設のProfile

①現在の施設名：
小樽芸術村 ステンドグラス美術館
②住　所：小樽市色内１丁目2-17
③電　話：0134-31-1033
④ＵＲＬ：https://www.nitorihd.co.jp/otaru-art-base/stained-glass-museum/
⑤施設代表者：公益社社団法人 似鳥文化財団
⑥地図位置：28

左右対象の均整のとれた外観

ここでしか手に入らないアートショップ

小樽芸術村 ステンドグラス美術館 ミュージアムショップ【ショップ】

歴史的エピソード

荒田 太吉

この建物は荒田太吉（あらたたきち）が創建しました。太吉は明治10(1877)年に福井県丸岡町に生まれ、15歳で根室に渡り、父の雑貨小売店の仕事を手伝い、独立のため家出して小樽へ来ます。しかしなかなか独立には至らず、網走や樺太にも渡り、雑貨商や米穀商など様々な仕事に従事しました。

明治43(1910)年再び小樽に戻り、海陸物産商を開業し、大正６(1917)年に荒田汽船株式会社を設立。汽船７隻を運航し、道内、本州、樺太の各港で貿易を行います。昭和４(1919)年荒田商会を設立し、漁業、農業、鉱油販売業など多角経営を展開し、多数の会社社長や大株主を務めました。
成功者となった太吉は社会貢献も積極的に行います。小樽警察署署員合宿所、小樽高等女学校などに多額寄附、戦後は小樽経済専門学校から小樽商科大学への昇格を支援、故郷丸岡でも多額の寄付や丸岡城への支援をしています。<高野宏康調査>

おもしろ撮影館

平成３(1991)年に「石原裕次郎記念館」が小樽に誕生し、観光化しはじめる小樽に多くの観光客を呼ぶ貢献をしてくれました。

昭和の大スターだった裕次郎は昭和62(1987)年に亡くなりましたが、昭和38(1963)年設立の石原プロダクションが「石原裕次郎記念館」をゆかりのある小樽の勝納に設置し、平成29(2017)年に閉館しています。

その５年前の平成24(2012)年に「おもしろ撮影館」を石原プロ執行役員の浅野謙次郎氏自ら館長となって、ここに設置しました。

浅野氏は裕次郎を知らない昭和後期から平成に時代が移り、その限界を認識していたのでしょう。だから「映画」のおもしろさを新たな目玉にしましたが、時代はまさにデジタルのネットに席巻され、アナログ映画の哀愁を思わずにいられません。

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

左右対称で茶色の壁面が特徴的な木造２階建てです。昭和10年以後に荒田商会が裏の高橋倉庫を買い取っています。

建物使用履歴

昭和10年に荒田商会として創建、昭和40年に太平産業が所有し、建築資材の加工場や駐車場として利用し、平成元年には「グラスシップ」を、石造倉庫の硝子ショップとして北一硝子に次いでいます。その後オルゴール堂海鳴楼、石原プロダクションのおもしろ撮影館となり、平成28年に小樽芸術村 ステンドグラス美術館が開館しました。

平成６年　小樽市指定歴史的建造物
平成29年　小樽市都市景観賞

現施設の Profile

①現在の施設名：小樽芸術村 ステンドグラス美術館
②住　所：小樽市色内1丁目2-17
③電　話：0134-31-1033
④ＵＲＬ：https://www.nitorihd.co.jp/otaru-art-base/stained-glass-museum/
⑤運営会社：公益財団法人 似鳥文化財団
⑥地図位置：29

アールのかかった美しいフォルム

銀行建築にフィットした美術館内観

世界の一級作品がラインナップ

小樽芸術村 似鳥美術館【ミュージアム】

歴史的エピソード

北海道拓殖銀行小樽支店と界隈

昭和11(1936)年建築の国会議事堂は臨時議院建築局の矢橋賢吉(やばしけんきち)が設計に関わっていました。遡る13年前の大正12(1923)年に矢橋はこの北海道拓殖銀行小樽支店の設計者として携わっています。大正13(1924)年には小林多喜二がその銀行に就職しますが、「不在地主」を発表したことから昭和４(1929)年に解雇されました。また小樽の新宮(しんぐう)商行は大正８(1919)年に本社社屋を建てますが、大正12年に拓銀ビルが建設されて間もなく入居し、本社社屋は賃貸しています。

平成９(1997)年に経営破綻した北海道拓殖銀行は、翌平成10年に北洋銀行に営業譲渡され、今日に至りますが、都市銀行としては戦後初、かつ2020年現在、唯一の破綻銀行でもあります。さて北海道拓殖銀行は明治33(1900)年に設立され、本社は現在北海道電力本社のある札幌市中央区大通東1丁目でした。

小樽に支店が設置されたのは明治34(1901)年ですが、昭和16(1941)年には樺太銀行を合併、昭和19(1944)年には北海道銀行を合併し、終戦後の昭和44(1969)年に小樽支店移転のためにこの建物は閉鎖されます。

その後は地元経済人・飛島建設の所有となり、いわゆる空き家状態となりますが、小樽運河保存運動の時期にハビタ(北海道の一級建築士グループ)がホテルとしての再生を提案し、昭和62(1987)年第２回サマーフェスティバルの際、屋内会場を「小樽鹿鳴館(ろくめいかん)」として、お洒落なカフェで再利用されました。これが契機となり、この建物は様々な再利用変遷を辿り、今日の似鳥美術館として美しく蘇りました。建物には様々な物語があるものです。

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

鉄筋コンクリート造４階建地下１階の造りで、行内のホールは２階まで吹き抜けで、カウンター上にそびえる円柱が印象的です。

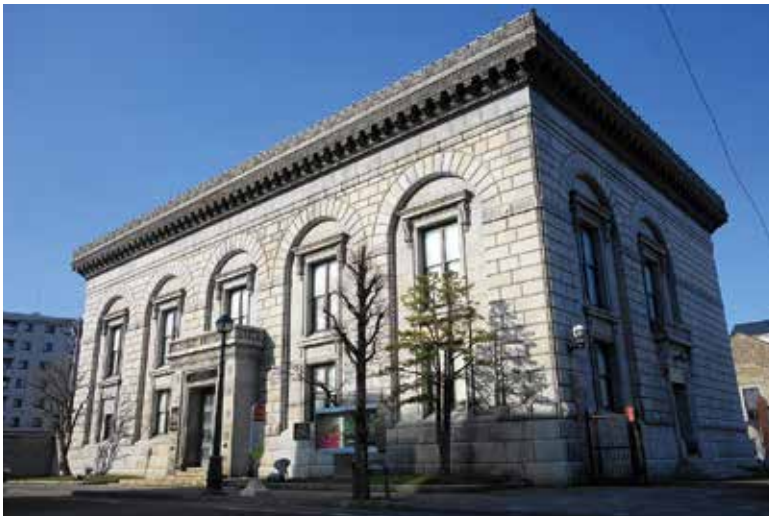
建物使用履歴

大正12年に北海道拓殖銀行小樽支店として創建され、昭和44年以後空き家が続き、平成元年イギリス人建築家ナイジェルコーツの設計で小樽ホテル、平成７年丸井今井のペテルブルグ美術館、平成14年ホテル１-２-３小樽、平成18年ホテルヴィブラントオタル、そして平成29年似鳥美術館となります。

平成３年　小樽市指定歴史的建造物
平成８年　小樽市都市景観賞

現施設のProfile

①現在の施設名：小樽芸術村 似鳥美術館
②住　所：小樽市色内１丁目３-１
③電　話：0134-31-1033
④ＵＲＬ：https://www.nitorihd.co.jp/otaru-art-base/nitori-museum-of-art/
⑤運営会社：公益財団法人 似鳥文化財団
⑥地図位置：30



ルネサンス様式の美しい外観

支店長室の金庫

回廊のある美しい吹き抜け

原形の忠実復原に脱帽

小樽芸術村 旧三井銀行小樽支店

歴史的エピソード

曾禰 達蔵 1853～1937「都市計画の嚆矢」

曾禰達蔵は郷里の唐津で高橋是清に学び、工部大学校一期生となり、同校助教授や海軍省を経て三菱に入社。明治43(1910)年「丸の内煉瓦街」を完成させています。旧三井銀行小樽支店は昭和２(1927)年に曾禰中條建築事務所設計で建設され、小樽初の鉄骨鉄筋コンクリート造(SRC造)で、設備も水洗トイレを設けるなど最先端技術が施されています。

＜『旧三井銀行小樽支店の創建資料について』駒木定正＞

銀行街とウォール街

小樽の銀行街は小樽人の誇りです。明治28(1895)年第百十三国立銀行(現海鳴楼)、明治41(1908)年百十三銀行(現浪漫館)、明治45(1912)年日本銀行(現金融資料館)、北海道銀行(現小樽バイン)、大正11(1922)年三菱銀行(現小樽運河ターミナル)、大正12(1923)年北海道拓殖銀行(現似鳥美術館)、大正13(1924)年第一銀行(現トップジェント・ファッション・コア)、昭和２(1927)年三井銀行、昭和５(1930)年安田銀行、昭和11(1936)年第四十七銀行(現渋谷建設)などの建物が今も健在です。ちなみに「小樽の銀行街」を称して「北のウォール街」とよく聞きますが、これはあやしい表現といわれています。「ウォール街」とはニューヨークの金融街のことですが、ここが「ウォール街」と呼ばれるようになったのは、1652年、オランダの植民地ニューアムステルダム(現在のニューヨーク)を管轄していたオランダ西インド会社が、インディアンやニューイングランドに入植したイギリス人からの攻撃に備えて、木材などを利用して築いた防護壁(wall)に由来します＜wikipedia＞。万里の長城やベルリンの壁とまではいきませんが、進入を防ぐための壁であったことは同じです。そこでウォール街という場合「ニューヨークの金融街」を「小樽の銀行街」に例えると不思議ではありませんし、「北の」もニューヨークは北緯40度、小樽は北緯42度ですから確かにニューヨークより北ですので問題ありません。しかし人の印象や認識は正確ではなく、ニューヨークの金融街は高層ビルが建ち並び、まるで「天に聳える壁(Wall)のよう」という印象から「ウォール街」なんだと日本人の多くは誤解して認識しています。この誤解が小樽の銀行街にもあてはめられたというなら、恥の上塗りとなるのです。目に見える印象と目に見えない歴史の食い違いを正しく知ることは大事なことです。

●曾禰 達蔵 (1852～1937)

1908(明治41)　曾禰中條建築事務所開設
1912(明治45)　慶應義塾大学図書館竣工
1927(昭和２)　三井銀行小樽支店竣工
1931(昭和６)　千代田生命北海道支店竣工(取り壊し)

◀明治38年に新築した建物
＜小樽市総合博物館 蔵＞

明治38年～昭和２年▶までの三井銀行小樽支店
＜小樽市総合博物館 蔵＞

◀小樽の銀行街
（色内通り）
＜小樽市総合博物館 蔵＞

小樽の銀行街▶
（浅草通り）
＜小樽市総合博物館 蔵＞

【ミュージアム】

●中條精一郎（1868～1936）

1898（明治31）　東京帝国大学工科大学建築学科 卒業
1899（明治32）～1902（明治35）
　　文部省技師、
　　札幌農学校土木工学科建築学講師
1904（明治37）～1907（明治40）
　　ケンブリッジ大学留学・帰国
1908（明治41）　曾禰中條建築事務所開設
1927（昭和２）　三井銀行小樽支店竣工
1931（昭和６）　千代田生命保険北海道支店竣工
＜『旧三井銀行小樽支店の創建資料について』駒木定正＞

建物のあらまし

この建物は石積みの壁面にアーチ窓を連ね、軒に彫刻模様を施すルネサンス様式の外観です。構造はSRC（鉄骨鉄筋コンクリート）造で、壁面は岡山県北木島（きたぎしま）産の花崗岩を張り、軒廻りは人造石洗出しです。関東大震災（大正12）後で耐震を重視し、躯体（くたい）に加えて壁面に石を積んでいます。
＜『旧三井銀行小樽支店の創建資料について』駒木定正＞

建物使用履歴

昭和２年に三井銀行小樽支店として創建され、平成14年に三井住友銀行小樽支店が閉鎖します。明治13年の三井銀行小樽出張所設置から数えると122年間の永きに亘り小樽で営業したことになります。建物は閉鎖の平成14年に石屋製菓が購入し、音楽ホールなどを計画していましたが、なかなか踏み出せず、平成28年に㈱ニトリの所有となり、周辺の歴史的建造物を含めて「小樽芸術村」を構成し、その一環として「旧三井銀行小樽支店」を復原しています。以後、内部を公開するかたわら講演会やイベント、展覧会などに活用されています。

※小樽の三井銀行

1880年　小樽出張店開設
1881年　火事で類焼のため港町へ移転
1892年　小樽支店昇格
1893年　合名会社三井銀行開業
1902年　色内町に新築移転
1904年　火事で類焼
1905年　同地に新築
1927年　同地に新築　　＜『小樽の銀行小史』＞

平成29年　小樽市都市景観賞

現施設のProfile

①現在の施設名：小樽芸術村 旧三井銀行小樽支店
②住　所：小樽市色内１丁目３-１
③電　話：0134-31-1033
④ＵＲＬ：https://www.nitorihd.co.jp/otaru-art-base/former-mitsui-bank/
⑤運営会社：公益財団法人 似鳥文化財団
⑥地図位置：31

アールデコの建築美を色濃く残したホテル外観

幻想的空間で楽しむ小樽キュイジーヌ「THE BALL」

夕食後は「BAR IGNIS」へ

幻想的なロビー

昭和6年 北海道初のホテルが歴史を刻んでブティックホテルに再生

UNWIND HOTEL & BAR 小樽【ホテル＆バー】

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

度重なる変選に耐えてきたデザインと様式と運は、小樽の歴史の凝縮でもあり、先人の苦労が偲ばれる大切な遺産。アールデコのステンドグラスや丸窓に映る光景は、歴史をよみがえらせます。 ＜『小樽の建築探訪』＞

建物使用履歴

昭和６年「越中屋ホテル」として竣工し、その後10年間ホテルとして運用され、昭和17年日本陸軍総司令部の将校クラブとして接収されます。昭和20年、終戦とともに米軍に接収され、昭和25年越中屋旅館に返還されますが、昭和27年には相続税の一部として大蔵省の所有となり、昭和30年北海製罐が大蔵省より払い下げを受け、約15年間独身寮と貸事務所として転用します。一時、老朽化のため取り壊しが画されましたが、昭和61年小樽の歴史的建造物保存運動が盛んとなり、アドバンテスト社がゲストハウスとして購入し、原形をとどめて改修。そして平成５年、小樽グランドホテル・クラシックとして生まれ変わります。＜『小樽の建築探訪』＞2009年に小樽グランドホテルの倒産により閉鎖され、令和元年にアンワインドホテルに至ります。

昭和63年 小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①**現在の施設名**：UNWIND HOTEL & BAR 小樽
②**住　所**：小樽市色内１丁目８-25
③**電　話**：0134-64-5810
④**ＵＲＬ**：https://www.hotel-unwind.com/otaru/
⑤**運営会社**：株式会社グローバルエージェンツ　代表責任者　山﨑　剛
⑥**地図位置**：33

コラム 出抜小路

「出抜小路（でぬきこうじ）」はそこで仕事をしていた者達が呼称していた俗称です。小樽新聞の記事に「1900年09月01日明治33年　色内町裏通り出抜け小路の西北端色内橋下流に架橋完成」と表現されているのが記録の上で最初の登場です。その範囲に関しては「出抜け小路の西北端」とされ、現在の稲北を指しています。さらに小樽船用品（ホテルノルド隣にあった）の語り部北村猪之助氏によれば「自社の裏通りを出抜小路というのは聞いたことがない」と言っていますので、中央通り（小樽駅～港）から現稲北交差点の範囲をそう呼んでいたと解釈するのが正しいようです。

昭和50年代の出抜小路　兵庫コレクション＜小樽市総合博物館蔵＞

小樽経済が戦前戦後を機に斜陽と呼ばれ、牽引役を果たしてきた港湾商業が影を潜め、巷間の話題に港の舞台は消えていく中、ここに起きたのが昭和48年から高まる小樽運河保存運動でした。この運動は港湾施設の運河ばかりか周辺の石造倉庫が一体となった景観保存運動に発展し、再び「出抜小路」が注目されていきます。しかもその範囲は於古発川（寿司屋通り）から稲北交差点にまで拡大解釈され「石造倉庫群の裏通り」という情緒感も込められ、市民の間に浸透してきました。

昭和61（1986）年から開催されたオタルサマーフェスティバルは、会場を現似鳥美術館と運河ターミナルビルに挟まれるストリートを通行止めしたものですが、平成４（1992）年第7回時に「ラバーズペイブメント」と表し、出抜小路にいくつものガーゼルを配しロマンチックな小樽の写真を展示ライトアップし、恋人たちの散歩道を整備しました。メインステージで奏でられるJAZZをBGMに石造倉庫の壁際に映える写真を眺めながら多くの恋人たちが散歩を楽しんだのです。これを契機として「出抜小路」という名称は小樽の名所の一つに登壇することになります。

平成20年代の出抜小路＜佐藤圭樹撮影＞

コラム 郷土史の身近さ

末裔の方々

小樽の歴史を小樽人が知る場合、活躍した人物が建てた物件が残っていることは、郷土史の身近さの一つですが、もう一つ、該当する人名の苗字を手掛かりに訪ねると「私はその人物の末裔にあたります」「私はその人物の親戚筋の末裔にあたります」といった方々に出会うことも少なくありません。そこから「こんな資料が残っています」とくれば、郷土史研究にとって宝物を掘り当てたような感動を得ます。

酒井正七（酒井祥次氏・櫻井佳子氏より取材）

酒井正七邸からの眺望

水天宮から海側へ下る階段を「外人坂」といいますが、階段を半分ほど下りると右側に木材商であったドイツ人カールコッホの邸宅（後に改築して「ルドピコ学院」）があったことから俗称されるようになりました。階段を挟んで向かい側に、今も黒い湾曲した立派な石の階段があり、現在は空き地になっているところに酒井正七（しょうしち）邸がありました。正七は住吉神社に石灯籠の対（つい）を寄贈していますが、そこには「大正八年七月建立」「酒井正七」と両側に彫られています。では正七はどんな人物だったのでしょうか。

正七は新潟県柏崎市で米穀業を営んでいた松原城慶の二男として生まれ、母方の養子となり酒井姓を継ぎます。明治２（1892）年、函館市の知人をたよって来道、函館市内で醸造業を始め、商売はとんとん拍子に発展しましたが、小樽で回漕店を開いていた初代塩田安蔵（しおだやすぞう）（現夢二亭は塩田別邸）に見込まれ、塩田回漕店の支配人として迎えられます。大正13（1924）年回漕業で独立して、稲穂町に「酒井汽船部」を設立、社長におさまります。商売は大繁盛、「勝山丸」（2,300トン）「南洋丸」（8,600トン）「大栄丸」（5,500トン）「明治丸」（3,300トン）「正元丸」（5,500トン）を所有。樺太～横浜間などに航路を設け、小樽では有数の回漕業者となります。後年には南方航路で生ゴムを輸入していたことから「日東ゴム（潮見台）」を設立し、現サンモールの新海金物店の斜め向かいに「日東ゴム靴店」も構えていました<『小樽経済百年の百人』>。

手前に見えるのが酒井正七邸
港にはトランスポーターが見える

住吉神社に寄贈された石灯籠

今日も残る酒井邸の煉瓦塀

水天宮から海側の東雲・相生地区は、明治から大正にかけての小樽において、成功した豪商が邸宅を建てているのはおもしろい特徴です。

嶋谷俊郎（嶋谷徹氏・嶋谷泰彦氏取材）

嶋谷八十八（1862-1944）

嶋谷八十八喜寿祝い　後列左から4人目が嶋谷俊郎

明治10（1877）年　嶋谷（しまたに）徳右衛門が山口県由宇（ゆう）に「嶋屋」創業しますが、長女ハルの婿養子八十八（やそはち）との間に三男俊郎（としろう）がおり、のちの嶋谷汽船の小樽拠点を担います。嶋谷汽船が小樽に出張所として、「嶋谷汽船株式会社小樽支店」を開設したのが大正８（1919）年ですが、間もなく北海道庁から離島の物流促進として、利尻・礼文の「命令航路」を相談された際、小樽に本社があるのが条件であったため「嶋谷商船株式会社」を小樽に設立します。商船はまもなく汽船に合併されます。

嶋谷汽船は小樽に根を張り、昭和８（1933）年に嶋谷汽船浜ビル（現協和浜ビル）を建て、裏の石蔵（旧北のアイスクリーム屋さん）を倉庫に使用しています。昭和13（1938）年頃に富岡に嶋谷汽船社長宅を建てています。嶋谷汽船は昭和54（1979）年に解散しました。

嶋谷グループが直接所有していた、小樽の嶋谷汽船ビル（色内）、嶋谷倉庫（色内）、社長宅（富岡）の３軒がいずれも「小樽市指定歴史的建造物」になっていることからも、嶋谷の貢献は小樽の今日にも継承されており、小樽との縁深さを感じることができます。

旧嶋谷汽船社長宅

旧嶋谷汽船倉庫

嶋谷汽船小樽支店として創建

小樽では貴重な黒壁

豪華絢爛の色内食堂

落ち着いた北勝庵内観

独創的な和菓子のラインナップ游菓

観光地域であっても地元を優先する志に脱帽

Café色内食堂【レストラン】・北勝庵【蕎麦】・游菓【和菓子】

歴史的エピソード

塚本商店

近江商人の塚本家が北海道で呉服・太物商として営業を開始するのが明治25(1892)年のことで、同29(1896)年には色内に店を構えています。しかし明治37(1904)年の大火で消失し、大正５(1916)年には土蔵造風２階建て店舗を新築し、この建物は大正９(1920)年に新築しています。

株式会社塚本商店は、大正９年東京日本橋に創立し、京都と小樽に支店を開設します。昭和36(1961)年に塚本商事株式会社に改称し、同44(1969)年には札幌支店新社屋完成に伴い、小樽支店を閉鎖しました。　＜『小樽市の歴史的建造物』＞

後藤商店

株式会社○後藤商店は総合食品卸問屋でした。

平成になって廃業するのですが、昭和50～60年代にはまことに活気のある会社でした。ちなみに昭和63(1988)年には40人の従業員を擁していました。

１階の事務室は広く、一番奥に神棚があり、その下に社長の椅子があって、社長はデンと構えて事務所を管理するように、いつも見渡していました。ですから事務所内は緊張感がみなぎっており、その緊張感を解き放つように、社長が奥から大声で「いらっしゃい！いらっしゃい！いらっしゃい！」と号令を掛けるのです。他者から営業で訪問していると驚いてしまいます。かつて成功した小樽商人の勢いの継承を彷彿(ほうふつ)とさせます。

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

木骨鉄綱コンクリート造２階建て。小屋根には階段が通じ、当初から何らかの利用が考えられていたらしく、両妻面には両開きの防火扉を建て込んだ小窓が開いています。外壁は黒塗りで仕上げられ、腰まで擬石と煉瓦タイルの化粧張りが施されています。　＜『小樽の建築探訪』＞

建物使用履歴

大正９年株式会社塚本商店小樽支店として創建し、昭和46年総合食品問屋後藤商店に売却。平成２年自主廃業、その後ライベックス株式会社の所有となり、平成25年にフレンチレストラン「マルイチ後藤商店」、間もなく日本料理のお店に変わり、平成27年色内食堂、平成30年北勝庵と游菓が開店しています。

昭和63年　小樽市都市景観賞
平成13年　小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①現在の施設名：café 色内食堂
②住　所：小樽市色内1丁目6-27 旧まるいち後藤商店
③電　話：0134-55-2999

①現在の施設名：小樽北勝庵
②住　所：小樽市色内１丁目６-27 旧まるいち後藤商店
③電話：0134-26-6464
④ＵＲＬ：https://otaru-hokushoan.jp/
⑤運営会社：小樽北勝庵オーナー　加藤敦

①現在の施設名：小樽和菓子工房　游菓
②住　所：小樽市色内１丁目６-27 旧まるいち後藤商店
③電　話：0134-55-5747
④ＵＲＬ：https://otaruwagashi-yuka.com/
⑤運営会社：小樽和菓子工房　游菓　代表　青木雄二
●地図位置：35

修復された石壁の外観

寿司店としての清潔感を基本に

柱と梁の一部を露出させています

小樽で店を開くなら石蔵と決めていた すし耕【寿司】

建物のあらまし

再生時に全面補強し、平成25年軟石修復、老朽化した瓦をスノーダクトに改築しています。内観は、柱と梁の一部を残しています。

建物使用履歴

年代不詳ですが、砂糖の倉庫として創建されたといわれています。その後、石炭倉庫、カネイ小川の人形販売に再利用されますが、個人の所有となり、平成13年に賃借ですし耕が開店しました。

現施設のProfile

①現在の施設名：すし耕
②住　所：小樽市色内２丁目２-６
③電　話：0134-21-5678
④運　営：店主　竹山 耕司
⑤地図位置：36

コラム 小樽商人

小樽商人は「樽僑（そんきょう）」と称され恐れられていたようです。「華僑（かきょう）」になぞらえた呼び名です。事実、大金持ちが100人はいました。昭和40(1965)年に北海タイムス社が「小樽経済百年の百人」を連載で100人を紹介しており、『月刊おたる』が昭和40(1965)年から連載した「小樽豪商列伝」には49人の商人が紹介されています。

そこでどれほどの金持ちだったかについては、昭和６(1931)年に講談倶楽部が発行した「小樽金満家名簿」で推し量ることが出来ます。

１位	板谷　宮吉	総資産	5,000万円
２位	藤山　要吉	総資産	500万円
３位	石橋彦三郎	総資産	400万円

乱暴ですが、たとえば昭和６年の米価は今日約440倍になっていることから類推すると、400万円は17億６千万円、5,000万円は220億円に該当します。ですから総資産数億円～220億円を持つ大金持ちが100人以上も存在したとみていいでしょう。もちろん総資産ですので現金の他、土地や有価証券なども含まれます。

昭和中期に大金持ちを「億万長者」と呼んでいましたので、小樽は大金持ちの街でした。

初代　板谷宮吉
＜小樽市総合博物館 蔵＞

二代目　板谷宮吉
＜小樽市総合博物館 蔵＞

１階カフェ　石蔵はこんなに粋に生まれ変わる

２階宿泊施設　石壁は睡眠時の安心感

３階フリースペース　なにをしてもオシャレ

小樽で一番お洒落な石蔵

Café & Hostel 石と鉄【喫茶･宿泊】

歴史的エピソード

川人 幸三郎

この石蔵は登記簿謄本では「昭和23年８月川人幸三郎」の記録からしかありませんが、川人幸三郎が明治45(1912)年に㐂を創業する前後に建てられたと思われます。戦後(昭和23年)建築の石蔵は極めて少ないことと、石蔵の妻壁に川人の印「㐂」の印が刻まれているからです。

川人幸三郎は創業明治45年、海産乾物、清酒、焼酎、雑貨卸<大正11年『小樽商工名録』>と記録されています。

珍しいのは「清酒、焼酎」です。明治中期小樽の販売会社は、大家支店、板谷合名会社、宅合名会社支店が堺・灘・伏見・越後などの清酒の特約店として販売を独占していました。一方小樽の酒造会社は明治21(1888)年には27ヶ所にも増えています。また明治後期には小樽産酒造の石高が全道一となり、この勢いから推測して㐂が扱った酒類は地元の酒造会社のものもあったと思われます。

<『後志の酒造小史』>

いずれにしても「蔵持ち」となるほどの財力があったのです。

大正13年の小樽酒造組合<小樽新聞の広告欄>　小樽新聞（大正13年6月6日）

建物のあらまし

この建物は小樽では数少ない全面小樽軟石です。しかも石の厚さ33cmの本石造建築です。小樽では圧倒的に木骨石造が多いなかで、これも希少な建物です。小樽軟石ならではの顔付きを見ることもできます。地震の少ない小樽だからこそ、この厚さで本石造建物が今まで遺されたものと思われます。店舗内部も石を見られるようにサイディングされた中源氏のセンスが伺えます。

<竹内勝治調査>

建物使用履歴

昭和23年11月に東京連合水産株式会社に所有権が移り、昭和25年株式会社曲丸古谷商店(昭和46年古谷株式会社に改称)、昭和63年出戸家、平成16年出戸商事、平成28年に現ADL２に移転され、「石と鉄」が賃借しています。

現施設のProfile

①現在の施設名：Café Bar & Hostel
[石と鉄 STONE and IRON]
②住　所：小樽市色内２丁目２-８
③電　話：0134-61-1214
④ＵＲＬ：https://www.facebook.com/stoneandiron.otaru/
⑤運営会社代表者：中源 博幸
⑥地図位置：37

黄昏に滲む外観

窓硝子の組み合わせが絶妙の１階レストラン

大人の隠れ家２階 BAR

洋風ワビサビの殿堂
だから時間が置き去りに

ISO（イソ）【レストラン・カフェ・ホール】

歴史的エピソード

磯野商店　磯野　進

明治５年佐渡の両津（りょうつ）生まれの磯野進（いそのすすむ）は、東京法学院を卒業し、明治30(1897)年には小樽人となり、明治32(1899)年区会議員、色内で海産物商(このときの倉庫がこの建物)を営み北陸人造肥料、北海道精米、北海漁業に参与し、大正２(1913)年小樽商業会議所会頭となります。下富良野（しもふらの）に農場を所有し、大正２年には37人の小作人（こさくにん）(土地を借りて農業生産を行う人)を擁していましたが、小作争議が起き昭和２(1927)年には敗北します。この顛末（てんまつ）をモデルにして小林多喜二が『不在地主』として昭和４(1929)年に発表しますが、磯野の圧力で５年８ヶ月勤務した北海道拓殖銀行小樽支店を解雇されたといわれています。

＜『小樽豪商列伝』＞

▲つい長居してしまう２階BARカウンター

◀煉瓦壁と硬派な梁の3階フリースペース

＜写真:ISO提供＞

磯野 進

小林多喜二著
『不在地主』初版本

建物のあらまし
〈小樽市指定歴史的建造物〉

小樽では数少ない明治期の煉瓦倉庫。煉瓦が内壁にも露出し、室内は古色蒼然（こしょくそうぜん）たる雰囲気を醸しています。平成29年に瓦屋根葺き替え、玄関と２階の大窓以外の開口部は、封鎖と開口で調整。

建物使用履歴

明治39年に磯野商店倉庫として創建され、昭和52年には「海猫屋（うみねこや）」に生まれ変わります。小樽にはまだ観光の兆候すらない時代に、昭和50年に石蔵をカフェに再生した「叫児楼（きょうじろう）」に次ぎ、歴史的建造物再生第２号として「海猫屋」は開店しています。昭和61年には村松友視（むらまつともみ）氏が『海猫屋の客』を著し全国的に有名になります。平成30年ＩＳＯに生まれ変わりました。

平成３年　小樽市都市景観賞
平成28年　小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①現在の施設名：ISO
②住　所：小樽市色内２丁目２-14
③電　話：0134-31-1888
④ＵＲＬ：https://otaruiso.jp/
⑤地図位置：38

実は石造建築

石壁を露出させた粋な空間

梁も活かし日差しの入る窓

この石蔵が起業の
ポテンシャルを発掘してくれた

洋食屋 マンジャーレ TAKINAMI【レストラン】

建物のあらまし

木骨石造倉庫を再利用していますが、マンジャーレ以前に前面がモルタルで塗られていたため、これをイメージに合うように上塗りしています。玄関には庇を設け、開口部を多めにし、柱と土台は腐食のため取替え、床はコンクリートの土間だったものに木材を敷設しています。

建物使用履歴

年代不詳ですが食品問屋の倉庫として建設されたようです。昭和中期には道新折り込みセンターとなり、平成７年に洋食屋マンジャーレTAKINAMIとなっています。

現施設の Profile

①現在の施設名：洋食屋マンジャーレ TAKINAMI
②住　所：小樽市色内２丁目１-16
③電　話：0134-33-3394
④運営者：店主　瀧波　剛
⑤地図位置：39

コラム 語源「くだらない」「まとも」

北前船も含めて海運業から派生し、今日誰もが口にする言葉があります。

くだらない

たとえば今日のＪＲは国鉄時代から、東京に向かう列車を「上り」といい、遠ざかる列車を「下り」といったように、海運業では大阪に向かう船を「上り」、遠ざかる船を「下り」といいました。それが江戸時代になると幕府は江戸(東京)となりますが、豊臣秀吉が全国を統一したあたりから商いの中心は大阪に定着していました。政治の中心は江戸でも経済の中心は大阪で、この機能分担は幕末まで継続しました。江戸時代は人口が江戸に集中し、まして将軍様がいる江戸に送るものは良品でなければ、商人の信用に関わります。したがって大阪で吟味した良品を「下り便」に載せました。ここで傷物や半端物は「下り便」には載せられない、つまり「下らない」となり、傷物や半端物のことを「くだらない」と表現するようになりました。

まとも

船の前を「舳先(へさき)」といい、後を「艫(とも)」といいます。北前船は風で動きます。向かう前方から吹く逆風でも帆の操縦で前には進みますが、向かう後方から押される順風の方がはるかに安全で速度も上がります。だから順風満帆(じゅんぷうまんぱん)という言葉もあるのです。したがって船も後方の「艫」に当たる風は順風満帆です。この「艫」をさらに強調して「真」の字を付けて「真艫(まとも)」といい、それが変化して「まとも」と表現されるようになりました。

木骨石造の堂々たる心意気

西陽が差すとまるで異空間

石造りの内装を活かしたアイテムとディスプレー

小樽の街並みに似合う ライフスタイルの提案

vivre sa vie＋mi-yyu【雑貨】

（ヴィヴレ サ ヴィ ミーユ）

歴史的エピソード

有限会社川又商店（旧早川支店）川又健一郎

新潟県中蒲原郡庄瀬村において、六代目川又平右衛門一族は千町歩を保有する豪農でした。これほどの農家は当時（明治初期）日本には９軒しかなく、そのうちの５軒が新潟だといわれています。平右衛門は明治元（1868）年生まれの健一郎にとって大叔父にあたります。明治初期には「家格」が重視され、家格維持のためには「血より家」、ゆえに当主平右衛門は何百町歩をも手土産に舞い込む婿養子を迎え家督を譲り、健一郎は財産分与を受けて渡道します。健一郎の妻セイの姉が早川家に嫁いでいたことから、小樽の早川商店に草鞋を脱ぎ、明治38（1905）年に紙や文房具類、茶を商う「丸越川又商店」を開業しました。＜川又隆司氏取材＞

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

朝日、松梅、鶴鷹亀などのレリーフで飾られた卯建が特徴の木骨石造。印の「丸越」は早川商店からの暖簾分け。昭和初期には石造店舗と石蔵の間に押縁下見板張り壁の木造の住宅部分が連なります。　＜『小樽の建築探訪』＞

小樽軟石は明治から昭和30年代にかけて桃内、手宮、天狗山、奥沢、富岡など小樽郊外で採掘されていました。1000万年前～800万年前の火山噴火により水中で堆積した凝灰岩です。

＜小樽市総合博物館学芸員　大鐘卓哉氏講演＞

装飾性の高い卯建

建物使用履歴

川又健一郎によって明治38年に「川又商店」として創建されていますが、前年の37年は小樽の大火によって中心市街地が全焼していますので、再建の初期として心意気が感じられます。川又商店は戦後に閉店しますが、平成19年に「vivre sa vie ＋ mi-yyu」として再生しました。

昭和61年　小樽市指定歴史的建造物

現施設の Profile

①現在の施設名：vivre sa vie ＋ mi-yyu
②住　所：小樽市色内２丁目４-７
③電　話：0134-24-6268
④ＵＲＬ：
https://www.instagram.com/vivmiyu_miyu/?hl=ja
⑤地図位置：40

店主の神田氏はシブ過ぎるほどの写真家

２階でのJAZZライブ

JAZZの似合う石蔵

入店した瞬間JAZZと石蔵の絶妙感にハマる

JAZZ喫茶 フリーランス 【喫茶】

歴史的エピソード

石蔵の街～秘密から開放へ～

小樽に石蔵が多いのはよく知られています。昭和25(1950)年に道庁調べで540棟、平成25(2013)年竹内勝治調べで355棟、令和２(2020)年11月現在竹内勝治追跡調査で314棟あり、うちフリーランスのように再生されているのがおよそ60棟あります。解体された石蔵の石材を再利用した花壇や門なども散見されます。このような小樽の石蔵環境を大切に思うことから、平成29(2017)年「小樽石蔵再生会」が誕生しています。

そもそも石造建築は大火の多い小樽で、当地や札幌で採掘された軟石によって耐火用に流通したものです。

石蔵はかつて「蔵持ち一人前」と小樽では認識され、成功した商人の誇りでした。「蔵」とは本来保管場所ですから、内部は他人には秘密です。したがって蔵の表には多くは母屋や商店が構えられていました。ところが母屋は木造が主ですので、長い年月によって老朽化し解体する現象が平成から令和にかけて増えてきました。すると裏にあった石蔵がヒョッコリ顔を出し、石蔵ブームの小樽を迎えて、「えっいま僕？」と戸惑い恥ずかしがっているように見えます。

フリーランスの石蔵も旧手宮線沿線に面していますが、手宮線は貨物(石炭)輸送を目的に敷設されたので、沿線は人が往来する表通りではありません。手宮線が散策路に整備された平成28(2016)年以後の沿線は、そんな歴史が置き去りにされ、廃墟やツギハギだらけでまことにシュール感満載でした。

このように石蔵の「秘密」「保管」「裏」といったイメージが、時を経て現代人が再利用することによって「開放」「交流」といった「明るい」イメージに変化し、小樽独自のまちづくりや観光メニューになっています。

軟石の彫刻オブジェ
(小樽石蔵アート展･渡辺行夫作)
石蔵が開放空間となり、軟石をアートに使用

建物のあらまし

木骨石造ですが、屋根は穴だらけだったためガルバリウム鋼板に葺き替え、床は土間に木材を張り、階段の位置を変更しています。基本的に蔵のイメージを大切にして木材によって細部を修復し、軟石と板張りのバランスをとることにより、スピーカーから流れるJAZZの音質を工夫。軟石造は音にとって最適といいます。

建物使用履歴

明治41年に足袋などを扱う商店の蔵として創建され、大正15年に榎並勘太(えなみかんた)(銅鉄･金物卸小売)が所有、昭和14年中山龍太郎(銅鉄卸･度量衡小売)が購入、昭和29年鈴木岩之助が購入し後、近くの川又商店に賃貸<昭和36年住宅地図>、昭和40年篠原ソメに贈与され、昭和44年寺崎ミワが相続、昭和60年にJAZZ喫茶フリーランスが賃借し開店しています。建物所有は平成11年に個人の所有となっています。<大正11年『小樽商工名録』><竹内勝治調査>

現施設のProfile

①現在の施設名：JAZZ喫茶　フリーランス
②住　所：小樽市色内２丁目９-５
③電　話：0134-27-3646
④ＵＲＬ：https://www10.plala.or.jp/free-lance/
⑤店　主：神田 泰行
⑥地図位置：41

コラム 小樽商工会議所

明治40年に新築の小樽商業会議所（現水道局）
＜小樽市総合博物館蔵＞

昭和8年に新築の小樽商工会議所
（現旧小樽商工会議所）
＜小樽商工会議所蔵＞

小樽商工会議所は開設時「小樽商業会議所」といい、小樽商人達が設立したことを物語っています。

明治40(1907) 年６月19日小樽公園内に新築移転、これが大正８(1919)年に火事となり、昭和３(1928) 年１月１日、商工会議所法の施行により、小樽商工会議所に改称、その活動範囲を工業関係にも拡げます。昭和８(1933) 年待望の新事務所が竣工しました。これが色内大通りに現存する旧小樽商工会議所＜小樽市指定歴史的建造物＞です。

＜小樽商工会議所ＨＰ＞

歴代会頭

明治29(1896)年８月	山田吉兵衛
明治31(1898)年７月	高野源之助
明治33(1900)年６月	渡辺兵四郎
明治35(1902)年６月	高野源之助
明治36(1903)年４月	添田　弼
明治42(1909)年４月	藤山要吉
大正２(1913)年４月	磯野　進
大正４(1915)年４月	高橋直治
大正６(1917)年５月	山本厚三
大正10(1921)年４月	森　正則
大正14(1925)年４月	磯野　進
昭和４(1929)年４月	河原直孝
昭和８(1933)年４月	杉江仙次郎
昭和18(1943)年４月	松川嘉太郎
昭和30(1955)年９月	寿原外吉
昭和40(1965)年11月	木村円吉
昭和48(1973)年９月	川合一成
平成11(1999)年９月	鎌田　力
平成22(2010)年11月	山本秀明

（小樽商工会議所ＨＰ）

篤志者

小樽は民間がリードして歴史が創られてきました。下記は小樽では有名な商人が寄附した記録です。覚えやすいように七五調にしています。

板谷宮吉小樽市中(現長橋中学校)、
藤山要吉公会堂(現小樽市公会堂)、
木村円吉商大土地(小樽商科大学)、
土肥太吉は市庁舎(小樽市役所本館)で、
岡崎謙は能舞台(現小樽能楽堂)、
広海大家大鳥居(住吉神社)、
寿原外吉寿原邸(旧寿原邸)、
白鳥ちよ子(祝津御三家白鳥家)は水道で、
野口喜一郎シャンツェ(潮見台シャンツェ)なら、
奥山富作写真集(奥山コレクション)、
秋野武夫の資料館(スキー博物館)

磯野　進
＜小樽商工会議所 蔵＞

松川嘉太郎
＜小樽商工会議所 蔵＞

GOLD STONE 石造倉庫外観

最高の音響設備のコンサートホール

北運河を眺めながらの
お洒落なカフェ

鉄骨で補強し石壁をあえて露出

異次元の北運河に異空間の
石造倉庫は小樽観光のシンボル

小樽 GOLD STONE【喫茶・音楽ホール】・PRESS CAFÉ【喫茶】

歴史的エピソード

浜名甚五郎

千葉県出身の浜名甚五郎（はまなじんごろう）は大正５(1916)年の『北海道　銀行・大商店辞書』には「艀業・海陸物産商として手宮では小樽港の大商店」と記されていることから、成功した小樽商人に列せられています。

浜名の親分は「末広座」の侠客鈴木吉五郎です。吉五郎は明治３(1870)年から小樽に住み着き、明治６(1873)年に「末広座」を開業し、岡っ引きや消防頭もしています。

この鈴木の下に浜名甚五郎と鈴木市次郎がおり両者犬猿の仲。いわば親分の下に二人の若頭という異色な陣容で、両人とも艀業者です。市次郎は区会議員、商業会議所副会頭などの名誉職へ、浜名は艀の本業とその方向性も異なっていました。浜名は小樽の歴史に残る大正14(1925)年のゼネストを収拾したと言われています。この浜名も昭和15(1940)年には「自分は既に73歳の老齢となり、後継者もいない。長年の愛顧を受けた貴社に於いて御買取りしていただけば幸甚の至り」と渋澤倉庫に、曳船５隻、艀船28隻等を売却しています。

大正13年築　第一銀行小樽支店＜小樽市総合博物館 蔵＞

渋澤倉庫

渋澤倉庫は渋澤栄一率いる財閥の会社ですが、この倉庫は大正４(1915)年小樽に渋澤資本が進出した最初といわれ、次に大正13(1924)年第一銀行、それ以後運河沿いに２つ目の渋澤倉庫が建てられています。渋澤倉庫は明治42(1909)年７月に東京を本社として創業し、渋澤栄一ほか６名が資本金50万円で設立しています。渋澤栄一は明治41(1908)年８月６日に来樽し、大正４(1915)年旧宮村倉庫・遠藤倉庫が経営破綻したことを受け、渋澤倉庫へ移管する目途を立て、同年10月手宮町１に渋澤倉庫出張所開業、開陽亭で開業披露宴開催、大正(1916)５年には広谷倉庫は渋沢倉庫に譲渡、稲積倉庫・三浦倉庫とも交渉し、大正11(1922)年渋澤倉庫小樽出張所は小樽支店となっています。現在は北海道渋澤物流株式会社として札幌本社が小樽に残る倉庫の不動産管理をしています。

＜竹内勝治調査＞＜『小樽歴史年表』、渋澤倉庫HP＞

PRESS CAFÉ外観　クラシックカーが似合う

カフェ内部は天井が高く倉庫の梁露出が馴染む

店主の愛車ディスプレー

粋なアプローチ

昭和初期の銀行街＜小樽市総合博物館 蔵＞

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

大きな倉庫ですが、実は３つの部分から成り立っています。２つの細長い平家建て倉庫を平行に並べ、その２つをつなぐように大きな切妻屋根をかけた構造です。平行に並ぶ２つの倉庫は個別に建てられており、運河側から見て右棟（プレスカフェ）は明治28年といわれています。かつては旧手宮線側の妻壁に⊠印がついていたことから大正４年進出の渋澤が増築したようです。

＜『小樽の建築探訪』＞

建物使用履歴

明治28年に遠藤又兵衛倉庫として創建しますが、この時代にこのような大型の倉庫では、近隣には広海倉庫（明22）と右近倉庫（明27）、大家倉庫（明24）、小樽倉庫（明27）などの北前船倉庫が林立していました。遠藤は北前船主ではなく海産商でしたので、主に海産物を保管していたと思われます。

遠藤はこの事業で成功し、小樽区の所得税額が６番目に位置づけられる高額納税者となり、明治35年に自邸（現立正佼成会）を建てています。

しかし遠藤の隆盛は短命で、この倉庫は大正４年に進出した渋澤倉庫に、大正６年には自邸を山本厚三に所有権を移転しています。

この倉庫はその後、渋澤のままでしたが、昭和後期には輸入雑貨を扱うブルーハウスとなり、石造倉庫の再利用としては画期的な先駆けでした。

その後一時期私設博物館となり、平成18年PRESS CAFÉ、平成22年小樽GOLD STONEが開館しています。

平成３年　小樽市歴史的建造物指定
平成23年　小樽市都市景観賞

現施設のProfile

①現在の施設名：小樽 GOLD STONE
PRESS CAFÉ
②住　所：小樽市色内３丁目３-21
③電　話：GS：0134-32-5588　PC：0134-24-8028
④ＵＲＬ：GS：http://www.goldstone.co.jp/
PC：http://www.presscafe.biz/
⑤運営会社：
GS：株式会社サウンドクルー小樽　代表取締役　山本 英幸
PC：店　主　稲葉 圭計
⑥地図位置：42

外観

建物の大切さが伝わる店内

季節ごとのイベント

明治以来の看板

明治の後発でも最後まで
生き続ける地酒メーカー

田中酒造本店【地酒販売】

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

外観は木造であることから水分を含んで腐食するため、これまで何度か修繕を繰り返しています。

内観では、看板や道具を展示した酒造ミュージアムに、２階の和室を復元していますが現在は倉庫として使用しています。

建物使用履歴

明治32年に田中酒造の工場と店舗を創業と同時に建てていますが、昭和２年に初代田中市太郎が現店舗を建設ました。戦前の企業統合では工場が対象であったため店舗部分の営業は戦前戦中も継続しています。

平成元年　小樽市都市景観賞
平成５年　小樽市指定歴史的建造物

現施設の Profile

①現在の施設名：田中酒造株式会社本店
②住　所：小樽市色内３丁目２-６
③電　話：0134-23-0390
④ＵＲＬ：https://tanakashuzo.com/
⑤運営会社：田中酒造株式会社　代表取締役　田中 一良
⑥地図位置：43

コラム　小樽商人のルーツ①

「小樽商人」といっても彼ら(松前から訪れた小樽商人は次ページで紹介)は100％、北海道以外からビジネスをするために小樽へ訪れ財を成しました。では彼らはどこの出身(ルーツ)だったのでしょうか。全国津々浦々の出身で、明治の45年間にも変化がありますが、とくに多いのは「近江(滋賀県)」「加賀(石川県)」「越後(新潟県)」「松前(道南)」の４つの出身です。この特徴から「地均近江(じならしおうみに)　種蒔松前(たねまきまつまえ)　肥料加賀(ひりょうのかがに)　刈取越後(かりとりえちご)」と後世語られるようになりました。

近江商人

江戸時代には鰊場の「場所請負人」として、近江出身の岡田家と西川家が小樽の管理を委託されていました。境目は於古発川(妙見川)で、寿司屋通り沿いの川ですが、そこに架かる橋を「高島橋」と名づけられた所以でもあります。その川から銭函までを「ヲタルナイ場所」といい岡田家が、その川から忍路までを「タカシマ場所」といい西川家が管理していたのが、小樽商人の始まり、つまり「地均し」です。

大正４年忍路の鰊漁＜小樽市総合博物館 蔵＞

コラム 小樽商人のルーツ②

明治後期　小樽港に沖止まりする北前船

松前商人

北海道に渡った近江商人の最大の資源は「鰊」でした。しかしサハリン沖を起点として南下する鰊は時代とともに、回遊の距離を縮めてきました。なぜかは鰊しか知り得ません。江戸時代には道南の松前に群来（くき）ていましたが、幕末あたりから道央の積丹半島に群来るようになり、最初に松前の場所請負をしていた近江商人は積丹半島（小樽を含む）に「追鰊（おいにしん）」といって拠点を移してきます。近江商人が松前に拠点を設けていた間、そのビジネスに雇われ各地から移住してきた松前人は、近江商人の手ほどきを受けていたことから、彼らも自立して「追鰊」で、小樽で鰊ビジネスを起業し「種を蒔く」のです。

加賀商人

ここで加賀という場合、加越能（かえつのう）（加賀・越中・能登）で、今日の石川県と富山県を指します。加賀商人が小樽へ拠点を設けた最大の特徴は「北前船」でした。北前船主が小樽に倉庫を設け拠点化するのは主に明治20年以後です。北前船ビジネスの感心するところは、船主が蓄えた財を後年銀行に出資したことです。だから小樽にはいち早く北陸系の銀行が支店を設けています。鰊ビジネスの上に海運業や金融業で「肥料を加え」、小樽の産業を促進したといえます。

コラム 小樽商人のルーツ③

越後商人

地均、種蒔、肥料といえば農作業でも下積みですが、刈取といえば「いいとこ取り」の印象は免れません。近江も松前も加賀も海や船のビジネスですから危険が伴います。しかし越後商人は「荒物」「雑穀」「精米」など陸のビジネスで起業したことから、この堅実さを皮肉った「刈取」表現になっています。とはいえ小樽最大の大金持ちになった越後商人の板谷宮吉は、後年海運にも手を広げ、「船成金」といわれるように財を成しています。

明治後期の殷賑を極める海運業
＜小樽市総合博物館 蔵＞

雑穀の倉庫が並ぶ有幌倉庫群
＜小樽市総合博物館 蔵＞

旧日本銀行、旧三井銀行と並ぶ小樽では横綱級の旧日本郵船㈱ 小樽支店

樺太境界画定委員会議が開かれた２階会議室

鉄柱と格天井の１階フロア

歴史的建造物復原の第一号で小樽の歴史的建造物横綱に君臨

旧日本郵船株式会社 小樽支店【資料館】

歴史的エピソード

設計者　佐立 七次郎（1856～1922）

安政３(1856)年讃岐藩士の家に生まれ、工部大学校造家学科(現東大工学部)の第一期生。同期には辰野金吾(日銀小樽支店・東京駅)、片山東熊(東宮御所)、曽禰達蔵(三井銀行小樽支店)の３人がいます。卒業後、工部省、海軍省、逓信省を経て、明治30年頃より日本郵船の建築顧問。現存する作品としては日本水準原点標庫(東京憲政記念庭園内)があります。

＜小樽市HP＞

小樽市の民間委託のはしり

平成18(2006)年にこの建物は、NPO法人歴史文化研究所に管理運営を業務委託しています。行政が高度経済成長の勢いに乗じて、所有・管理・運営してきた多くの施設が膨らみ飽和状態になっていたこと、小樽市財政が窮迫していたこと、民間活力への期待が高まっていたなどの背景から、小樽市教育委員会の決断によって民間委託されました。一方小樽市民の特徴として、まちづくり運動団体が全国の何処よりも突出して多く、次第にNPO法人化し公務を担う社会土壌があったといえます。今後地方の自立を考慮すると、地方行政は財源や権限を中央から移転し、複雑化する前に細かな業務を民間委託してスリム化する必要がありますが、この建物の民間委託は突破口を開いたといえます。

明治18年に日本郵船が小樽に設置された時には、幌内鉄道は表通りにあった。機関車の影にある木造が最初の日本郵船の社屋＜小樽市総合博物館 蔵＞

明治39年竣工間もないころの日本郵船株式会社小樽支店
＜小樽市総合博物館 蔵＞

１階天井と柱の装飾

内玄関

昭和31年6月20日
小樽市博物館開館
＜小樽市広報広聴課 蔵＞

昭和32年小樽市博物館の様子
＜小樽市広報広聴課 蔵＞

平成10年小樽運河公園オープニングセレモニー
＜小樽市広報広聴課 蔵＞

建物のあらまし〈国指定重要文化財〉

表玄関を中心とした左右対称が美しく、１階の石の厚さは75cm、２階の石の厚さは60cmの小樽天狗山産軟石、腰・胴蛇腹・軒部分は登別産中硬石を使用した純石造建築です。

大理石敷き横玄関、繊細な木彫の大階段手摺り、美しく精緻な中心飾り等格調高い装飾が調和しています。米国製のスチールシャッター、建具金物類を用いており、すべて二重ガラスで北国の冬を考慮した当時としては最新式の設備。

そして２階会議室は、約198平方メートル、広さを強調する吊り天井の大胆な弧を描く装飾彫刻と中心飾り、シャンデリアの光を反射するアカンサス模様の金唐革紙（きんからかわがみ）、床を覆う大絨毯、大テーブルと36個の椅子が悠然として迫力ある時代を感じさます。

＜『小樽の建築探訪』＞

建物使用履歴

明治18年には日本郵船は小樽に拠点を設けていますが、明治39年に日本郵船株式会社小樽支店が新築され、昭和30年小樽市に譲渡、同31年小樽市博物館、同59年原形復原修復工事、平成18年NPO法人歴史文化研究所に業務委託、同25年保存修理（調査工事）のため閉館、同27年暫定再開、30年11月から工事が開始されています。

昭和44年　国指定重要文化財

＜小樽市総合博物館 蔵＞

＜小樽市総合博物館 蔵＞

現施設のProfile

①現在の施設名：旧日本郵船株式会社小樽支店
②住　所：小樽市色内３丁目７-８
③電　話：0134-22-3316
④ＵＲＬ：小樽市 HP https://www.city.otaru.lg.jp/simin/gakushu_sports/bunkazai_isan/bunkazai/yusen.html
④運営会社：NPO法人歴史文化研究所
⑤地図位置：44

マンサード屋根と上げ下げ窓の洋館

店内は改装してレトロな雰囲気

鋳物の薪ストーブの炎が映える

窓枠と扉が重厚な
コワーキングスペース

旧居宅をそのまま集会場に

Coworking Cafe & Bar “The Harbor”【喫茶&バー】

歴史的エピソード

大島（おおしま） 計太（けいた）

運送業を商い近海郵船株式会社専属輸出貨物取扱と記され、屋号を手宮早達組として明治35(1902)年に創業しています。当時の住所表示で手宮町２丁目11番地とあり、自宅は緑町でした。

押上（おしがみ） 與四郎（よしろう）

富山県出身。鮮魚仲買で来樽時には石山町に居住していました。与八夫人(與四郎息子の嫁)の話では與四郎は天秤棒を担いで魚の行商をしていたといいます。押上家族はこの建物の２階を住まいにしていました。

増田 又右衛門

この建物の土地所有は石川県加賀市橋立町の増田又右衛門（またえもん）で、北運河の３棟並ぶ一番札幌寄りの石造の増田倉庫、そのオーナーです。小樽では小樽倉庫の西出孫左衛門と西谷庄八と同郷です。増田はこの土地を明治34(1901)年に譲渡され、明治36(1903)年に分筆登記、地積が289坪(分筆前は600坪以上と思われます)あり、大正３(1914)年に増田豊子が相続、大正13(1924)年には二代目と思われる増田又右衛門が相続、昭和52(1977)年に共有者３名、平成24(2012)年には増田尚史に所有権が移転しています。小樽の歴史には西出・西谷はよく登場しますが、増田は登記簿に隠れていたようです。

＜大正11年『小樽商工名録』＞

建物のあらまし

木骨コンクリート２階建で、マンサード屋根が特徴的です。コンクリートの建物が小樽で普及するのが大正末期から、また上げ下げ窓からして、創建時期は大正期から昭和戦前とみることができます。

建物使用履歴

登記簿では昭和24年に大島計太から内外運輸倉庫株式会社に売却する記述がありますが、創建は戦前と思われます。昭和28年には押上與四郎の所有となり、昭和49年に押上与八が相続、平成14年に齋藤智恵子氏が所有し、喫茶北運河を開店、令和２年に The Harbor が賃借にて開店しています。

＜竹内勝治調査＞

現施設の Profile

①現在の施設名：Coworking Cafe & Bar "The Harbor"
②住　所：小樽市色内３丁目８-２
③電　話：0134-64-7280
④ＵＲＬ：https://otaru-harbor.com/
⑤運営会社：株式会社 PLUS　代表取締役　大屋 勝次
⑤地図位置：45

ラーメン店としてはオルタナティブな初代

ブラウンを基調色とした落ち着いた店内

吹き抜けの上部の壁は石肌をあえて露出

ラーメンを食して
哲学を感じるのはここだけ

初代 小樽本店【ラーメン】

建物のあらまし

再生時には二重屋根設置による落雪・漏水防止を施し、冷凍ストックスペースや分別ゴミステーションを増設。カウンターとテーブルに天然木(栓・桂・楡)を使用し、レイアウトの柔軟性確保のため柱を撤去し梁で補強しています。

建物使用履歴

建設年代は不詳ですが、平成６年に初代として再生しています。

現施設の Profile

①現在の施設名：初代 小樽本店
②住　所：小樽市住吉町14-８
③電　話：0134-33-2626
④ＵＲＬ：https://syodai.jp/
⑤運営会社：有限会社セヴァ　代表取締役　太田 勝敏
⑥地図位置：46

コラム 北前船の買積商法

江戸時代中期に北前船が航路の開発をしますが、それまでの海運業は、Ａ港からＢ港へどんな荷をいつまで運ぶかで運賃が決まって依頼される「運賃積み商法」といわれ、今日の宅配や運送業などをいいます。これに対して北前船は、大阪(大坂)で様々な製品や商品を積み込み、それらを必要とする各港に、降ろすと同時に、各港の製品や商品を積んで向かう先々の港に降ろす、つまり港ごとに仕入と販売を行う「買い積み商法」といわれました。

このビジネスモデルは北前船特有で、後世多くの研究者の対象ともなっています。このビジネスには「各地の特産品」「仕入と販売相場」「合理的な航路」「安全な航海」などの緻密な情報を持ち、「営業販売」「帳簿管理」「倉庫管理」などのノウハウを持たなくてはできません。まるでアクロバットのように奇跡的なビジネスです。近江商人に雇われた北陸の船乗りたちが、長い年月をかけて収拾した情報とノウハウが開花したと思われます。

「人間万事塞翁(さいおう)が馬」「ケセラセラ」「Let it be」といった「なるようになる」的な楽観と、緻密な計算とが織りなすビジネスです。たとえば小樽の古い建物の再利用に興味を抱いた観光客が、それに魅了され自らも参加し、小樽に移住し、多くの交流から発展するといった買い積み人生を連想するのも、楽しいものです。

小樽軟石と札幌軟石の融合する外観

酒造りを見学できる廊下

最初から醸造施設の売店であったかのような自然観

明治以来終始一貫道産米使用の徹底振り 石蔵は酒蔵に似合い過ぎ

田中酒造 亀甲蔵【地酒製造販売】

歴史的エピソード

岡崎　謙

この建物の創建は岡崎謙ですが、入船の住吉神社横の丘に邸宅を構え、その自邸に大正15(1926)年能舞台を建立した粋な趣味を持つ人物です。能舞台は謙没後の昭和29(1954)年小樽市に寄贈され、今日も大事に「旧岡崎家能舞台を生かす会」の力を借りて活用されています。岡崎は明治10(1877)年新潟の佐渡に生まれ、味噌醸造を生業としていた父と共に渡道し、現一橋大学で学び、米、雑穀、荒物、そして倉庫業を継ぎ、区会議員として「わが小樽市の発展は日本国家の発展なり」と名文句を残しています。また佐渡から直径２m40cmの名木神代杉を船一艘借りて運び、「鏡板の松」は狩野第十七代秉信が京都の絵の具を全部買い占め二ヶ月もかけて描き揚げたと伝えられています。

＜『小樽経済百年の百人』北海タイムス社＞

田中酒造

小樽には明治27(1894)年には27戸もの酒造業者がいましたが、だれもが内地米を原料とするのが当たり前で、明治32(1899)年創業の田中市太郎(岐阜出身)以来、現社長の一良においても北海道米をその原料としてきました。しかし道産の酒造好適米が一般的になるのは戦後しばらくしてからなので、そんな田中酒造は信念を曲げずに苦しくても継続してきました。ところが今日残る小樽の酒造会社は田中酒造一社のみになっているのです。

小樽市能楽堂

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

小樽軟石と札幌軟石を融合させ、厚さを復原しています。取得時には現臨港線部分にも倉庫がありましたが、道路拡幅により切り取られ、現存はその３分の２となっています。酒造りは冬、観光客は夏に集中していましたが、両方の都合を解決するため、通年製造を実現したことにより、石造倉庫以外の製造場建物を更地にして駐車場にしています。

建物使用履歴

明治35～38年　岡崎倉庫として創建、昭和28年三代目田中市太郎取得し酒造場へ。平成８年田中酒造株式会社亀甲蔵になります。

平成８年　小樽市指定歴史的建造物
平成９年　小樽市都市景観賞

現施設の Profile

①現在の施設名：田中酒造亀甲蔵
②住　所：小樽市信香町２-２
③電　話：0134-21-2390
④ＵＲＬ：https://tanakashuzo.com/brewery/
⑤運営会社代表者：田中酒造株式会社　代表取締役　田中 一良
⑥地図位置：47

好が入居する協和浜ビル

まるで古い映画のシーン

昭和の東京によくあった石造りの階段

まるで洋画の一コマ、創造的会話にはもってこい

中国料理 好（ハオ）【中華レストラン】

歴史的エピソード

嶋谷商船株式会社

嶋谷海運は山口県岩国市由宇（ゆう）町出身の嶋谷徳右衛門（しまたにとくえもん）が明治10年前後に興した「嶋屋」を起点とし、同28(1895)年には二代目徳三郎（とくさぶろう）が蒸気船を購入し北前航路に進出、大正６(1917)年嶋谷（しまたに）汽船株式会社を設立しました。初代徳右衛門の長女ハルの婿養子となった嶋谷八十八（やそはち）三男俊郎（としろう）が、この小樽出張所(嶋谷商船㈱)をまかされ、昭和８(1933)年にこの建物を創建しました。昭和13(1938)年には富岡に邸宅を構え、俊郎は裏の石蔵も使用し、嶋谷汽船の関係する建物３件が小樽市指定歴史的建造物になっています。

＜『嶋谷海運史』嶋谷　徹＞

旧嶋谷邸＜小樽市指定歴史的建造物一覧より＞

また石原裕次郎の父石原潔（きよし）は昭和11(1936)年以来、山下汽船小樽出張所主任となり、このビルに入居し、この頃、長男慎太郎は４歳、次男裕次郎は２歳でした。

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

左右対称で、窓の縦枠はアーチを描き4階までつながっています。室内は梁を露出させ、梁の端部を中央の断面より大きくしたハンチには玉模様をあしらっています。トイレの床タイルは四角形と八角形を組み合わせ、モダンな幾何学模様を見せています。　＜『小樽の建築探訪』＞

建物使用履歴

昭和8年嶋谷汽船株式会社小樽支社社屋として創建、昭和18年嶋谷が三井船舶株式会社に合併、三井船舶株式会社小樽支店に改称、昭和40年代北海道通信電設が所有し、その後昭和61年協和総合管理の所有となり、協和ビルに改称し、昭和63年中国料理レストラン「好」開業。

平成５年 小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①現在の施設名：中国料理　好
②住　所：小樽市色内１丁目2-18
③電　話：0134-32-0680
④ＵＲＬ：https://otaru-hao.com/
⑤施設代表者：株式会社山商　代表取締役　山本 秀明
⑥地図位置：48

外観

ワイルド感満載の空間

梁から直接吸煙機と証明器を設置

炭おこしの暖炉から直火が運ばれ
北海道ならではのワイルドな食事

北海あぶりやき運河倉庫【レストラン】

建物のあらまし

再生時に開口部およびアプローチを整備し、内装の床はタイル張りで、梁と柱はそのまま活かし、あえてダクトを露出。

建物使用履歴

建設年代は運河の対岸のため、大正12年以降です。創建社であり所有者でもある北海渋澤物流株式会社は今日も変わりません。

平成11年に北海あぶりやきが株式会社ユニマット経営にて開館し、平成23年から小樽運河株式会社経営により継承されています。

現施設の Profile

①**現在の施設名**：北海あぶりやき運河倉庫
②**住　所**：小樽市港町5-4
③**電　話**：0134-25-8810
④**運営会社**：小樽運河株式会社　代表取締役　半澤 真奈美
⑤**地図位置**：49

コラム 小樽の伝説①

小樽のサンタクロース「廣井（ひろい）　勇（いさみ）」

サンタクロースは家々を回って自らプレゼントしますが、朝目が覚めて靴下から開けて喜ぶ子供たちの顔を見ることはできません。だから神がかって伝えられています。

小樽の北防波堤（明治41（1908）年竣工）は日本人だけで造った本邦初の外洋防波堤ですが、これを設計し施工管理した廣井勇は、この防波堤を礎に発展した小樽の発展した港を後年見た形跡がありません。廣井は農学校（現北大）の二期生の一人ですが、同期にキリスト教思想家内村鑑三（うちむらかんぞう）がいます。農学校はキリスト教信者のクラークを教頭としていましたので、当然キリスト思想の影響が出ます。しかし廣井は思想を思想として伝えるより、思想を必要とする安定した経済環境を造ることが先決と判断します。「衣食足りて礼節を知る」との格言通りです。とくに「あらくれ」の多い小樽が、港湾商業を基幹産業として発展するためには、防波堤は欠かせないと見極めたと思えます。だから昭和３（1928）年に廣井が没した際、内村は弔辞を述べ廣井を「工学的良心」と言い、後年工学を志向する研究者の間で「日本近代港湾の父」とも言われました。

廣井は小樽のサンタクロースといえます。

重機でコンクリートの斜め埋め込み工事
<小樽市総合博物館 蔵>

北防波堤の全容が表れる
<小樽市総合博物館 蔵>

石造倉庫の重厚さと玄関の入りやすさ

柱と梁を生かした堅牢な空間

しっかりしたコンセプトがうかがえる

大型石造倉庫が地ビールレストランになるなんて誰が想像しただろう

小樽ビール 小樽倉庫No.1 【ビアレストラン】

歴史的エピソード

小樽倉庫　山本 厚三

この建物は旧小樽倉庫です。

小樽倉庫株式会社は明治22(1889)年に西出・西谷の北前船主によって設立されますが、明治38(1905)年に第３代山本久右衛門（きゅうえもん）に譲渡されます。この久右衛門の養子になったのが明治14(1881)年生まれ長野県出身の厚三です。厚三は大正から戦前にかけて小樽倉庫を発展させると同時に、現立正校成会（りっしょうこうせいかい）の建物を遠藤又兵衛から譲り受け自邸とし、昭和28(1953)年まで住まわれていました。山本厚三の活躍は倉庫業で隆盛を極めたばかりでなく、小樽区会議員、小樽市会議員、小樽商工会議所会頭、小樽商船社長、北日本汽船取締役、北海道製綿取締役、大正製麻取締役、小樽新聞取締役、北海道練乳監査役、定山渓鉄道監査役、松前造林社長などを歴任し、小樽港湾計画の推進に尽力し、大正９(1920)年第14回衆議院議員、以後第21回総選挙まで連続８回の当選を果たし、濱口内閣・鉄道参与官、廣田内閣・文部政務次官、立憲民政党衆議院院内総務などを務めました。

昭和９(1934)年には、父の跡を継いで札幌に広大な田畑を切り拓いた功績から、その土地の一帯が「山本」と命名され、厚別区厚別町山本としてその名を残しています。

前列右から三番目　山本厚三
＜小樽倉庫㈱ 蔵＞

山本厚三が住んでいた頃の邸宅
＜小樽倉庫㈱ 蔵＞

建物のあらまし

レストランの吹き抜け２階に回廊を巡らし、土間に木材床を整備しています。

レストラン中央部にビールの仕込み窯を設置し、第一次発酵タンクは蓋を開けて五感で管理する独自のスタイルを用い、第二次発酵タンク（ラガービール）も同時に見学可能です。

建物使用履歴

小樽運河の対岸ですので、運河竣工が大正12年、翌大正13年に小樽倉庫（新倉（しんぐら））として創建されています。平成11年に小樽ビール開館（小樽倉庫㈱より賃借）、平成20年には建物を株式会社サウンドクルー小樽が所有し、賃借にて小樽ビールが継続されています。

平成７年　小樽市都市景観賞

現施設のProfile

①**現在の施設名**：小樽ビール
②**住　所**：小樽市港町５-４
③**電　話**：0134-21-2323
④**ＵＲＬ**：https://otarubeer.com/jp/
⑤**運営会社**：株式会社アレフ
⑥**地図位置**：50

ここはいったい？と謎めいた石造倉庫

入ってビックリ！まるで南国の癒やし

石壁の露出がワイルドだが、客席はおしとやか

「お･に･くのひととき」･「パンたいむ」･「おちゃびより」の3つのパビリオンってなに？

オタルタイムズガーテン【レストラン】

建物のあらまし

赤茶けた軟石の色合いに年季を感じます。３つの小屋根がなんともかわいらしく、内観はまさに異空間です。おもしろいのは小樽運河側からの荷物の出し入れを目的に設計されていることです。

建物使用履歴

創建大正11年または昭和３年に大坂商船の倉庫として建てられ、昭和36年に北日本倉庫港運、その後郵船海陸運輸と変遷し、平成５年におれの小樽運河（レストラン）が賃借、平成22年から空き倉庫、平成24年に北日本倉庫港運と郵船海陸運輸が合併してノーススタートランスポート㈱となり、平成30年にオタル・タイムズ・ガーテンとして賃借利用しています。
＜竹内勝治調査＞

現施設の Profile

①現在の施設名：オタルタイムズガーテン
②住　所：小樽市港町５-４
③電　話：0134-24-5489
④ＵＲＬ：http://otaru-times-garten.com/
⑤運営会社：リブラアト北海道株式会社　代表取締役社長　畑中 俊彦
⑥地図位置：51

コラム　小樽の伝説②

小樽の花咲爺「奥井（おくい）　寛信（ひろのぶ）」

花咲爺は木々を回って自ら花を咲かせますが、その下で憩い楽しむ人々の顔を見ることはできません。だから神がかって伝えられています。

明治時代の小樽の山々はほとんど禿げ山でした。大量に獲れた鰊を肥料にするために炊く薪材として乱伐したからです。

そんな中、明治26(1893)に奥井寛信は北海道庁職員として小樽に赴任しました。明治31(1898)年に小樽の苗圃（なえぼ）常駐となり、小樽一円の山々に植林を進めました。苗圃はその見本を植樹しています。その影には大きな政治的逆境もありましたが、粘り強い努力により、現在の小樽は緑豊かで、長橋の苗圃公園は美しい林と桜が咲き誇っています。苗圃公園には多様(50種類)な樹木が植えられ、「森の自然館」が整備され、自然観察のセミナーや木工作クラフト室があります。

奥井は文字通り小樽の花咲爺といえます。

桜が咲き誇る苗圃公園＜森の自然館 蔵＞

苗圃公園　森の自然館

コラム 小樽の大地主

大正９(1920)年は日本初の国勢調査が行われ、それに基づいて小樽区も区内の土地所有者を調査しています。この内容が市立小樽図書館に『小樽区土地台帳』として保管されています。お金が貯まると土地を購入する動機は世界中に見られますが、昭和60(1985)年から平成３(1991)年の日本のバブル期は記憶に新しいと思います。

『小樽区土地台帳』にはたとえば「緑町３丁目180坪　木村円吉」としか記載されていませんが、編集部が人名ごとに加算した順位を右に示しました。

大正９年の小樽では、明治に起業して成功した商人が上位20人中18人もいました。珍しいのは３位４位に政治家榎本武揚(明治41没)と北垣国道(大正５没)の相続人が名を連ねていることです。この両人は明治５(1872)年に開拓使が行った北海道土地払い下げで、今日の稲穂・富岡のおよそ20万坪を購入し、小樽の市街地開発をする「北辰社」を立ち上げ、明治25(1892)年に寺田省帰(16位)が北辰社の社長となり、精力的に開発を進めています。この経緯から榎本の雅号「梁川」が梁川通りに、北垣の雅号「静屋」が静屋通りと称されるようになりました。

また、18人の商人の中でも、右近権左衛門、広海二三郎、大家七平といった北前船主は小樽に居住した形跡がなく、いわば「出張り」地の小樽をビジネスとして認識して土地を購入したようです。

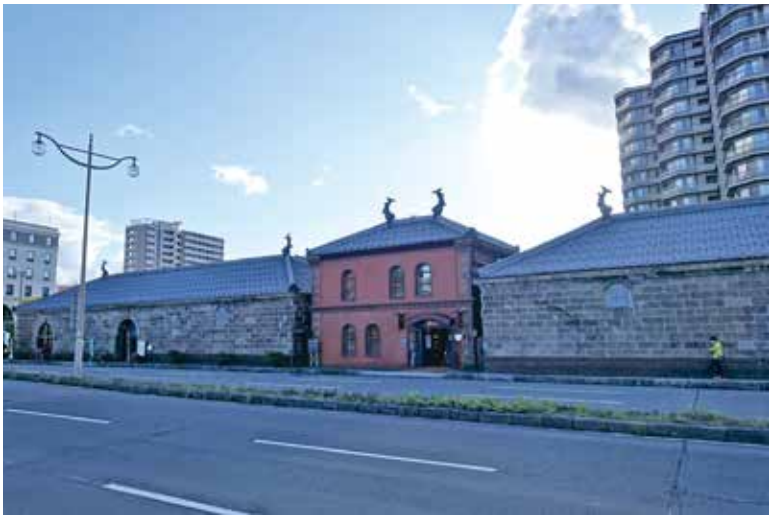
大正９年から数えてすでに100年経過し、小樽市内の土地所有地図も大きく変化しているようですが、ここに記された坪数の多くは市街地ですので、購入時とてそれなりに高額であったことを想像すると、小樽商人の力の大きさをうかがい知ることができます。

１位	木村　円吉	33,540坪
２位	山田吉兵衛	31,132坪
３位	早川　両三	26,809坪
４位	榎本　武憲	26,809坪
５位	北垣　　確	20,908坪
６位	右近権左衛門	23,884坪
７位	能島正次郎	18,667坪
８位	高橋　直治	16,035坪
９位	板谷　宮吉	11,379坪
10位	藤山　要吉	11,262坪
11位	石橋彦三郎	10,047坪
12位	広海二三郎	8,960坪
13位	猪股　孫八	8,637坪
14位	金子元三郎	8,594坪
15位	渡辺兵四郎	8,580坪
16位	寺田　省帰	8,107坪
17位	右近義太郎	8,097坪
18位	井尻　静蔵	5,624坪
19位	寿原重太郎	4,678坪
20位	大家　七平	3,851坪

山田吉兵衛
＜小樽市総合博物館 蔵＞

藤山要吉
＜小樽市総合博物館 蔵＞

渡辺兵四郎
＜小樽市総合博物館 蔵＞


旧小樽倉庫全景

小樽運河プラザ休憩コーナー

小樽市総合博物館運河館

小樽名物石造倉庫の代表格が こんなに素敵な活用に

小樽市観光物産プラザ(運河プラザ)【案内所・ショップ ホール・喫茶】・小樽市総

歴史的エピソード

斬新なビジネスモデル

小樽倉庫は明治22(1889)年に西出孫左衛門と西谷庄八らによって設立され、明治27(1894)年にはほぼ全容が建設されました。西出と西谷は石川県加賀市橋立町出身で姻戚関係にあり、加賀では両家とも江戸時代から廻船業を家業としています。

西出 孫左衛門
<小樽市総合博物館 蔵>

西谷 庄八
<小樽市総合博物館 蔵>

彼らが小樽倉庫を建設する以前の小樽には、加賀市瀬越出身の大家・広海が既に倉庫を建て、福井県河野村の右近も倉庫を建設しつつある中、画期的なビジネスモデルに開眼します。北前船ビジネスでは、市場が拡がる遠隔地において自船(複数)の積み荷を保管する倉庫建設を「蔵敷」といっていますが、明治20年代の小樽港には北前船はじめ汽船の寄港が増加していたことを知った西出・西谷は、自船の積み荷はもとより、倉庫を持たない他船の積み荷も保管する、いわゆる倉庫専門業を発案しました。日本の倉庫専門業第一号といわれる三菱資本が明治13年で、それから十数年経て小樽に生まれたことになります。正に小樽商人の進取の気性です。倉庫を持たない北前船が目指すのは必然的に小樽倉庫になりますので、屋根にシャチホコを掲げて目印にし、火伏の意味も込めました。もちろんまだ運河は出来ていませんので、シャチホコは目立ったことでしょう。また、他船の荷は企業秘密なので、荷ほどきは人目を避けるため中庭で行いました。だから小樽倉庫には、シャチホコや中庭があるのです。

運河造成以前の小樽倉庫

西谷商店・西谷回漕部

西谷庄八は明治23(1890)年には小樽に「西谷回漕部」を設け、また「西谷海運(大正期の住宅地図に記載)」も棟続きで創建しています。

明治22(1889)年に西出との共同経営であった「小樽倉庫」を設立し、明治27(1894)年には倉庫専用業として「小樽倉庫」が竣工しますが、明治38(1905)年には山本久右衛門に譲渡します。そこで元々小樽に拠点を持っていた西谷は上記の「西谷

旧小樽倉庫中庭とシャチホコ

小樽運河↑（プラス）

北運河地区に並ぶ北前船主倉庫

広海倉庫（明治22）

右近倉庫（明治27）

増田倉庫（明治36）

合博物館運河館【ミュージアム】・小樽百貨UNGA↑（プラス）【ショップ】

回漕部」「西谷海運」に専念し、西出は函館に拠点を移しました。

明治26年11月12日の開業式
左手前は西谷廻漕部
＜小樽倉庫㈱ 蔵＞

平成2年
小樽市運河プラザ
オープニングセレモニー
＜小樽市広報広聴課 蔵＞

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

寄棟の瓦屋根にシャチホコを載せた和洋折衷のデザインで、煉瓦造の事務所を中心に左右対称に展開し、全体として優雅な美しさをみせています。

＜『小樽市指定歴史的建造物一覧』＞

この先進的なデザイン性は大家倉庫や広海倉庫も保持していますが、「これからは北前船主の時代」といったデモンストレーションを感じ取ることもできます。小樽倉庫のデザインは西谷庄八の発案によるものと同家の子孫に伝わっています。

建物使用履歴

明治22～27年に第11代西出孫左衛門と第５代西谷庄八が小樽倉庫として建設しますが、明治38年には青森県むつ市田名部（たなべぐん）出身の第３代山本久右衛門（きゅうえもん）に譲渡し、以後山本家が小樽倉庫を経営し、現在も移転して運営されています。小樽倉庫のこの建物は昭和58年に小樽市に売却され、昭和60年小樽市博物館が別館として開設、平成２年小樽市運河プラザ開設と同時に小樽観光協会事務所移転設置、平成19年小樽市博物館は本館を手宮（旧小樽市交通記念館）に開設したことから小樽市総合博物館運河館に改称、平成26年瓦屋根全面修復約６万枚を葺き替え、令和２年に事務所棟に小樽百貨UNGAプラスが開設されています。

平成３年 小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①現在の施設名：
小樽市観光物産プラザ（運河プラザ）
小樽市総合博物館運河館
小樽百貨UNGA↑
②住　所：小樽市色内2-1-20
③電　話：プラザ0134-33-1661　博物館0134-22-1258
プラス0134-65-8150
④ＵＲＬ：プラザ https://otaru.gr.jp/walk_1
博物館 https://www.city.otaru.lg.jp/simin/sisetu/museum/
プラス https://unga-plus.com/
⑤運営会社代表者 or 施設代表者
プラザ：小樽観光協会　会長　西條 文雪
博物館：小樽市総合博物館　館長　石川 直章
プラス：うんがぷらす株式会社　代表取締役　髙橋 琢真
⑥地図位置：52

外観

岐阜県赤坂産大理石のカウンター

回廊軒下の装飾

小樽の歴史的建造物の横綱、ルネサンス様式の空間で金融の仕組みを学ぶ

日本銀行旧小樽支店 金融資料館【ミュージアム】

歴史的エピソード

セメント

この建物は煉瓦造ですが当時新材料のモルタルが導入されています。セメントに火山灰を混ぜたモルタルが塗られています。「セメント壱、火山灰壱、砂六の割合・・」と『工事仕様書』に記されています。この火山灰混合のセメントは北防波堤(明治41年竣工)建設においても廣井勇が用いていており、このときの火山灰混合は余市の火山灰で、その余市産が日銀にも用いられています。

日本銀行小樽支店では山口県の小野田セメントと函館近郊上磯の北海道セメントの製品を3,224樽使いました。セメントは外壁、基礎、床、屋根のほかに石積みとれんがの間(目地)にも用いています。とくに床と屋根にはセメント、石灰、砂に石炭殻を混ぜてたコンクリートを詰め、防火に役立てる工夫をしました。

建築工事の現場では、工事仕様書に書かれた「農商務省規定ノ試験方法」にしたがってセメントの「粉末、凝結、膨張、亀裂、耐伸力」の品質を調べたところ、北海道セメントの製品のおよそ半分に「耐伸力」の不足がわかり、改良品に取り替えることになりました。

明治期の建築での最大の注意は防火建築の模索でした。したがって小樽では地元で採掘された軟石が重用され、今日も数多く軟石造の倉庫や蔵が残っています。ここにセメント技術が普及してくると、軟石の使用にブレーキがかかり、木造でも安価なモルタルを塗る工法が普及してきます。

＜『日本銀行小樽支店の主要構造と仕様』駒木定正＞

保存運動

小樽では昭和48(1973)年に小樽運河を守る会発起人会が組織されて以来、令和２(2020)年に至るまで、80を越すまちづくり団体が誕生するほど市民運動が盛んです。平成14(2002)年に日銀撤退が決まる当たりから、小樽市、小樽商工会議所、小樽観光協会、そして市民団体などが署名を集め、日銀の保存運動を形成すると同時に、金融庁に要請を行ってきました。その結果、平成15(2003)年に日本銀行旧小樽支店　金融資料館が開館されます。小樽のどの機関もお金を出さず、金融資料館整備も、まして入館無料にする度量の大きさに小樽は感激しています。お金を出さないことを我が儘とすれば、小樽の我が儘が歴史的建造物再利用という文化にまで好影響を与えたと言えないこともありません。

◀明治26年派出所を経て
明治30年出張所、
明治39年支店を経た
建物
＜小樽市総合博物館 蔵＞

左右対称の美しいフォルム▶
＜小樽市総合博物館 蔵＞

◀高塔とまだ煉瓦のまま
の建設間もない時期
＜小樽市総合博物館 蔵＞

日本銀行営業場▶
＜小樽市総合博物館 蔵＞

建物のあらまし〈小樽市指定有形文化財〉

外観の様式はクラシックスタイルを採用し、左右対称を基本形態にしています。側面の東南隅に4階建ての海を眺望できる高塔は建物を際立たせています。構造は煉瓦造りで外壁にモルタルを塗り、煉瓦は基礎と壁に野幌産と大阪産を積み、最新の材料であった鉄骨を小屋、床、階段に用いています。小屋の鉄骨は八幡製鉄所の初期製品として貴重です。

＜『小樽の建築探訪』、『日本銀行小樽支店の主要構造と仕様』駒木定正＞

建物使用履歴

日本銀行は明治26年４月１日に小樽派出所を設置しますが、この建物は明治45年に日本銀行小樽支店として創建されます。しかし小樽経済の衰退にやむを得ず平成14年日本銀行札幌支店に統合され閉鎖、小樽市あげての保存要請もあり、日本銀行の歴史や業務などを分かり易く解説する広報施設として、平成15年に日本銀行旧小樽支店金融資料館として開館されました。

平成14年　小樽市指定有形文化財

※日本銀行小樽支店

明治26年　日本銀行は小樽派出所を設置
明治30年　日本銀行小樽派出所は小樽出張所に昇格
明治39年　日本銀行小樽出張所は日本銀行小樽支店に昇格
※東京以北唯一の日本銀行支店、日露戦終戦後に樺太南半分の割譲により小樽港の発展に弾みがついたようです。
明治42年　日本銀行は色内町に小樽支店新築に着工
明治45年　日本銀行小樽支店竣工

現施設の Profile

①現在の施設名：日本銀行旧小樽支店 金融資料館
②住　所：小樽市色内１丁目11-16
③電　話：0134-21-1111
④ＵＲＬ：https://www3.boj.or.jp/otaru-m/
⑤運営会社：日本銀行
⑥地図位置：53

木骨石造の堂々たる心意気

陽が差すとまるで異空間

ワインショップ　ギフトにも対応

小樽を代表する歴史的建造物で
小樽を代表するワインを

小樽バイン【レストラン・ワインショップ】

歴史的エピソード

小樽の歴史的建造物の横綱級に、日本銀行、三井銀行、日本郵船が君臨していますが、それぞれの設計者が辰野金吾、曾禰達蔵、佐立七次郎という工部大学校(東大建築学部の前身)一期生４人のうちの３人で、いずれも小樽では大型の建物です。しかし日銀は辰野の弟子である長野宇平次(ながのうへいじ)が実質の設計者で、辰野からの要請だったと思われます。そこに奇遇というか皮肉というか、北海道銀行から直接長野に設計の依頼がきてしまうのです。長野は辰野に報告しながら二足のわらじを履きますが、日銀とは大きく異なる様式で設計したことがうかがえます。

長野 宇平次

一つだけ同じなのが「フクロウの飾り」です。これは夜目の効くふくろうが先住民アイヌの守り神であることや、ラテン民族の「神は見ている」に描かれたフクロウとの諸説があります。いずれも大事なお金を管理する銀行の任務が伝わってきます。

また中央バスが所有し後ろ側の増築部分を、本館と連携したデザインにしていることも、小樽人の歴史を重んじる重要な気質としていいのではないでしょうか。

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

外観は石造にモルタルを塗っています。向かいの日本銀行旧小樽支店も煉瓦造にモルタルです。同じ明治45年創建ですが、この時代のモルタルは最新材料でした。また日銀も道銀も長野宇平治が設計していますが、日銀との区別意識が長野の意志を反映させて興味深くうかがえます。アーチを描く窓や玄関飾りの石積みはルネサンス様式です。

建物使用履歴

明治45年に北海道銀行本店として創建され、昭和40年には北海道中央バス株式会社本社に所有が移り、平成８年に北海道中央バスの投資により１階・地下部分を小樽バインとして開店しました。

ちなみに北海道銀行は今日の北海道銀行ではなく、明治27年に余市銀行が明治31年小樽銀行に改称し、明治39年に北海道銀行に改称され、明治45年北海道銀行本店として新築され、昭和19年戦時下の統制経済「一県一行」で北海道拓殖銀行に合併されています。　＜『小樽の銀行小史』＞

昭和60年　小樽市指定歴史的建造物

北海道中央バス時代の外観
＜小樽市総合博物館 蔵＞

現北海道銀行時代の外観
＜小樽市総合博物館 蔵＞

現施設の Profile

①現在の施設名：小樽バイン
②住　所：小樽市色内１丁目８-６
③電　話：0134-24-2800
④ＵＲＬ：https://www.otarubine.chuo-bus.co.jp/
⑤施設代表者：店長　志和　裕
⑥地図位置：54

創建当時のままの外観

薬局の面影を残す１階 Café White

２階宿泊レンタルスペース

歴史的建造物活用の発信源となり、小樽探索のコンバージョン役へ

旧岡川薬局【喫茶・宿泊】

歴史的エピソード

小樽発祥の地

小樽に和人の集落が最初に形成されたのは勝納河口でした。「安政２(1855)年には信香町(のぶかちょう)では市街の体裁をととのえ、元治２(1865)年には村並(にしん)となり」<『小樽市史第一巻』>という記録から、鰊場であった信香町では鰊労務に携わった人々が、既に市街を形成するほど鰊漁が盛んであったと読み取ることができます。信香町において「安政４(1857)年、場所請負人岡田が道路開削をした際に、貸座敷業及び呉服商１戸の永住を許した」<『小樽市史第一巻』>という記録がありますが、もうそろそろ生活に必要な商いでもを匂わす記録です。

実際に市街の体裁を小樽で最初に整えたのが「明治元(1868)年２月に永住家数156軒、人別(人口)564人、出稼家数80軒、人別215人」<『小樽高島明細書』>となって市内の集落は勝納河口の信香と信香裡に集中し、「明治３(1870)年に開拓使の出先機関小樽仮役所が小樽郡に信香・信香裡・山ノ上・勝納・金曇・芝居・土場・新地・若竹の９ヶ町を設置」<『小樽歴史年表』>しており、いずれも勝納川流域だったことがわかります。旧岡川薬局が面する勝納川流域のことです。この記録により、定住・出稼ぎ779人が生活していた、いわば小樽発祥の地です。しかし明治14年の大火でせっかくできはじめた市街が全滅します。岡川薬舗が開業した明治28年からこの建物が建設された昭和５年は、まさに小樽の黄金期で、全滅した信香周辺にも次第に商店が再形成されてきました。

明治初期 常夜灯(海陽亭)の向こうにひろがる住宅街が勝納流域
<北海道大学 附属図書館 蔵>

勝納河口に架かる幌内鉄道跨線橋
<北海道大学 附属図書館 蔵>

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

店舗兼住宅として、当時には珍しいマンサード屋根を構えています。平成５年には、小樽市の歴史的建造物に指定されている、歴史価値のある建物です。

建物使用履歴

明治28年に初代岡川善太夫がこの建物の隣接地に岡川薬舗を開業。２代目松太郎の時代昭和５年に建設され、４代続いた薬局としての役割を平成17年に終えました。

オーナーの移住に伴う売却もしくは解体の話に手を挙げたのは、近所で生まれ東京大学大学院で建築を学んだ建築家・クリエイティブディレクターの福島慶介氏。平成21年に建物を購入し、翌年４月より(旧)岡川薬局プロジェクトを始動させています。　<『小樽の建築探訪』、旧岡川薬局HP>

平成５年　小樽市指定歴史的建造物
平成29年　小樽市都市景観賞

現施設の Profile

①**現在の施設名**：(旧)岡川薬局
②**住　所**：小樽市若松１丁目７-７
③**電　話**：0134-64-1086
④**ＵＲＬ**：http://www.re-okagawapharmacy.info/
⑤**運営会社**：(旧)岡川薬局　代表　福島 慶介
⑥**地図位置**：55

外観

小樽ファンタジーを代表する店内

レトロな薪ストーブ

小樽スローライフのシンボル
時間が止まること請け合い

珈琲店 はち【喫茶】

建物のあらまし

前の店舗(昭和初期の建築)の解体に伴いなるべく使える建具や窓、床材などを大工さんと相談し使用しています。

建物使用履歴

平成８年　珈琲店　はち　移転開業(民家改装)
現在の建物は、昭和20年代の建物です。
なんども改装されたあとがありますが、移転に伴い昭和初期の富岡町の前店舗の解体される窓、建具などを使用リノベーションしています。実際の建築年代よりも古く感じられるのは建具などの再利用の効果と思われます。 <はちホームページ>

現施設の Profile

①現在の施設名：珈琲店 はち
②住　所：小樽市住吉町12-1
③電　話：0134-27-6408
④ＵＲＬ：https://sumiyoshi-hachi.jimdofree.com/
⑤運営者：長谷川 典子・布川 真紀子
⑥地図位置：56

コラム ポスト観光

小樽は昭和58(1983)年から観光都市を形成してきました。道内から、道外からも、そして海外からも来てくれる国際的な観光都市に向かいつつあります。今その波及で移住者も少しずつ増え始めています。しかもこの移住者の多くは、小樽が好きで移住した方々ばかりです。そこで、観光、観光と盛り上がるその先にはなにがあるのでしょうか。

「小樽観光都市」の火蓋を切ったのは小樽運河保存運動でしたが、そのリーダーであった小樽運河を守る会会長であった故峯山冨美は「地域に生きる」ことを提唱していました。そうです。運河がどうなるかは彼女自身の人生そのものでした。小樽の公的問題を私的問題に同化させていました。

この提唱を後世の私たちも継承しようと考えてみてください。もっとわかりやすく言うと、私たちのライフスタイルの中に小樽の何かを同化させることです。現代の普通のライフスタイルでは「コンビニ・スーパー・病院・レンタルなどが近隣にある場所」という統計がありますが、ここに「断固小樽の……」を入れ込むライフスタイルです。

すると観光客は「小樽は単なる観光地ではなく、一人一人のライフスタイルが小樽を支え、しかも多様性に満ち、自分も移住したくなる」と感じてもらえるのではないでしょうか。私たちがイメージするのは「観光都市小樽」から「民際都市小樽」を展望し、世界中の人々が交流し移住できる、そんなまちづくりです。

ニューオリンズの街を楽しむストリートパフォーマンス

西陽がにじむ外観

シックで落ち着いた内観

木の踏み面、鉄の手摺りで拡幅した階段

小樽の菓子「円甘味」が プロデュースする洗練空間

石蔵 Café ヴェールボア【喫茶】

歴史的エピソード

漁　業　中山 喜六

創建者は古川嘉兵衛ですが、６年後に所有したのが中山喜六です。中山は弟喜三と明治40(1907)年に漁業および倉庫業として「中山合資会社」を堺町に創立させますが、個人事業時代の明治39(1906)年にこの石蔵を使用し、さらに現在の堺町「出世前広場」の辺りに豪華な自邸を構えています。港町には大きな倉庫を併設し、倉庫業も兼ねていたようです。この構えの住居表示が後に「港町」から「堺町」に改称され、合資会社の社屋に使われています。　＜『小樽便覧　大正４年』＞

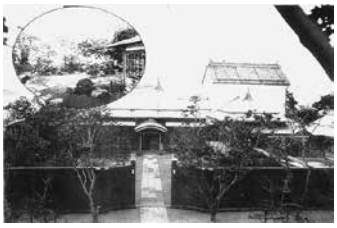
建物のあらまし

構造は木骨石造で札幌軟石を使用した石蔵です。屋根組の木造洋風トラス梁がデザインとしても店内に落ち着きと洗練さを醸しています。

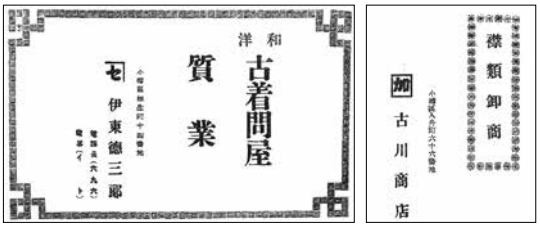
建物使用履歴

建設時には今はなき木造の母屋が「明治33年９月保存登記　古川嘉兵衛」との記録があり、明治39年には中山喜六に所有権が移り、明治43年には伊東徳三郎に所有権が移転し、この段階で石蔵２棟が大正２年12月に登記されます。いずれも「石蔵２階建て各12坪(40㎡)」でした。昭和18年頃には、前川商店が借りて洋傘、軍手袋などの製造卸で使用します。ちなみに前川商店は大正９年に別の場所で創業しています。「昭和22年６月売買越辰次郎」と「昭和63年相続越勲」の記録から、越氏が所有していますが、使用内容は不明です。この間に石蔵１棟は解体されますが、昭和63年小樽に進出した国際インテリアアカデミーの近隣にあったため、その付随施設(研修室等)として残った１棟を使用。平成12年頃から空き家となりますが、平成20年頃民家として活用され、平成30年ヴェールボア開店に至ります。　＜竹内勝治調査＞

明治にあった中山合資会社
＜小樽市総合博物館 蔵＞



現在の堺町「出世前広場」辺りにあった中山喜六邸
＜小樽市総合博物館 蔵＞



大正４年
小樽商工名録より
（滋賀県出身）

現施設の Profile

①現在の施設名：石蔵 Café ヴェールボア
②住　所：小樽市相生町９-９
③電　話：0134-55-0984
④ＵＲＬ：https://www.facebook.com/verrebois/
⑤運営会社代表者：㈱円甘味代表取締役　堀井 久志
　施設代表者：店長　森　義仁
⑥地図位置：57

煉瓦の擁壁と階段状に三層に連なる邸宅

１階蔵を旧寿原邸ミュージアムに

３階和室を落語や歴史講座で活用

官民協働の第一号施設
活用アラカルトの打ち出の小槌のよう

旧寿原邸【記念館】

歴史的エピソード

寿原商店　寿原 外吉

寿原 外吉
＜小樽商工会議所 蔵＞

寿原一族の起源は明治15(1882)年に富山から来樽した八代寿原彌平次で、明治中期には猪之吉、重太郎の三兄弟で事業を発展させますが、猪之吉、重太郎はそれぞれ会社を立ち上げ、彌平次の事業「寿原商店」を継承したのが彌平次の養子外吉でした。外吉は彌平次創業以来主に扱った瀬戸物から脱皮し、硝子と金物をメインとして、全道の建築資材や家庭金物の市場を創造し「寿原商事」として発展させました。

＜『株式会社スハラ商事百年の歩み』＞

海から見た寿原邸

ちなみに、外吉は生前の昭和60年に５億円、没後遺族が５億円、計10億円を寄付し、「公益財団法人寿原記念財団」を設立し、道内の自然科学研究の若者を支援しています。

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

建物の高低差が特徴で、２階・３階の下はそれぞれ地面となります。各階からの庭園眺望も良く、和室・洋室・蔵も兼ね備えた木造３階建て構造です。三階を支える石垣は亀甲組で貴重です。

建物使用履歴

この建物は、大正元年に小豆将軍といわれた高橋直治が創建しましたが、大正15年高橋没後の昭和９年に寿原外吉が所有して自邸とし、昭和60年寿原外吉没後、遺族から小樽市に寄贈されました。小樽市は昭和63年から一般開放し、平成24年特定非営利活動法人 Visit Otaru Project、平成25年に特定非営利活動法人北海道職人義塾大学校に委託しましたが、平成29年に国の補助金がつき屋根の改修等を行い、令和元年から特定非営利活動法人小樽民家再生プロジェクトと協議し、保全事業や活用事業を随時進めています。

平成３年　小樽市指定歴史的建造物

現施設の Profile

①**現在の施設名**：旧寿原邸
②**住　所**：小樽市東雲町 8-1
③**電　話**：0134-32-4111　内線 349
（問合せ先小樽市建設部公園緑地課）
④**ＵＲＬ**：https://www.city.otaru.lg.jp/simin/sumai/machidukuri/renovation/
⑤**運営団体**：特定非営利活動法人小樽民家再生プロジェクト
https://otaru-minka.org/
問合せ先　080-3156-8484（石井）
⑥**地図位置**：58

裏に石蔵を擁した外観

蔵前の馴染んだ古部材
移築デザイン

２階奥座敷（欄間の移築）

元金澤邸・旧岡田邸大正8年に隣家の奥山富作（写真家）が購入、昭和13年に「北の誉」経営者の一族の岡田与作吉に渡っています。

石蔵はもとより新築店舗に古部材を移築した徹底振り

小樽蕎麦屋 籔半【蕎麦】

歴史的エピソード

小川原　格

小川原格（2019年没）といえば小樽運河保存運動の舵取り役であると同時に、小樽の若者の思いを束ねて社会に向け、硬軟両様の構えで発信し、人望を集めるリーダーでした。故郷の小樽と後志の「宝」を見出し、活かすことに尽力しました。

蕎麦屋籔半は父昇氏が駅前の国道沿線に創業していますが、祝津の鰊親方御三家の一人、白鳥家の別邸（割烹旧「日乃出」）であった建物を昭和48（1973）年に移転・再生し、火事に遭遇したことから昭和61（1986）年に新築しています。石蔵を残しましたが、時あたかも富岡で解体された旧金澤友次郎邸の母屋の部材を譲り受けて、新店舗の意匠として活用しました。この手法は後にも先にも営業店として籔半しかありません。まさに小樽独自の歴史活用です。

白鳥　永作・金澤友次郎

２代目白鳥永作は、大正７（1918）年の北海道内における多額納税者として「11位の8,614円（現在の約１億円）」を納めています。

金澤友次郎は石川県出身松前郡福島在住の回船業者で、明治37（1904）年ころ自邸を小樽の富岡に建設。同時に金澤植物園を開園し、同39（1906）年火災により売却。金澤は２代目木村円吉（松前の花田伝七三男　小平町に旧花田家番屋現存）が初代木村円太郎の孫娘ミヤとの仲人でもありました。　＜『続・小樽豪商列伝』＞

若き日の小川原 格

建物のあらまし

玄関前には福井県産の笏谷石や御影石と那智黒の玉石が敷かれ、帳場には移築された庇（樹齢80年以上の杉丸太の小屋組）を馴染ませ、二階座敷には竹の床柱と平書院のある座敷飾や彫刻欄間、皮付丸太の格縁に市松張天井などを移築しています。石蔵は石壁・漆喰壁・腰板の三拍子が揃っています。新築と旧金澤邸の部材を再利用する設計を担当したのが、小樽運河保存運動の初期に駒木定正氏とともにハビタを結成した狩谷茂夫氏です。

＜『籔半パンフレット』＞

建物使用履歴

祝津の鰊親方御三家の一人、白鳥家の別邸として大正末に創建、その後、割烹「日乃出」が再利用し廃業しています。

一方昭和29年　小川原昇が、小樽駅前国道５号線角で「蕎麦屋・籔半」を開業し、昭和45年隣家からの火災で全焼、再建のため、昭和48年小樽市駅前再開発事業で、静屋通りの現在地に移転再生。昭和59年　小川原格が株式会社籔半代表取締役就任、昭和61年籔半全焼、旧金澤友次郎（五楽園）邸の内部部材を移築し、残った蔵とともに再建しています。

現施設のProfile

①現在の施設名：小樽蕎麦屋 籔半
②住　所：小樽市稲穂２丁目19-14
③電　話：0134-33-1212
④ＵＲＬ：https://yabuhan.co.jp/
⑤運営会社代表者：株式会社籔半　代表取締役　小川原 ひとみ
⑥地図位置：59

外観

仕切りも大胆

吹き抜け回廊

２階ギャラリースペース

小樽発祥で多店舗を持つが、
ここはショップもギャラリーもエスニック風

December3 【エスニックショップ・ギャラリー】

建物のあらまし〈小樽市指定歴史的建造物〉

再生時には屋根の防水、蔵屋根の瓦、小樽軟石、３階梁のゆがみなど老朽化修復。内観では柱と梁を当時の技法を知る釘を使わない宮大工職人が修復指導。増設の階段は一本の老木で自然感を出し、壁はエスニック調の色彩の塗り壁とし、２階ギャラリー部分の上げ下げ窓を活かし、回廊に鉄柵を巡らしています。

建物使用履歴

昭和６年に丸ヨ白方支店（本店は積丹）として建設され、昭和59年には株式会社ミキが所有しファッション雑貨のショップに、平成15年に空き店舗となり、平成17年にディッセンバースリー所有で開店しています。

平成26年 小樽市指定歴史的建造物

現施設のProfile

①現在の施設名：December3
②住　所：小樽市稲穂２丁目14-１（都通りアーケード）
③電　話：0134-22-9973
④ＵＲＬ：http://december3.jp/
⑤運営会社：有限会社ディッセンバースリー
マネージャー　鈴木 謙吾
⑥地図位置：60

コラム 観光深化の法則

観光客が小樽に訪れる動機は様々ですが、初めて来る方を「Visitor」、複数回来ている方を「Repeater」といいます。さらに小樽への興味が講じると「Fan」になり、今度は小樽で動く「Community」に参加し、ゴールでは小樽に移住して仕事を持つ「Business」に至ります。Business から見ればVisitorは入口です。小樽では観光振興はもちろん、移住促進も諸所で行われています。

「観光客が何百万人来た」と断面で捉えることも大事ですが、そのうち何割がRepeaterとなり、Fanとなり、Communityに参加し、そしてBusinessをするようになったかという動態観察も重要な視点です。これを各段階の頭文字を並べて「ViReFaCoBu（ヴィレファコブ）の法則」と名づけています。また観測する場合「ViReFaCoBu 統計」ともいえます。

この法則で小樽移住された方々全員が「小樽大好き人間」ですので、「小樽と共に生きる」新たなライフスタイルが紡がれ、世界から注目を集める小樽になると思うのですが。

Visitor → Repeater → Fan → Community → Business → 地域と共に生きるライフスタイル

景観遺産

心に残る各時代の八景

景観遺産

八景

風景は時代と共に変化します。「風景」を見て人の心に刻まれたものを「景観」といいます。すると風景が変化しても変化する以前の風景が心に刻まれていれば景観はその人の心の中で生きており、それをその人の「原風景」と呼びます。たとえば堺町はかつて問屋街でしたが今日では観光街になっています。でもある人にとって堺町の原風景は問屋街のまま残っていることがあります。「ふるさとは遠きにありて思ふもの」と室生犀星が詠っていますが、「思う」心を覗くと故郷の原風景がきっと刻まれているはずです。でもその風景は変化している場合が多いのは、景観を置き去りに風景は変化していることになります。

そして景観は人によってそれぞれです。このそれぞれの景観を時代に沿って人気投票をし、「小樽八景」として記録されてきました。なぜ「八」かというと、10世紀に北宋で選ばれた瀟湘八景がモデルとなり、影響を受けた台湾、朝鮮、日本など東アジア各地で八景が選定されてきたようです。瀟湘とは湖南省長沙市一帯の地域のことです。ちなみに八景とは「晴嵐」「晩鐘」「夜雨」「夕照」「帰帆」「秋月」「落雁」「暮雪」を指しています。

観光と景観

観光客が旧日本郵船を訪ねてガイドから歴史的な話を聞くと、とても豊かな観光実感を得ると同じく、今の小樽の様々な風景を見て、その変化の感じ方を聞くと、小樽の歴史事実とともに味わい感じることができます。たとえば「今はこのような風景ですが昔はこうでした」と説明し、「このような変化の中に小樽人気質を垣間見ることができます」と案内すると、風景の変化と小樽人気質が重なって感じることができます。

1．明治八景＜『小樽市史』明治13年太政大臣三条実美撰＞

①祝津の夜雨（しくづしのやう）
②色内の晴嵐（いろないのせいらん）
③住吉の秋月（すみよしのしゅうげつ）
④龍徳の晩鐘（りゅうとくのばんしょう）
⑤浜中の夕照（はまなかのゆうしょう）
⑥朝里の落雁（あさりのらくがん）
⑦石狩の帰帆（いしかりのきはん）
⑧増毛の暮雪（ましけのぼせつ）

2．大正八景１＜大正３年『小樽』より＞

①狗峯霽雪　②天宮煙牆　③高洲漁火
④勝川涼月　⑤稲濱秋蟲　⑥奥澤夜雨
⑦海雲晩鐘　⑧花園春遊

※解説

出典の『小樽』では、「海を埋立て、山の樹木を伐採し、鉄路を敷き、馬が駆け、家並みが建ち、やかましく開発する地域だ。その小樽の歴史も人の50年にも満たないから、自然も人工も賞するに足りない」と言いながら進歩を目指す言い回しをしています。著者棟方虎夫は小樽区花園在住ですが、自然を破壊して喧噪の都市づくりに批判的な眼差しがうかがえます。例えば啄木は「かなしきは小樽の町よ　歌うことなき人人の　聲の荒さよ」と明治40年に来樽した印象を書き残していますが、物流基地であった小樽には歌を詠む風雅を感じていません。つまり啄木からすると小樽は風雅をわきまえない喧噪の街に見えたようです。

3．大正八景２＜「四季枚撰 小樽八景」小樽いろは堂発行＞

①湯殿山石山寺秋の月　②千登勢の落雁
③紅葉橋の袖時雨　④水源池夕照
⑤龍徳寺の晩鐘　⑥港内帰帆
⑦赤岩の晴嵐　⑧天狗山の暮雪

紅葉橋の袖時雨
＜小樽市総合博物館 蔵＞

水源池夕照
＜小樽市総合博物館 蔵＞

赤岩の晴嵐
＜小樽市総合博物館 蔵＞

天狗山の暮雪
＜小樽市総合博物館 蔵＞

龍徳寺の晩鐘
＜小樽市総合博物館 蔵＞

4. 昭和八景１

＜昭和27年９月５日北海タイムス「小樽八名所」
～令和３年小樽市総合博物館運河館トピック展＞

①天狗山金比羅
②オタモイ
③手宮観光地ライン
④五百羅漢
⑤銀鱗荘
⑥豊楽荘
⑦小樽公園
⑧松山逍遙道路

銀鱗荘＜小樽市総合博物館 蔵＞

豊楽荘＜小樽市総合博物館 蔵＞

小樽公園＜小樽市総合博物館 蔵＞

5. 昭和八景２＜昭和27年小樽観光協会パンフレット＞

①水天宮　②小樽公園
③金毘羅大本院　④五百羅漢
⑤松山逍遙道路　⑥手宮観光ライン
⑦オタモイ　⑧祝津日和山

6. 昭和八景３

＜2017年１月小樽市総合博物館「路地裏の貌」
昭和中期の兵庫コレクションより＞

路地　稲穂3丁目
＜小樽市総合博物館 蔵＞

外人坂
＜小樽市総合博物館 蔵＞

三角屋根の路
＜小樽市総合博物館 蔵＞

地獄坂の三叉路
＜小樽市総合博物館 蔵＞

朽木医院と富岡教会
＜小樽市総合博物館 蔵＞

色内2丁目　路地裏
＜小樽市総合博物館 蔵＞

昭和45年小樽駅前
＜小樽市総合博物館 蔵＞

船見坂
＜小樽市総合博物館 蔵＞

7. 令和八景＜令和3年元旦小樽運河　編集人撮影＞

北日本倉庫

旧日本郵船倉庫

北海製罐倉庫㈱工場

北海製罐倉庫㈱第３倉庫

旧渋澤倉庫の氷柱

運河散策路の落書き

北運河散策路雪の歩道

小樽運河公園
神が着せた廣井勇像の
白いチャンチャンコ

景観は人それぞれで違うから楽しいのではないでしょうか。ある時ある場のあなたの八景（別に八景でなくても構いません）を、プロのフォトジェニックやアマのインスタ映え問わず、積極的に切り取り、あなたの心を伝えてみませんか。

コラム 小樽の意匠

意匠とは装飾上の工夫やいわゆるデザインという意味ですが、小樽の市街地を散策するとユニークな意匠を発見することができます。すでに「デザイン・ツーリズム」なる観光もあるくらいです。意匠から時代背景を探り、造形の考え方や製作した技術から具体的な事実を知る楽しみがあります。

供用栓

水道水が全戸に普及す以前、近所の住民が共に使用できる水道として供用栓が普及します。

明治44年、給水開始時に公設100栓が設置、大正末期には498栓（公設348・私設150）で約５倍となり、昭和20年816栓（公設435・私設381）でなお増加を続け、昭和28年には931栓（公設506・私設425）とピークを迎えます。

写真のような獅子頭（ライオンの頭）の意匠は、横浜水道が創設時に整備したのが始まりです。、

ライオンはヨーロッパでは水の守り神であることからきており、それが日本に伝わって龍に変わり、龍の口ということで蛇口となったという説もあります。

小樽市のマーク（徽章）

小樽市のマークは野球ボールに見えますが、雪を表徴した六花の中に小樽の頭文字「小」を図案化、明治34年９月10日に制定されました。

運河プラザのシャチホコ（鯱）

シャチホコは基本的に装飾ですが、「火事から守る」火伏せの願望や、「恐れ入らせる」権威が込められています。

小樽雪あかりの路の浮き玉

小樽雪あかりの路のシンボルとなってきたのは、運河に400個も並ぶ浮き玉で、幻想的で暖かい風情を発信しています。この浮き玉のガラスは深川硝子工芸㈱、金具は西村板金工作所㈲、ローソクは芳川商会㈱、縄は川守田商店、重りはホウムラ㈲というそれぞれ小樽の業者がオリジナル製品製作に寄与しています。

小樽公園の顕誠塔

頂上に翼を広げた鳥が飾られていますが、「金鵄」といって勝利のシンボルです。由来は日本書紀にありますが、顕誠塔は大正13年に建立されたもので、戦没（日露戦）者を奉る17m以上の塔です。戦後に進駐軍が軍国色の濃い造型を一部変更させましたが、日本書紀の由来まで知らなかったようです。

旧川又商店の卯建

卯建は装飾と防火を兼ねたものであると同時に、富裕のシンボルや誇りの意味を持ちます。明治37年に建てられたのは同年５月の大火によります。この卯建の印下部に彫られた朝日・鶴・亀は日本古来の縁起の良い図柄です。

水天宮下の石垣

勾配のある土地に住宅を建てる場合、水平を確保するために石垣を組む技術は世界中に確認できます。小樽は坂の多い地形なので石垣のある住宅も多いのです。小樽の石垣職人のルーツは、移住してきた造園職人の石（石工）と草木（植木）を扱う２つのルーツがあるそうです。

似鳥美術館前のモニュメント ～Please Moon～

1986（昭和61）年以来毎年開催されてきたオタル・サマーフェスティバル主催の実行委員会は、９回目にあたる1994（平成６）年にファイナルを迎え、その証として会場の核となった場所にモニュメントを建立し、開催中の８月５日金曜日に落成しています。第７回目のキャッチコピーとなった「私の中にPlease Moon」からとられ、「観客それぞれの心に月明かりを」とし、「プリズム」とも読めることから虹を発光する仕組みです。

小樽オルゴール堂前の蒸気時計

メルヘン交差点界隈で組織された「彦左の会」にSL C62-3を動態復活させた工藤竜男氏が提案して平成６年に建立されました。カナダのバンクーバー・ガスタウンに設置されている蒸気時計をつくったレイモンド・サンダース氏が製作し、直に来樽し設置しました。朝の９時から夜の９時まで汽笛が発せられ、高さ5.5m、重さ1.5tで、現在世界中に蒸気時計はバンクーバーと小樽にしかありません。

ルタオ前の常夜灯

平成８年にメルヘン交差点協議会からの提言により、市有地の現在地に道路改良工事の一部に組み込んで小樽市が平成９年に設置しました。常夜灯とは燈台の前身和式灯台で、小樽の入船川河口にいかりを下ろす船舶の目印となっていました。小樽の常夜灯は明治７年５月には焼失していますが、一方洋式灯台の最初は明治16年10月16日日和山灯台で、道内では２番目にできています。

生活遺産

市場の味を伝える市民の舌

生活遺産

市場の減少

小樽には「市場（いちば）」が今も生き続けています。昭和前期（戦前戦後）は日本全国で市場が庶民の生活の多くを支えてくれる主役でした。しかし小売り形態が変化し、スーパーマーケットに主役の座を奪われ、今日では食料品以外もコンビニやドラッグストア、そして通販などの小売機能が充実していますので、市場はますます厳しい経営環境になっています。

小樽の市場軒数のピークは平成２(1990)年の25軒ですが、同時期にはスーパーが21軒もあり共存していた形跡があります。この時の人口は163,211人ですから、消費人口を満たすバランスの沸点（ふってん）とみていいでしょう。しかし令和２(2020)年には、市場が５軒、スーパーが24軒と逆転してしまいます。小樽では逆転ですが、小樽独自の特徴をみることができます。たとえば札幌をみると、昭和53年の市場数225軒をピークとすれば、昭和53～平成７年の５回に渡って札幌市が調査した市場の数は、急激な減少を見せ、平成７年には38件にまで落ち込み、令和２年には10軒そこそこにまで減少しているといいます<塚田敏信氏調査>。ですから札幌の市場減少率と比べると、小樽の市場減少率は格段に低いといえます。

ではなぜ小樽の市場減少率は低いのでしょう。別な言い方をすれば、市場はなぜ小樽市民に支えられているのでしょう。

小樽の市場の特徴

小樽はかつて「北海道の心臓」と呼ばれたように、物流の中継地でした。北海道の資源を内地に、内地の商品を全道に捌く物流港です。戦後になり樺太や満州からの引き揚げ者が小樽港に上陸します。しかしすでに小樽にも斜陽の影が忍び寄っていたため、そう簡単に収入を得るための仕事はありません。そこで引き揚げ者や移民が生業としたのは、小樽港に陸揚げされた物資や食材を鉄道に乗って内陸に運んで売る行商（ぎょうしょう）でした。

この行商は商品をブリキの箱に入れて運んだため、「ガンガン部隊」と呼ばれました。ガンガン部隊の行商もそう長くは続かず、彼らは次第に固定した店を持つようになります。もちろん小樽には戦前から市場が存在していましたが、昭和30年以後の高度経済成長に乗じてガンガン部隊の出店が集積して、新興の市場を形成するようになります。これが小樽に市場が増えた特徴的な事例です。

小樽の市場を支える市民

さて、小樽の市場減少を抑えた要因です。小樽の新鮮な食材といえば、港町ですから海産物がその代表です。新鮮な魚介類が水揚げされてすぐ食べる、いわば地産地消が定着し、地産地消で成り立つほど人口がいました。事実、昭和39年に207,000人のピークを迎えます。斜陽とは申せ、これだけの人口がいると域内循環（小樽だけでお金が回る）も活性化し、それが当たり前でした。

市場では新鮮な魚を食べやすいように三枚におろすサービスや、実際に目利きの効くおじさんやおばさんが売り役もするので、「これ甘いよ」「これ旨いよ」と新鮮な掛け声が飛び交うことは、今日も変わりませんが、実際に買って食べる消費者が鮮度と旨味を実感しています。この味を実感した消費者が継承されていることが、小樽の市場減少を抑えた要因です。

「あの市場の魚を食ったら、パックされた魚は食えない」という実感と言い伝えが脈々と生きているのです。もし観光客をもてなす機会があれば、是非市場で新鮮な魚介類を買って食べさせてあげてください。一変に小樽ファンになること請け合いです。

現存する市場を「生活遺産」というより、小樽市民の旨味を知っている実感こそが遺産であり、この遺産を親から引き継ぐことで活用されているのです。

中央市場

昭和21年、外地からの引揚者によって結成され、地元有志の方々の支援で現在地にバラックの仮店舗が建てられ、其の小間をそれぞれ借用して当初は小樽中央マーケットと言う名称のもとに、発足したのが始まりです。当該地区は市の都市計画による火災予防対策上緑地帯として策定されましたが、小樽市に対し引揚者組合員の苦哀を説々と述べ永久使用を認めて頂くべく懇願し、存続が許可されました。

昭和31年12月全棟完成

中央市場売り場

三角市場

小樽三角市場は小樽駅と国道５号線の間に位置し、名前の由来は、土地と屋根が三角の形をしていることからつけられました。昭和23年頃、小樽駅前において７～８軒の露天商がお店を出したのが始まりです。

昭和32年5月全棟完成

三角市場売り場

南樽市場

昭和初期、小樽市若松館(映画館)前通りにて露天商を営んでいた方達が昭和13年露天商規正法、また、北海道の救済法(北海道非条令)によって、北海道内一号店として昭和13年６月、高砂１丁目(現在若松２丁目）に高砂市場が建設されたのが前身です。終戦後昭和24年、戦前高砂市場の執行部の貢献で、地元商業者及び樺太引揚者救済のため昭和24年市場を建設、そして昭和43年12月に現在の市場が完成しました。

昭和４３年１２月全棟完成

南樽市場売り場

南樽市場の鮮魚

新南樽市場

平成９年にマイカル小樽(現ウイングベイ)が進出すると同時に、南樽市場有志が核になり、大きな駐車場を整備して誕生しました。

平成11年9月全棟完成

新南樽市場の売り場

鱗友朝市

現色内３丁目と北運河周辺は手宮の漁協が近く、新鮮な魚介類が集積し仲買も大勢駆け巡っていたことから、自然発生的に朝市が開設されたのが始まりです。

昭和28年1月全棟完成

入口の食堂

入口の食堂

コラム 小樽史のハードディスク

小樽の歴史は様々ですが、それぞれ関連があるから現象として紡がれてきました。下記の図はその概略を示しています。小樽の歴史的出来事を小樽人はいろいろと聞かされてきました。「鰊がすごく獲れた」「北前船主は大いに活躍した」「北海道初の鉄道が敷かれた」などを、体系的に記憶するハードディスクとして描いたものです。したがって「そのエピソードはここに収納しよう」と役立てていただければと存じます。

しかし、たとえば「鰊」は昭和30年まで獲れていますし、港は今も開発されていますが、この図は時代ごとのエポックとご理解ください。

見方は横列に、「時代」を記し、縦列の「需要」は当時の社会的需要を示し、その需要に対し小樽は何を「供給」し、どんな「方法」で対応し、その結果小樽には何が「蓄積」されたか、そして小樽全体はどんな「姿」だったかを示しています。

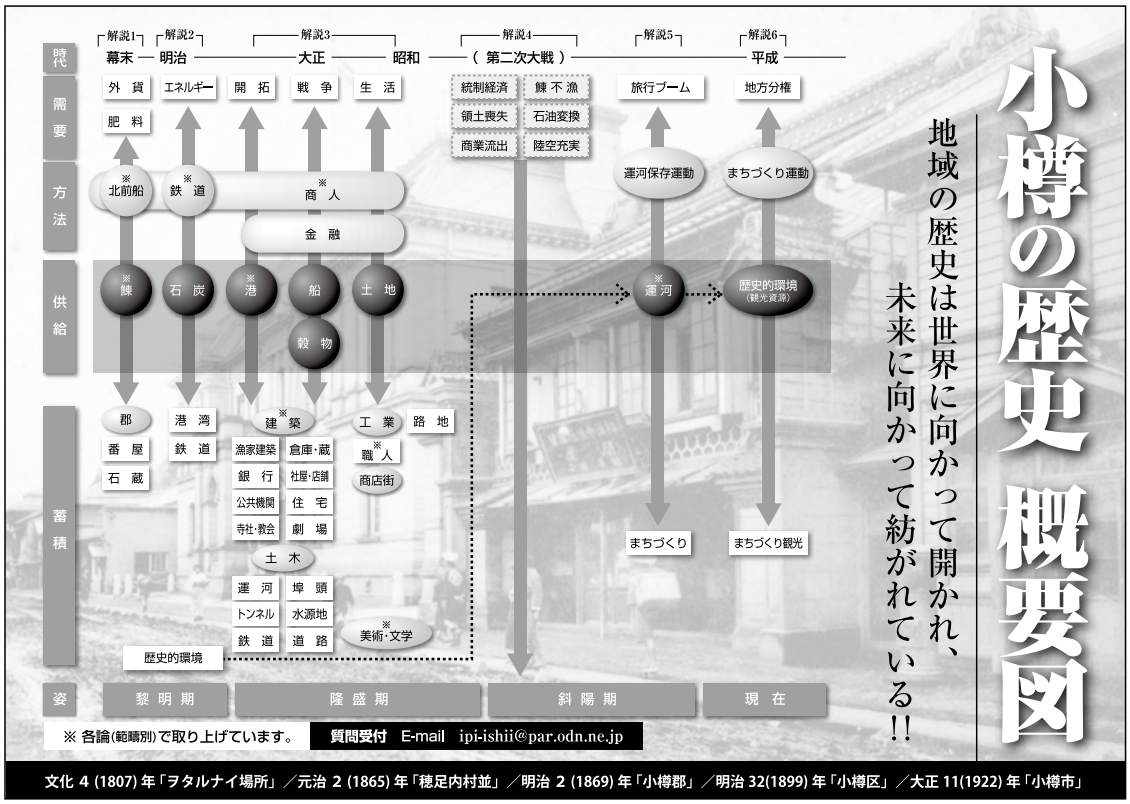
この図は「おたる案内人」で使用する資料として提供されたものです。

「小樽の歴史は世界に向かって開かれ、未来に向かって紡がれている」とサブタイトルにありますが、地域は孤立して存在するものではありません。とくに小樽は商業で殷賑を極めましたので、国内はおろか海外との貿易にも敏感に行動したことから「世界に向かって開かれ」、さらに過去に蓄積されたたとえば歴史的建造物が再生されて観光に提供されていますので、「未来に向かって紡がれている」のです。

こうして小樽史を概観すると、小樽観光はなるべくしてなった、とさえ思えてきます。どこかで流行ったものを、根も葉もなく、取って付けたように移植するのではなく、小樽が紡いできた自らの歴史を小樽らしく開花させたからです。

竹原ピストルの歌に「君の絵はヘタクソだね 僕の絵は上手だよ　比べるな　比べるな」とのフレーズがあります。また縄文人の考え方は「比べない融即律（ゆうそくりつ）」だったと大島直行氏は考察しています。

私たち現代人は情報が洪水のように流れ込むような時代に生きていますので、日々それらを選択する時間に追われ、つい比べることが考えること、と誤解しがちになっています。だからこそ今、自己を見つめ縄文人に学ぶことも重要なことです。もちろん地域は個々人の考え方の結晶ですから、現在の小樽観光は過去を見つめた開花とすれば、誇りに感じていいのではないでしょうか。



小樽史のハードディスク

映像遺産

映画・ドラマのロケ地

映像遺産

小樽は「絵になる街」です。山と海に加え、古い街並みが残り活かされているからなのでしょう。街並みをつくる小樽人に「ロケ用に」という動機はなくても、観光客にとってロケ地は訪れて観たい動機があります。小樽のロケ地はここに掲載した以外の場所でも多くの作品で露出されてきました。観た映画やドラマの感動を、今一度蘇らせる動機で、小樽へ訪れる観光客は少なくありません。小樽に最も多くを呼んだのが『Love Letter』です。韓国でも1999年に放映されたこの映画によって、韓国から多くの観光客を呼び、リバイバル効果もあって、韓国からの宿泊人数は、2015年16,594人、2016年26,742人、2017年46,380人、2018年54,847人、2019年25,782人と、現在(2020年)は中国・香港・台湾に次ぐ第４位をキープしています。

ロケ地巡りは小樽人が意識していなくても、来樽する観光客の動機になっていることから、小樽が誇る観光資源の大事な付加価値といえます。

映画・ドラマのロケ地

●手宮線／化生の海、天国と地獄、はるか、ノスタルジィ、天国の本屋～恋火

●ＪＲ小樽駅／はるか、ノスタルジィ、真昼の月、ハルフウェイ、探偵はBARにいる

●小樽運河／最も遠い銀河、海の上の診療所、分身、化生の海、真昼の月、はるか、ノスタルジィ、逢いたい時にあなたはいない、さよならの女たち

●旧寿原邸／Love Letter

●船見坂／最も遠い銀河、Love Letter、はるか、ノスタルジィ

●外人坂／さよならの女たち、はるか、ノスタルジィ、真昼の月

●旧日本郵船／化生の海、Love Letter、しあわせのパン

●**北一硝子**／天国と地獄

●**高架下商店街**／天国と地獄

●**メルヘン交差点**／天国と地獄

●**坂牛邸**／ Love Letter

●**小樽市役所**／最も遠い銀河、Love Letter

●**北運河**／化生の海、天国と地獄、はるか、ノスタルジィ

●**旭橋**／天国と地獄

●**色内交差点**／ Love Letter

●**カトリック小樽教会住ノ江聖堂**／化生の海

映画・ドラマ概要

■**『さよならの女たち』** 1987年　映画
監督：大森一樹　主演：斉藤由貴

■**『はるか、ノスタルジィ』** 1992年　映画
原作：山中　恒　監督：大林宣彦
主演：勝野　洋、石田ひかり

■**『Love Letter』** 1995年　映画
監督：岩井俊二　主演：中山美穂、豊川悦司

■**『真昼の月』** 1996年　テレビドラマ
脚本：遊川和彦　主演：織田裕二、常盤貴子

■**『天国の本屋～恋火』** 2004年　映画
監督：篠原哲雄　主演：玉山鉄二、竹内結子

■**『天国と地獄』** 2007年　テレビドラマ
監督：鶴橋康夫
主演：阿部　寛、佐藤浩市、鈴木京香、妻夫木聡

■**『探偵は BAR にいる』** 2011年　映画
監督：橋本　一　主演：大泉　洋、松田龍平

■**『しあわせのパン』** 2012年　映画
監督：三島有紀子　主演：原田知世、大泉　洋

■**『最も遠い銀河』** 2013年　テレビドラマ
原作：白川　道
監督：和泉聖治　主演：三浦友和、風吹ジュン

■**『化生の海』** 2011年　テレビドラマ
原作：内田康夫「浅見光彦シリーズ」
主演：沢村一樹

※まだ多くの映像がありますが、一部はコラムでも紹介しています。

～おわりに～ Epilogue

NPO法人 歴史文化研究所
副代表理事　石井　伸和

まずもってNPO法人OBM様にこのような使命を頂いたことに心から感謝申し上げます。

文献、資料、謄本などから新たな調査をする中で、「へぇーこういう人物がいたのか」「なるほど彼と彼はこういう関係があったのか」など多くの事績を発掘できたことは、この上ない驚きと感動の連続でした。さらに識者や末裔の方々からも貴重な情報をご提供いただいこと、取材したお店の皆様にチェックを依頼し、快く応じていただいたことに、重ねて感謝を申し上げます。

私たちの着想において、他所での流行を我が街にも取り入れようとすることは「視点の広さ」の意味で否定しませんが、歴史の中にも未来へのヒントが埋もれていることも「視点の深さ」の意味で、まことに大切な方向だとあらためて実感しています。

「未来へのヒント」たとえば、今の時代では「SDGsを目指そう」と世界的に警鐘が鳴らされていますが、小樽の歴史的エピソードを調べ研究する中で「この人物は地域の自立を講じていた」「この人物の経営方針には弱者への温かい視線があった」「彼には小樽や北海道を超えて日本の近代化の先端を見つめる誇りがあった」など、十分にSDGsが示すそれぞれの課題に、すでに挑戦していたことが見えてきました。つまり過去のことでも現在に通じるエキスを拾うことができました。

また地域の歴史のおもしろさは、当時の世界情勢の中で小樽はどんな対応をし、何を残したかも、歴史のダイナミズムを感じることができます。たとえば今日の新型コロナのパンデミックに対し、港町で観光都市の小樽はどう対応しているかは、隣の札幌や余市とは明らかに異なるはずです。なぜ小樽はそうしたかの選択肢と判断に、歴史的に培われた遺伝子が大きく作用していることも伺い知ることができました。

こういった法則性も未来へのヒントになると感じていますし、いわゆる「温故知新（おんこちしん）」「脚下照顧（きゃっかしょうこ）」が示す意味の深さを実感できます。

さて観光客の皆さんに、再生歴史的建造物の案内をする際に、案内する側に、たとえばこういった先見の明への感動があるかないかで伝わり方が大きく違ってくるものです。是非とも知識と同時に皆様自身の感動を込められることを心から願ってやみません。

令和３(2021)年３月

引用文献 参考資料

＜五十音順＞

●『おたる案内人』
小樽観光大学校発行　2006年
特定非営利活動法人歴史文化研究所制作

●『小樽學』
特定非営利活動法人歴史文化研究所発行　2009年より月刊

●『小樽の銀行小史』
小樽市博物館紀要　2003年　渡辺真吾著

●『小樽区実業家百撰立志編』
田尻稲堂編 1903年

●『小樽経済百年の百人』
北海タイムス社発行　1965年

●『小樽豪商列伝』
月刊おたる発行　1965～1969年　脇哲、里舘昇著

●『小樽市史第一巻』小樽市発行　1958年

●『小樽商工名録』小樽商業会議所発行

●『小樽新聞』小樽新聞社発行　1894～1942

●『小樽高島明細書』
小樽高島会所における、旧幕時代の慶応３年から
箱館府時代の明治２年までの詳細な出納明細書

●『小樽の建築探訪』
北海道新聞社発行　1995年　小樽再生フォーラム編集

●『小樽の歴史的建造物』
小樽市教育委員会発行　1994年
日本建築学会北海道支部編集

●『小樽便覧　大正4年』十一州社発行

●『小樽歴史年表』
特定非営利活動法人歴史文化研究所発行　2006年
渡辺真吾著

●『株式会社スハラ商事百年の歩み』
スハラ商事株式会社発行　1981年

●『旧三井銀行小樽支店の創建資料と現況の比較』
1995年　駒木定正著

●『旧三井銀行小樽支店の創建資料について』
2005年　駒木定正著

●『北海道銀行大商店辞書』
北海道銀行会社大商店辞書編纂事務所発行　1916年
金子郡平・金子信尚共著

●『近代商業建築を観る
旧日本郵船株式会社小樽支店の再生』
INAX発行　1992年　北川佳枝著

●『嶋谷海運業史』嶋谷徹発行・著　2014年

●『後志学　後志鰊街道』
後志鰊街道普及実行委員会　2005年
特定非営利活動法人歴史文化研究所制作

●『後志の酒造小史』
後志･小樽酒類製造業者活性化協議会発行　2001年
渡辺真吾著

●『末広稲荷説明板』
渡邊悌之助
「小樽文化史」「小樽運河史」等執筆

●『日本銀行小樽支店の主要構造と仕様』
1995年　駒木定正著

●『ねっとわーく小樽』
どうしん小樽販売所会（三日会）発行
2014～2019年　ウィルダネス編集

●『北陸銀行創業百年史』
株式会社北陸銀行発行　1978年

●『北陸銀行20年史』
北陸銀行調査部発行　1964年

●『北海道人名辞書』
北海民論社発行　1923年　金子信尚編

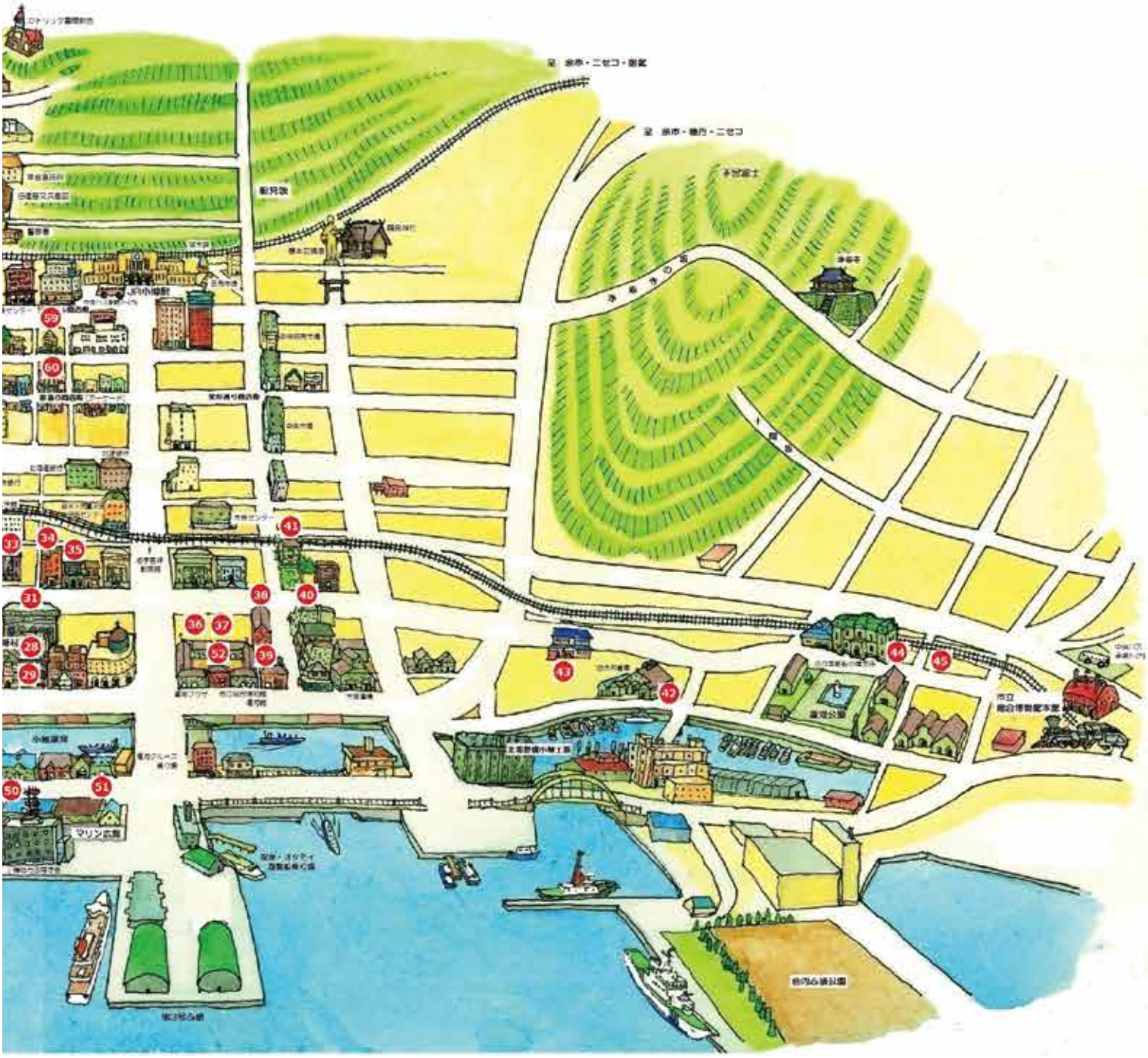
●『日本郵船歴史博物館』
日本郵船株式会社発行　2005年
日本郵船歴史博物館編集

●『ブリタニカ国際大百科事典』
TBSブリタニカ発行　1972年

地図

（本稿関連地図）

国道５号
至 札幌
至 小樽商科大学
小樽公園（紅葉山）
FMおたる放送局
稲ヶ丘
鴨ヶ丘
祝ヶ丘
船上山
地獄坂
高山
永天池
メルヘン交差点
駅前通り商店街
日銀行前
第２号小橋
港町小橋



イラスト：笹原　馨

写真協力

＜五十音順＞

団体

アンワインドホテル、ＩＳＯ、岩内町
おたる潮まつり実行委員会
小樽オルゴール堂、小樽観光大学校
小樽市広報公聴課、小樽商工会議所
小樽商工会議所港湾振興プロジェクト
小樽倉庫、小樽市総合博物館、小樽市立図書館
小樽100年プロジェクトセミナー実行委員会
NPO法人小樽民家再生プロジェクト
JR北海道 札幌保線所小樽保線管理室
神恵内村、標茶町、スハラ食品
北陸銀行、北海道開発局小樽開発建設部
北海道立文書館、北海道大学 附属図書館
余市水産博物館

個人

安念　美幸、　井上　雅博
奥野　義典、　川嶋　王志
佐藤　圭樹、　志佐　公道
嶋谷　　徹、　竹内　勝治
山下　紘由

マップイラスト

笹原　　馨

北海道の『心臓』と呼ばれたまち
OTARU

北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽
―小樽市公認ロゴマーク―
2021年決定

小樽の歴史を広くPRするために市民投票で決定しました。
普及啓発にご協力いただける方は無償で利用可能です。

着地型観光商品づくりのための

素 材 集

Tourism material collection

企画・発行：NPO法人 OBM（Otaru Branding & Marketing）
〒047-0032 小樽市稲穂２丁目22番１号 小樽経済センター６F
TEL・FAX：0134-24-2161
E-mail:obm@sun.ocn.ne.jp

発 行 日：令和３(2021)年３月25日

特別協力：小樽商工会議所

監　　修：石川直章、駒木定正、高野宏康

協　　力：大鐘卓哉、川又隆司、笹原　馨
竹内勝治、塚田敏信、山下紘由

調査・執筆・編集：特定非営利活動法人 歴史文化研究所

印　　刷：株式会社 石井印刷

定価　1,500円(税込)

NPO法人 OBM

Otaru Branding & Marketing